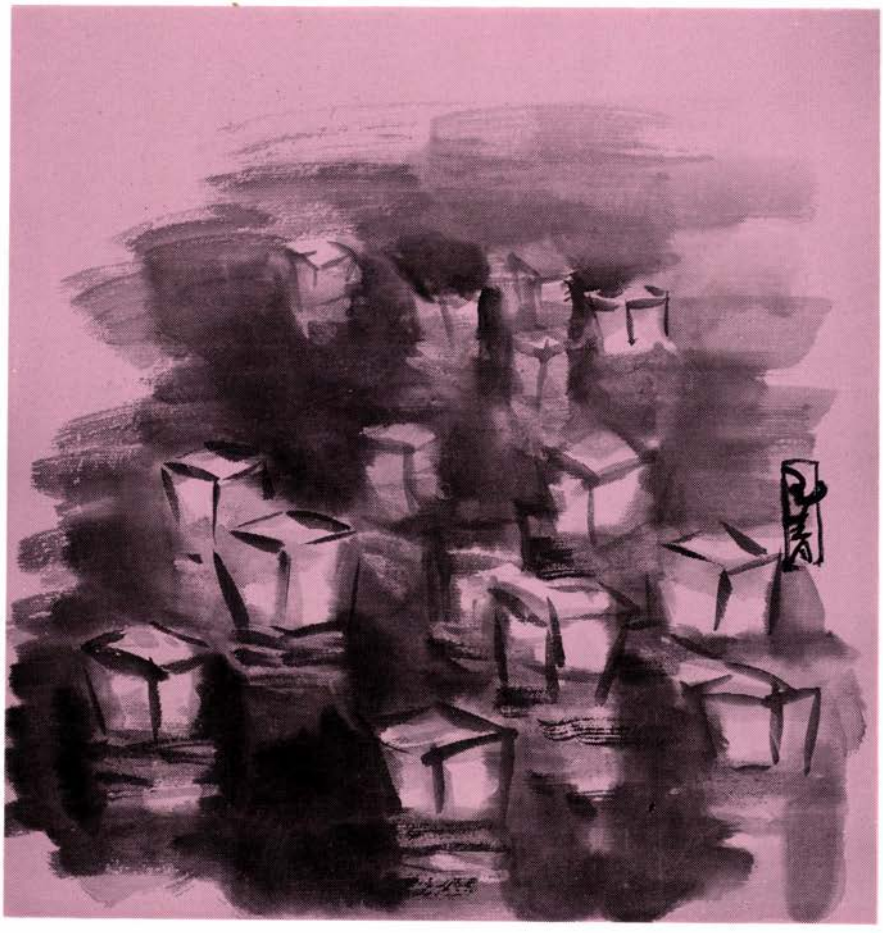
川柳塔

昭和六十二年 八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七一三号

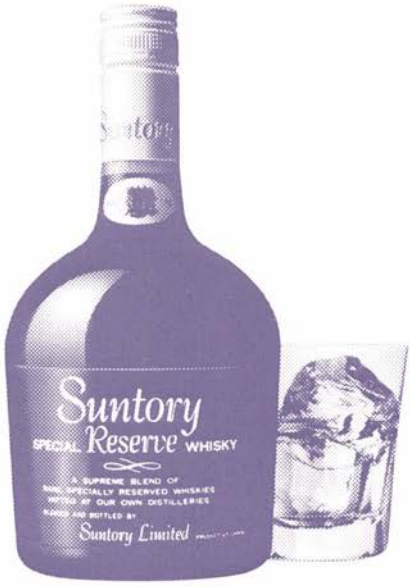


日川協加盟

No. 723

八月号

美しいものは長い時間に磨かれ
ゆっくりゆっくり育まれていきます。
選びぬいたモルトの深さと
豊かなボディが
鍛えられた舌をうならせるリザーブ。
まろやかな一滴一滴から
静かな余韻が生まれていきます。



サントリーリザーブウイスキー
一六〇四三二〇円（標準的な小売価格）製造・販売サントリー株式会社

高橋操子第二句集

万年青

頒価 二、〇〇〇円
送料二五〇円

（申込先）岸和田市土生町一九八九―八
高橋 操子

土居耕花川柳句集

やっこ凧

頒価 一、五〇〇円
送料二五〇円

（申込先）岡山県英田郡大原町笹岡
土居 耕花

野村太茂津編著

川柳はまゆう

―朝日新聞和歌山川柳壇のあゆみ―

頒価 一、五〇〇円
送料二五〇円

（申込先）和歌山市美園町二―二一 西山 幸

〝川柳わかやま〟二百号記念

句文集 あおい海

頒価 二、五〇〇円
送料共

第二集

（申込先）和歌山市鷺町一五
野村太茂津

天候

西尾　栞

記念大会を開催して、当日の天候の良し悪しが、会の消長に関係するので、主催者が気をもむことしきりである。七月四日、五日の追悼川柳大会は梅雨がまだ明けきっていないので心配だった。

七月四日高野山駅午後一時集合の観光組は四時頃、大変良い観光日和だったというて帰ってきた。それから次々と一泊組の方が到着されて、夕御飯の時は係から百二十名という発表であった。夕食後湯に入って、寝床にごろっとする頃から雨の音が軒端をたたいた。夜中には風を混じえた雨足が強く、しきりに樋が鳴って明日本番の天気に心を痛めた。

ところが一夜明けると、嘘のように上天気になっていたのには正に愕きであった。

この度ご法要申し上げた御三方の故麻生路郎、葭乃両先生は有名な天気ご夫妻で、故生々庵先生はこれまた雨男の代表のような方だった。だから、この度の追悼句会は、天気、雨、天気という状況で司会者も挨拶する者もそれを口にした。

五日午前六時半、山気みなぎる高野山の仏堂で、厳粛なる法要を無事すますことの出来たことは洵に有難く、茲に謹んで篤く御礼申上げる次第である。

一時〆切後、普賢院の御前さん（八十九歳）の洒脱なお話をきいて、兼題の披講に入ったが、番傘本社主幹をはじめ、ふあうすと社主幹、時の川柳社主幹の応援を得て、無事盛会裡に終了した事は、ひとえに柳社各位の温い御心のお蔭と深く感銘致しております。

ご参加下さいました二百五十名の方には、高い階段を登って、はちきれんばかりの和室の会場で、ご辛抱下さったことを心からお詫びと御礼を申上げる次第である。本当に有難うございました。あの階段も今暫く噂となって思い出話になることでしょう。

今一度皆さん有難うございました。

合　掌

座右の句

春ざわざわ　一級河川まだ眠り　（史　好）

私の句

早く逃げる子が的になる鬼ごっこ　川上より子

川柳塔　八月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

天　候……西尾　栞……（1）
日中戦争と鶴彬……田中正坊……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（28）
■川柳太平記(111)　川柳の群像　住田乱耽……東野大八……（32）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（三十一丁）……（34）
水煙抄……黒川紫香選……（36）
秀句鑑賞
同人吟……遠山可住……（31）
水煙抄……嘉数兆代賀……（53）
愛染帖……橘高薫風選……（54）

日中戦争と鶴彬

田中正坊

最近、こんな話を聞いた。私の知人が若い人たちの会合に招かれ、中国における戦争体験について話した。おわってから一人の女子学生が「今日はびっくりしました。私は今まで、日本が中国と戦争したことを知りませんでした」と言う。「これには私のほうがびっくりした」と知人は語っていた。

今年は、日中全面戦争の発端となった蘆溝橋事件の五十周年にあたる。日本と中国との戦争は、それをさらに六年さかのぼる一九三一（昭和六）年の柳条湖事件を契機とする軍事行動、いわゆる満州事変から敗戦まで十五年間にわたって行われた。中国全土に戦禍を及ぼし、千数百万人にのぼる中国の軍民を殺傷した日本の歴史はじまって以来の大戦争である。

直接、戦場には立たなかったものの、私も帝国陸軍の一兵士としてこの戦争に参加したという体験は、終生、心の痛みとして消えることはないだろう。戦争体験の風化がつたえられ、ふたたび軍靴の音が高まろうとしている今日、四十二回目の八月十五日を迎えるに

〈女性コーナー〉茴香の花……小出智子選…(58)
麻生路郎・葭乃、中島生々庵追悼川柳大会……(60)
嗚呼　入澤寿恵さん……園山よし子…(68)
初歩教室……阿萬萬的…(70)
「盆」……小野克枝選…(78)
一路集「闇」……林　荒介選…(78)
「庭」……山根いつを選…(79)
柳界展望……(80)
各地柳壇（佳句地10選／松川杜的）……(90)
■8月各地句会案内　101　■編集後記　103

座右の句

幼な子も思いを遂げた顔はよし　（薫　風）

私の句

百点をもらって急ぐランドセル

福　元　みのる

あたって、どこまでも戦争にこだわりつづけ平和の誓いを新たにすることが、戦争を体験した世代のつとめではないかと思う。

ところで、世がとうとうとして戦争賛美に流れ、文芸さえも戦争に協力させられた暗い谷間の時代にあって、敢然として戦争に反対した川柳人がいる。その人、鶴彬は本誌の六八九号（昭和59年10月）の「川柳の群像」にも紹介されているように、十七歳で作句をはじめ、二十九歳の生涯をとじるまで数々の反戦句を残した。

特に蘆溝橋事件が起こった年の作品―

召集兵士土産待つ子の夢を見る
稼ぎ手を殺してならぬ千人針
高粱の実りへ戦車と靴の鋲
屍のゐないニュース映画で勇ましい
万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た
手と足をもいだ丸太にしてかへし

は、戦争を批判して痛烈だが、これらの句を掲載した『川柳人』は発禁となり、鶴は特高警察に検挙され、翌年、獄死するに至る。

その不屈の業績はもとより称えられるべきだが、彼を一貫して庇護した井上剣花坊、そして夫の死後も鶴を支援しつづけた井上信子の存在も忘れられてはならない。このような気骨のある、すぐれた先輩を持っていることを、川柳人の一人として誇りにしたいと思うのである。

川柳塔

西尾栞選

島根県　西村早苗

手のひらに何かまじない書いてある
偶然にしてはおかしく思わぬか
パンを焼く今日はダンナが先に起き
さりげない素振りはキット好いている
見のがしてくれたは妻だから言える
まっすぐに帰って開ける冷蔵庫

奈良県　宮口笛生

新幹線広く座った雨季の旅
近江路の田が青々と梅雨に入る
新幹線身重の女によく揺れる
年金の暮し戦列からはずれ
人生の二幕目遊んでもおれず
仲悪い母屋隠居という仲で

熊本市　有働芳仙

恋人の好みに舌が合ってくる
ライバルのブランドの差へたじろくな
日本人日本のことをよう知らず
八月の雲戦友の顔が浮き
あれからは自分の部屋もノックする
合鍵へ冷たい秋が吹き始め

八尾市　高杉鬼遊

老年の序章に恋をしてみたら
自転車に乗れます職を下さいな
地獄から逃げる仏の縄梯子
ロッキングチェアが過去の海を見る
椅子とりゲームへ短い足がぶらさがり
限りあるいのちなのです夫婦草

大阪市　西出楓楽

待つことに慣れて上手に豆を煮る
土曜日の夜は時間が軽くなる
トラバーユの果てに戻った台所

針のない時計も刻をきざみます
ドラマなき青春バイトとマージャンと
雨しとど芋づる式になる小言

竹原市　小島蘭幸

妻の眼鏡ときどき恐いことを言う
お寺さんと一対一で飲んでいる
いつ来ても菖蒲に雨が降っている
挑戦状しばらく妻の視野に置く
一生懸命そして神様ありがとう
手花火の中に長女も次女もいる

堺市　高橋千万子

解禁日不運の鮎がもう焼かれ
芸術か味覚か鯛の活造り
ご用きき酒の恨みを聞きあきる
出おくれた私に温い仲間の手
一匹のネズミへ開けた非常口
十円を誰も拾わぬ交差点

桜井市　岩本雀踊子

自分史のページの嘘に蹴躓き
過去のしみソーッと洗っている女
雑巾を縫ってる良妻賢母たり
チョロチョロとトカゲがまいた蛇苺
死ぬ時のエクボ女は大切に
何代目かの夫婦茶碗を買って来る

松原市　谷垣史好

古い男にマクドナルドは小租界
成吉思汗の四文字胸に滾るもの
ウインクはなんだ不二家のペコちゃんか
クーラーが嫌いな壁の達磨さん
銷夏法の一つ赤川次郎読む
夏よくたばれヴィヴァルディの「四季」

岡山県　土居耕花

つばくろよお前も土が性に合い
貧乏神がペンペン草を蒔いて行く
花粉症などときれいに言うてくれ
牛乳を飲むと尻尾を意識する
御破算でお願いします梅雨の空
死ぬ時に恐おわい顔はせぬ様に

堺市　中川滋雀

転がって行く消しゴムが弾んでる
腹ペコの昔は豊かな夢を見た
月昇る黙って歩く影でよい
こんな時酔うてゴマかせたらと思い
もの足らぬ茶のみの仲で長続き
妻の目を盗んでわくわくするもよし

弘前市　波多野五楽庵

幽明の境で医者を困らせる
風下に馴れてしまった女傘
ニコチンに肩身のせまい席ばかり
病室の壁で覚悟をする暦
もう一本つけたしておく躾糸
そして今日も老眼鏡をポケットに

京都市　都倉求芽

声染めて告白をする青葉蔭
野菜にも英才教育がありハウス
ひと言にこの道急に坂になる
急くこともないのにやっぱり特急車
酒をのむ時しか逢えぬ人が居る
ジューンブライド記録的暑さを裾模様

寝屋川市　稲葉冬葉

せせらぎのいくたび髪を梳きにくる
お願いだから妻にしたいと言わないで
されど川柳いのち燃えて候
街角にまだ貼ってある犬さがし
殿様カエルふる里は雨季になる
浪曲をボリュームさげて聴いている

和歌山市　福本英子

深い意図持たぬメダカが群れている
ひたすらに城を守って背かれる
梅雨嬉し菖蒲紫陽花どくだみの花
青春日記の涙の跡も嬉しがり
真昼の街で人も車もふっと消え
朝早いベルが運んできた朗報

岡山県　嘉数兆代賀

生きざま死にざまさらしたくない神詣り
つまずきながら歩くほかなきおんなみち
戻れない橋がわたしの視野にある
寝返りを打てばあの日の貨車がいく
砂時計の砂に企みなどはない
野火も花火もやがては闇となる怖さ

兵庫県　遠山可住

計算機うちのと税務署のとちがう
還暦へ帳尻が合う顔のしわ
初夏の風三割引を待っている
出不精になるカタカナと自販機と
にんげんの嘘を石鹸聞き飽きる
命日は酒の話をしておくれ

京都市　松川杜的

嫌いなものの一つに銀行屋
古稀の習い事にもライバルが居て
薪能王朝の色に夕焼ける
茶飲み友達と他人さんみてくれず
孫の守り良寛さんになりきれず
年金の残何時もゼロそれでよし

八尾市　宮西弥生

冷めしをあたためたしかなる独り
古都の鐘たしかに聞える梅雨晴れ間
引越しのくらしは変らぬサンマ焼く
ストレスは女がもってる大ジョッキ
世間は鏡だから狂わず生きている
ふり出しの気持が好きな自立心

和歌山市　西山幸

いちにちの覇気へふらんすパンを買う
種のあるぶどうを食べている安堵

梅雨籠りそろそろ脱皮したくなる
遠い日の遠いこころに遇う曝書
ハンカチも二枚本音とたてまえと
それからの話へ雷雨おさまらず

名古屋市　越村枯梢

明日は知らぬ今日一日の蟬しぐれ
ひそひそ話夜の階段降りてくる
新畳にある感触よ妻は古り
人生を唄って歌手のドサ廻り
形見分け手筈を決めて病んでいる
天気予報狂って茶の間のにぎりめし

倉敷市　野田素身郎

人生の肥やしとなった酒煙草
ごきぶりへ妻は闘志を掻き立てる
板に付く年金暮らしのベレー帽
泣く人もいる病院の赤電話
週休二日うち一日はパチンコ屋

下関市　石川侃流洞

蓑虫が家から出てる弾み過ぎ
背と背物言う日あり嗚呼夫婦
メス 鋏 おでんのように煮えている
結び目を切ったら解けるわだかまり
上を見て歩くと石に蹴躓く

柳井市　弘津柳慶

プッツリと絆断ち切り再起する
駅で別れてオデン屋で又出会い
合格へ今日から一線に並べられ
頑固一徹お好きなようにやりなはれ
一筋の恋あっさりとそむかれる

伊丹市　樫谷寿馬

便箋の裏眼鏡を拭いて読む
バーゲンの小さい傘でゆく二人
摺り硝子の瓶で冷酒の冴えた酔い
ナマと生れた喜びの汗大ジョッキ
とぼけてなど居れない古稀の指人形

倉吉市　奥谷弘朗

あの人は他人ではない趣味の友
見通しの確かな割に運がない
胸張って大手を振って歩く幸
適当に飲めない酒を妻案じ
人様の痛みの解るいい御人

平田市　久家代仕男

蝶になるまでの苦労は知らぬ花
日の盛り蝶のむくろを担ぐ蟻
ライバルの意見小骨を意識する
古きよき友を忘れぬ途中下車
気負いない暮し一日ずつを生き

松原市　玉置重人

免罪符延着証明持ってます
ありがたいことに毎日用がある
豆ごはん夫婦の話題恙なし
ストレスの溜る電話がよくかかる

免許証私の人相悪すぎる

島根県　堀江正朗

掌に触れる花のこころと闇に生き
頑張れとこづいて風は通りすぎ
見える気になり人並みに語りあう
闇無限どっち向いても通せんぼ
風鈴は佐渡の土産の音で鳴り

大阪市　西森花村

おもろい奴おれより阿呆と思わねど
トラピストの夢より今はタイピスト
長生きしいや又日本人ひもじい日
口下手に財布の中が気にかかり
わが人生わが通帳よあとが無い

守口市　羽原静歩

子規を憶う（二句）

落花落日子規山脈の風の音
俳聖も歌聖も哭けよあずま菊
集い来て法事の膳がうとましい

原爆忌

雲白く流れて葉月の祈りかな
遍路笠コカコーラをぐい呑みに

豊中市　安藤寿美子

もがいてももがかなくても時流れ
もう一寸そっちへ行ってよ石燈籠
怪獣を壁にかいてる梅雨の漏り
同窓会先輩若々しくてシャク

あこがれた恩師八十握手する

竹原市　森井菁居

石仏に先祖の貌が見えかくれ
ストレスを払うに冷やしうどんなど
紫陽花といる非番日は雨も良し
サルビアの情熱夏の陽を弾く
かびを生やした飽食の冷蔵庫

今治市　越智一水

母と娘がバカバカ言える美しさ
つまずいて見直す石に教えられ
灯をひとつひとつともして明日へ燃え
ほどほどに枝をいじめて咲かす花
美しく老いたし鏡今朝も拭く

東京都　増田次章

今死ねぬ中途半端なことばかり
うちあければみんな一病持ちあわせ
山海の珍味よやはり妻の味
罪は遺産あそこも兄弟仲違い
善い人で礼儀正しく敬遠し

島根県　小砂白汀

灼熱の愛をカンナのためらわず
原爆忌夾竹桃がまだうめく
くちなしの純血通した花の色
老妻の病んでひとり芝居の舞台裏
古里の月を跨がす水たまり

美禰市　安平次弘道

科学者の意地が奇蹟へ妥協せず
銀行のティシュを貯めて中流で
日本語が乱れオウムの失語症
信号の赤反省の時をくれ
葱坊主が笑い道草したくなる

大阪市　天正千梢

海綿のような男で旗頭
世間さんにたかをくくった落し穴
新聞で包んであるのでもらっとく
「時代が違う」ひとことでにげを打ち
言葉までインスタントの世の中さ

鳥取県　川崎秋女

究極の哀しみ森の樹が枯れた
究極の喜びという鯉のぼり
葱坊主天に向って主張する
いい話でた日コーヒーがうまい
美しい挽歌にしようドレミファソ

松江市　恒松叮紅

ロボットにまだ侵されぬ墨を摺る
電話ベル鳴らず一日降りやまず
年金の生甲斐汗を出す仕事
均等法まだ席順がある宴
亡妻の忌を済ませて何故か鬱になる

松江市　柳楽鶴丸

ヌードというドレスを持っているスター
フィーリングはよいが意外に保守的で
アメリカの空にもつばめが翔んでいた
ドレミファソ五線譜にない初夏の風
日本語も英語も同じ笑い声

松江市　舟木与根一

おふくろは達者で届く茶摘唄
宅地なみ課税は知らぬ葱坊主
鉄冷えの街でロボットのさらし首
父の日は粗大ゴミにも陽が当り
嫁でなく孫が言うから我慢する

唐津市　久保正敏

犬釘を抜いて過疎地にしてしまう
小細工をマルサの女見逃さず
七夕へまだ書き捨てぬ恋の文字
晩酌で内需拡大しています
慟哭の島に炭車が裏返る

唐津市　仁部四部

我慢我慢酒も煙草もとめぬ妻
おっくうを我慢強いとほめられる
そのうちに我慢の甲斐で共白髪
大いなる猫背我慢ができた人
我慢してひいた辞書から虹が立つ

唐津市　浜本久仁於

SLの頃がなつかし赤帽子
トンネルの裏へ千尋の海があり
海越えて父母なる国へ黄砂吹く
口下手の男の耳は聞き上手

落人の儚い夢か盆踊り

和歌山市　堀端三男

グリーンに溶けると古稀もまだ若し
薬包紙つる折る指が透き通る
隙間風吹いて雑巾乾き出す
耳鳴りとして故里の風を恋う
街頭募金見ると母さん入れにゆく

和歌山市　松原寿子

精いっぱいの慕情あなたへ傾ける
一瞬のためらい溶かす海の蒼
横糸をたよりに夢を織り上げる
約束のきっとへ賭けた日の余韻
シナリオを器用に変えて生きる女

和歌山市　内芝登志代

控え目の母が説いているいろは
ひいき目が大事な道を狂わせる
何時来てものんびり出来る母の部屋
名も知らぬ人と気が合うローカル線
日めくりは其の日その日のドラマ見る

和歌山市　垂井千寿子

喪の列の側でカンナの朱が炎える
いつかわかるいつかわかると老いてゆく
良心を売ってるうちは繁盛し
よろこびも哀しみも浮く洗濯機
ネクタイに夫の戦と枠がある

和歌山市　牛尾緑良

陽が昇る人を赦すのなら今だ
やがて墨絵に枯れる旅路をいとおしむ
盃がまわるこの世がまわるごと
ネクタイをしないで飲める妻の酌
海鳴りや少女は恋を生みに来る

和歌山市　福井桂香

あの人も眼鏡を拭いて見なおそう
ヘルメットも服も赤くして走る
赦し合わねばもっとみじめな五月雨よ
笑い合えばなんと豊かな心の輪
母のこと何も語らぬ北斗星

和歌山市　後藤正子

日付ゴム印私の位置がずれている
雨あしの速さ迷いは沈めよう
好きになった理由を何度でも言おう
歳月に溶かして生きてゆく痛み
風に光に愛ふくませて届けよう

米子市　小西雄々

三世代住んで明るい語が弾み
小走りに煮豆が隣から届き
子の彩にいつしか溶けてわらべ唄
プライドの角がぶつかる鬼女と魔女
闘争の声むかしほど疼かない

米子市　林荒介

海までは道のりのあり花筏
ネクタイの結び目あたりに棲む妻子

目線には洗濯物が干してある
半眼になれば故郷の蕗わらび
争った枕ふたつが重くある

米子市　林　瑞枝

アングルを変えると見えてくる美点
台風が近づく有頂天の背なに
森を出て赤いポルシェの影を追う
怨ばかり詰めた胸から鳩は出ぬ
修羅くぐりようやく取れた目の鱗

米子市　石垣花子

女一人厚いノートに支えられ
出会いから心はなさぬ野の仏
糸紡ぐ音は聞かせぬ母の筬
罪の数だけ拭掃除する女神
泣きぼくろ位に女神負けていぬ

米子市　政岡日枝子

メンソレタムで癒らぬ傷を脛に持つ
挫折からはじまる都会の青リンゴ
確実に釦をかけてくる少年
弁当を持って毎日出る男
陽が落ちる三秒前の庭掃除

米子市　田中亜弥

女神さまの水鏡いま借りている
湖に清めの塩はかかされぬ
国道に地蔵の数がふえてゆく
血がたぎる思い出会いの幕があく

金のないわりにちょこちょこ金を貸す

大阪市　津守柳伸

美しいはなしが弾むミルクティー
風疹をもらう幼稚な欲の皮
腹立てぬ暮らし三度の白い飯
しょうもない賭け激辛に試される
都合よく出発しない発車ベル

大阪市　黒田真砂

一抹の不安がさせる廻り道
コーヒーの苦みと共にとけるうつ
もう一人の私を凝視する瞳

尾瀬沼

水芭蕉見た安らぎの夢枕
なつかしい訛を聞いた只見線

大阪市　江城修史

過去ばかり振向く男に道がない
炎天に生きねばならぬペダル踏む
角番に幾度立てば命果つ
血の絆いとおしむ日も憎む日も
踏台のままで終るもよしとせん

大阪市　本間満津子

ジーパンと歩幅が合わぬ母の下駄
傾いているよと三面鏡が言う
グループの中で私の目に出会う
しゃべり過ぎ又空っぽの帰り道
友情の香り新茶と梅の実と

大阪市　神夏磯　道子

故里の海にすべてを打ち明ける
川幅の広さに少し救われる
つき合いが静かな午後にしてくれぬ
姑の器用な耳に助けられ
ハイヒール女の視野が広くなる

大阪市　藤田　頂留子

金の世で水もスーパーで買うて飲む
自販機のきままに札をつき返し
心配性樒のその後どないする
これも内需歌手のどでかい披露宴
盆おどり亡兄も音頭をとりたそう

出雲市　園山　多賀子

十指みなそれぞれわたしの味方かも
夏が来て仮面外せぬ鬱がある
人間不信情けにうすい不整脈
造り花水欲しがらぬ白い嘘
四捨五入四捨にわたしの座が残る

出雲市　板垣　夢酔

童貞の嘘を死ぬまでおしとおす
赴任地へ旅行気分で妻が来る
割箸でいちいち欠点つまみあげ
病む妻のいびきに安否きづかわれ
印鑑を掃除するほどためてなし

西宮市　林　はつ絵

喜寿にしてまるが描けないまだ行けぬ
他人なら許せる罪をゆるされず
能面を借りて褒貶の風の中
父の日の亡父に許しを乞うている
やさしくて姉時効なき罪を負う

西宮市　西口　いわゑ

抜かれた歯未練がましく持ち帰る
一人ずつ仲間が増える縄電車
雨だれの思案の外のリズミカル
あやめ咲く雨もあやめの彩に降る
ばらが散る恋の衣を脱ぐように

富田林市　藤田　泰子

泥水が写しているのは虹の橋
おばちゃんに新人類の友が出来
しっかりと食べねば頼りにされている
缶詰にされて個性を見失う
頑固一徹両切の缶ピース

富田林市　田形　美緒

お土産のコケシが喋る津軽弁
地平線の向うが見えたラクダの背
塵芥邪心も流れ雨あがり
日進月歩明日の新薬待つベッド
美しい檻かも知れぬ金魚鉢

岸和田市　原　さよ子

操子先生の記念川柳大会（二句）

ちっぽけな善意大きな輪を作り
祝宴の興奮抱いて帰途につく

孫と手をつなげば童謡になる青葉
遠慮してかえって迷惑かけた悔い
意地張ってみても空しい老いを知る

岸和田市　古野ひで

誕生日陛下と同じという誇り
遠い娘の電話へなだめたりすかしたり
信じますそれから心軽くなり
自問自答やっぱり人を信じます
苦労なぞ忘れましたと笑う老母

寝屋川市　柴田英壬子

旅行と聞けばリハビリの身を忘れ
大阪を出ては働くとこが無い
夾竹桃よゆるせぬ人も枯れはじめ
追憶の涙のひざへ猫が来る
ペンギンの笑顔は両手ひろげてる

寝屋川市　岸野あやめ

図書館で借りて鬼平犯科帖
もう少しましな金魚を飼えと言う
金魚だけ愛して私人嫌い
母ひとり子一人の子は翔びたがり
お荷物と思い宿縁ともおもい

尼崎市　春城武庫坊

芋蛸南京妻に思案の余地がない
入試絵馬片づけ神の夏休み
大西日鎧は正座して並ぶ
おない年同じ程度の物忘れ
見物も手抜きで母と旅終える

尼崎市　春城年代

深追いを悔いはじめてる豆の蔓
エンゲージリングたとえば偽であろうとも
相合傘のかるい思いはそれっ切り
娘を送る田圃の蛙聞きながら
ビクターの犬ならうちにあったはず

鳥取市　両川洋々

いたわりの言葉へ貨車はきっと泣く
口下手なオウムに好きとだけ教え
不景気へ男一匹売りに出す
枕木へ過去は問い詰めたりはせぬ
民営分割ああ蜃気楼見てたのさ

鳥取市　森田熊生

方言と方言うまい魚焼く
古傷にふれぬ友情温ためる
立小便して頂上の空気吸う
太陽を信じて赤い絵具とく
悪人のいない小説書いてみる

島根県　堀江芳子

高橋操子先生句集「万年青」をお祝いして

ひとがらを戴く万年青掌にぬくい
惚け上手ほめる夫も惚け上手
手をつなぐ夫といるから若い気も
一日に一つの感謝得た歓喜
すいすいとトンボ客間を通り抜け

綾瀬市　大山と金

子守の娘むかし昔を知っている
好きな色橙紅色か茄子紺か
図面には画けぬ大工の腕の冴え
呼び出され行けば参考人でした
腹痛で休み墓参でまた休み

藤井寺市　吉岡美房

梅干を食っても軍国主義だろう
東京で田舎を笑う田舎者
地平線越えたら俺の懐だ
コップ酒竹輪が本音聞いていた
森に降る雨よ童話を消さないで

鳥取県　土橋螢

逆光に光る風あり波があり
淋しくて蛙鳴く夜の灯をともす
屈んだら海が見えないこぼれ萩
赤シャツの青年プール監視人
友だちの友だちになる星を見る

高知県　赤川菊野

ライバルの苦手を知っている余裕
一ランク落して娘もゆくかまえ
台所二つに分けて同居する
ダイヤより私の宝庭の花
入り口がだんだん狭くなる実家

大田市　藤田軒太楼

持ち分のコネ得減多に手離さぬ
究極は若さに負けぬ体験談
子の勧め固辞して守る故郷の墓
伝統を守る古老にある強み
掲額の亡父に低頭す盆の入り

高槻市　辻白渓子

ライバルも来て乾盃のコップ持ち
地下鉄のラッシュに栄転やっと馴れ
紙コップ車中の酒が降りて利き
バックミラー単車の仲間ついて来る
定食へ一品足して旅の酒

八尾市　宮崎シマ子

縄電車縦横無尽にある線路
踊み見て佇ちて見てよし菖蒲園
路地裏はどんぶり勘定という仲で
民宿の主も相当いける口
仮橋は去年のまんま鮎解禁

松原市　佐藤藤子

沈黙がこわくて苦い酒をのむ
牛乳を温め心もとない日
なるようになった話を誰かする
叱られる度にあなたが好きになり
ツインビルもお城もほっとする夕日

東大阪市　森下愛論

酒癖を知られて二次会ほっとかれ
酒の席むざむざ妥協してしまう
忙しい忙しいと呑む席皆勤し

ブランド嗜好ですわと六等身
借金と白髪とシワが増えつづけ

浜田市　中川幸一

少し距離置いて語らう猫の恋
喉に小骨を残したままで手を握る
方便が咄嗟に出ない血のめぐり
自惚れた器量が仇でまだ独り
補聴器に聴かせてくれぬ内証ごと

神戸市　山口美穂

野茨を笑うてならぬ刺をもつ
野良猫の眼が人をあざ笑う
イヤリングいいことがある揺れている
忙中閑鯉に餌をやり出勤す
梅雨明けをひたすら待ってる織女星

西条市　片上明水

逃げ道を同じに探す敵と遇い
支流には支流の良さを住んで知り
紐の端母が離すともつれかけ
お別れの酒はひとりになって酔い
親の手を拒むと風に巻かれそう

羽曳野市　榎本吐来

沈黙は金と鸚鵡の知りながら
駅前の自転車藪蚊にも似たり
オクターブ下げて本音の輪に入る
不倫にも愛にも微笑うおぼろ月
鶏に似たる男のポケットベルが鳴る

豊中市　田中正坊

来るものがとうとうきたぞ六十五
六十五これから山へ柴刈りに
建前の科白はいらぬループタイ
ぜいたくな居眠りバッハ聞きながら
回想のアルバム僕は一つ星

岡山県　小林妻子

どの娘にもつくして母の束ね髪
風向を知ってる父の帆があがる
直ぐ折れる純真無垢を見込まれる
年金の上った話は聴こえてる
もう一度寄りたい傘を置いて去に

大阪市　河井庸佑

矛盾説く人も頭にくる矛盾
句読点ひとつでこうも読み違え
いつの日か生き返る石打っておく
どん底に落ちて根性身につける

大阪市　北勝美

未だあった揚げ底にある喜劇
懐古趣味辺鄙なとこにある魅力
喜寿祝苗木を植えている喜劇
へっ切りは入口だけという喜劇

大阪市　大塚節子

握手する顔と心の裏表
再婚の互いの過去は消し切れぬ
落選へ片目だるまのゆれ工合

到着口ＣＡＭＵＳの袋が並んでる　大阪市　中西兼治郎

指名手配会う人刑事にみんな見え
単身赴任帰れば犬にほえられる
農を継ぐ長男だけに嫁は来ず
夜の公園女走って事件めき　大阪市　古川美津枝

回転がにぶってきたらカン酎ハイ
六十のカマトトもくる赤提灯
すばらしい知人をくれた俄雨
大輪の一番咲きはこぼれ種　大阪市　大野武太

自己宣伝するから底が見えてくる
雨の日の余儀ない仕事ペダルふむ
女いま風にのってる均等法
予定した日に集金にこぬあせり　大阪市　板東倫子

好きでない人からメロン贈られる
かるがもにほほえむ人は善人か
談判に行って雨傘置き忘れ
正数と負数がからむおつき合い　鳥取県　清水一保

楢山の道にも不滅の十七字
均等法妻とも互角にする喧嘩
ロボットの目から人間どう見える
外角を低め低めと妻の球

易々と妥協した日の自己嫌悪　鳥取県　林露杖

軽く茶に誘われ重い役回り
腋毛みせパフォーマンスの哲学の
露天風呂老いの肢体が髑髏めき　鳥取県　金川満春

成程と思う法話に熱きもの
成程と妻の一と言胸に来る
成程と呑友達の時局論
ようこそと言う一と言に来る笑顔　静岡市　渥美弧秀

五月晴れゲートボールの若返り
台風が残していった蟬しぐれ
晩年は詩に音楽にいい余生
代役の評価拍手で安堵する　静岡市　永倉僕川

夕焼の真赤な空を知らぬ牛
秘めごとを抱いて茂みの中にいる
親の夢詰めて重たいランドセル
通じ合う気持ち夫婦の車間距離　米子市　青戸田鶴

わだかまり解けないままに梅雨に入る
また亡母に重ねてしまう女神像
八ツヶ岳かくして雲は動かない
白樺湖レジャーランドにせめられる　米子市　菅井とも子

ひと巡り終れば湖も笑い出す
足並が揃いすぎるとこわくなる
母の忌へ形見の帯をしめて行く
専門書父の誇りとして残る

米子市　寺沢みど里

八十の向学心と握手する
あどけないままで古びた縫いぐるみ
新緑の黒部へ秋も予約する
雪溶けの水の地酒は亡夫に買う

米子市　沢田千春

只歩く転ぶことなど思うまい
生きていて合わせ鏡をたしかめる
裏山に一本高い父の樹よ
ばかばかしいお笑いを聞く只一人

米子市　光井玲子

来し方を想う茶碗のつぶやきよ
母の鈴ゆっくり振って夕ぐれる
この帯のいきさつ今は話せます
たそがれて又弱虫になりました

岸和田市　福浦勝晴

男ならケチな感傷捨てたまえ
花の名を妻に訊ねる不甲斐なさ
パチンコですったと孫に言えるかい
趣味趣向まるっきり違う老夫婦

岸和田市　清野こう

師を祝うビール程よく頬を染め
自家園の胡瓜供えて仏間の灯
姉妹の電話互いに無理しなや
鳥籠を洗えば雀おりて来る

岸和田市　島崎冨志子

誰を待つブランコ夜半にきしむ音
二人三脚七十路の夫よいつまでも
ワープロよ老化防止をたのんます

夫　海外旅行

夫の留守のばした羽根がすぼまらず

和歌山市　若宮武雄

自分より上が見えない鬼瓦
蟻の眼は山の高さを測りかね
母の忌や雲のひとつに見た寝釈迦
咲くだけを空しからずや花ざくろ

和歌山市　山川克子

真相はいっそこのまま情死行
泣いた泣いたこらえ切れずに泣き笑い
軍配はどちらにカンナとアジサイと
末席の野次が一番きつい事

唐津市　田口虹汀

智子先生入院を聞き

茴香の花へ絶やすな如露の水
不倫だと棚のボトルは知っていた
飛べば飛ぶ退れば退る影法師
空港を降りてネクタイ締め直す

唐津市　浜本義美

やりくりでのり切った日を子は知らず
包丁が痩せ調理師の腕が冴え
呼子線架橋家は井戸水枯れただけ
七ッ釜波の白さが昏れ残る　唐津市　山口高明

冴えた柝がひとつ入って情死行
妻や子の便り見せ合う飯場の灯
茅花咥えて母待つ頬の真赤なり
拳骨の痛さを知って父を越す　唐津市　筒井朴竜

天皇へ献茶嬉野植樹祭
藩窯の色鍋島で酌む野点
年金へ犒らいの来る隠居部屋
信楽の狸と語る旅の宿　唐津市　浜本ちよ

三師の追悼会に寄せて

二階を降りて行く当てもなし
福寿草葭乃夫人の化身とも
金魚見る孫に生態など話し
縁側の書斎で居眠りばかりする　羽曳野市　佐野白水

老母逝き紫陽花急に色変り
紫陽花の色も悲しき告別式

はびきの川柳句報一〇〇号を記念

月々を重ね重ねて百句会
百句会弘川寺は空碧く　羽曳野市　田中隆二

衣がえ妻もわたしも太り過ぎ
蟬しぐれポックリ寺が混みそうだ
年金のくらし引き算ばかりなり
郷愁に父が吹いてた祭笛　島根県　栂みどり

折々の花へ重なる思い出記
子の部屋の灯りへ酒量へらす父
たとう紙へ女のさがを干す土用
梅つけて女心のやすらぐ日　島根県　石田清泉

歩道橋昭和の遺物の一つとす
また一人土に帰った大正会
本日ただ今未亡人の名を貰い
菜園の雑草作る梅雨の入り　寝屋川市　江口度

なわ張りがきまると鮎のいくさ唄
もう麦をつくらぬ農家の門構え
点となる尾灯が知っている余情
年だけは心配せんでもとってくれ　寝屋川市　宮尾あいき

孫娘花嫁第一号

まるでショー白無垢うちかけイブニング
うっとりと新郎新婦のデュエット

赤毛のアンのファンでハネムーンはカナダ
健康でさえあれば人生パラダイス

箕面市　坪田紅葉

ひたすらに生きてるつもりの安堵感
しあわせは石楠花の咲く縁側で
あやめ咲くいつものメンバークラス会
水草のささやき聞こえる春の雨

箕面市　椎江清芳

他所事で無い家の娘も適齢期
披露宴身内はみんな下戸ばかり
点滴の雫五尺の糧となる
南座の芝居がはねて鰊蕎麦

高知県　中内朱坊

豊葦原瑞穂の国の休耕田
日本の主食芋粥だった頃
円高と別に農政まずし過ぎ
春夏秋冬四季に負けない酒の味

高知県　曽我部佳風

まだ妻に与えてやれぬ安堵感
鈍感な鎌には負けぬ夏の草
ぼうふらのうちに貰っておくいのち
しまいまで言わせてやれよコマーシャル

高知市　北川竹萌

故郷の土を愛する自家菜園
健やかを呉れる思いの自家菜園
杖結いし胡瓜節ごと花が咲き
大根おろし晩酌の味一入に

出雲市　吉岡きみえ

かたつむり有情無情の道を行く
夢のない話で夫婦膳につく
口笛で軽い男になるまいぞ
方言でにくい男を舌に巻く

出雲市　小玉満江

外は雨もうすぐ碁敵やって来る
聞かぬとこみると理由は知ってるな
一匹が花屋を見つけおしえない
八十歳知恵を授かる汽車の旅

兵庫県　脇田米朝

冬苺真っ赤な嘘が盛ってある
おべんちゃら言うて外壕埋めにくる
Gパンも揃いで夫婦の遊び好き
掛け声をかけると足腰ついてくる

兵庫県　中田白李

望遠鏡時々逆に人を見る
婚礼も葬儀も派手を売りつける
太っ腹な女で気弱な夫をもつ
御自慢のうまい珈琲へついて行く

岡山市　川端柳子

人生のいろは覚えたすすり泣き
本心を語りたがらぬ池の面

これやこの心あたりのないままに
ときめきに行くあてのなしシャボン玉
岡山県　矢内寿恵子

海からの訴状いっぱい溜めてある
残り火は音のせぬ様せぬように
絹糸の芯の強さで寡婦生きる
逆光の中でたくまし母子草
神戸市　仲どんたく

兵一人星となる夜の深い青
モンローの裳裾がなびく初夏の風
娑婆の風連れて見舞いにやってくる
つれもてゆこらシルバーのクラス会
今治市　矢野佳雲

力仕事ですと学歴無視される
触角をすりよせ蟻が逢うて来た
子のトップ運動会の外にない
岩一つ廻り舞台でせり出され
七尾市　松高秀峰

とげのある言葉気にせぬ母となり
良い方に考えている苦労人
聞き上手一緒に泣いている女
硯箱もそろばんもない核家族
貝塚市　行天千代

交換機シワのお札は戻って来
カレンダーの丸はデートのおたのしみ
市場籠うわさ話も仕入れて来
突当りそうにつばめ巣に帰る
玉野市　小谷仙山

無農薬で野菜作って虫にやる
笑ってもおこってもこわい鬼の顔
老いの旅行つかれましたと言うなかれ
法よりもジャンケンポンは良く守り
浜田市　佐々木裕

政治力無くても金が政治する
酒飲まぬ煙草すわぬが嫌がられ
スランプは飛躍のための陣痛だ
一瞬の沈黙女に打算あり
宇部市　平田実男

僕に似て息子も嫁に押され気味
カルダンの靴こそばゆい座りだこ
悲しさは蛍に甘い水がない
CTで撮れば学者と同じ僕
仙台市　川村映輝

プライドを捨てかね再職決まらない
口ほどに動いて欲しいと愚痴る脚
陣笠も狩り出されて多数決
円高に山の灯海の灯消えてゆく
京都市　山本規不風

梅雨晴れ間「おばこライン」だべと娘が誘う
すずらんの宿指切りの傷痛む

霊感に闇より深く迷わされ
楢山の空想うまい糸くり草

笠岡市　松本忠三

諦めは好みが違うことにする
過疎悲し空気がうまいと言いきれず
勘繰りはよそう依怙地な貝となり
雨曝し洗濯物を垣根越し

橿原市　岩井本蔭棒

敗北を認めた背でドアを出る
六十路まだ口笛が出る若葉道
海峡に女が佇てば詩になる
二番手でいつでもおどり出るゆとり

倉敷市　稲田豊作

子が皆んな素直に伸びる親の汗
逢えばまた金の話の小金持
まだまだと老いて踏んばる徳俵
希望の灯点せば勇む影法師

大和高田市　岸本豊平次

閑静に住み時計で寝付かれず
銘柄は別に何んでもにぎりめし
ほどほどの仕合せ日記の字が丸い
玄関の靴を揃えてゆく出前

宝塚市　丸山よし津

青信号ばかり渡って来た不安
叩かれても人間好きのもぐら達

潮騒に窓の明るい宿の朝
白髪染め拒み本音で生きている

弘前市　田中叶

昔よりありバス停と写真館
処刑した場所に煙草の灰が落ち
子のことで社から電話をかけている
青春に悔いあり僕の児の寝顔

東大阪市　崎山美子

名物の老舗をまわる宿浴衣
温泉で夫婦時間をもてあまし
福引の温泉旅行でのばす腰
童唄うたえば母の背の温み

西宮市　奥田みつ子

どくだみの白の十字に罪のかげ
風の音罪におののく夜のしじま
天の川ひとつの罪を流さんか
罪ふかし山の空気は澄みに澄み

尼崎市　奥山美智子

それからのことは問わずに傘を干す
三姉妹嫁いでいったバラの家
のど仏明治の気骨高らかに
限りなく少女が夢をみる鏡

和歌山県　寺田裕美

農繁期鏡が夜叉になっている
糠床が熟れて胡瓜が太りだす

泳いでも蛙に遠い海がある
梅落ちる音をきいてる昼を寝て

姫路市　大原葉香

広辞苑にもない言葉はやり出し
離職して物の値段がこわく見え
お日さまにとても素直な花の性
海の広さへ釣糸一本垂れる人

福岡県　横地雅風

共稼ぎ箸より匙の子が育ち
階段を見上げ由緒に手を合わせ
帰郷して老妻と静かな蛍道
千天の慈雨に酸性あると言う

境港市　細木歳栄

山萌える別れた時は雪だった
片言に取越苦労を打ち消され
文字までも心映して生きている
背信を恨んでみても梅雨の空

高槻市　川島諷云児

弱り目に祟り目妻に寝込まれる
左遷地へ臆病風と赴任する
サングラス外すと見える裏の裏
まさかとは思うまさかの師の訃報

羽咋市　三宅ろ亭

天の賦与悲運の時ぞ試練なる
同窓会教師冥利に尽きるもの
かつかつの時に限って尿意あり
老人の大志に足腰ついてこず

八尾市　山下みつる

ドル安の魔法で日本ふりまわす
苦労してマダムになってまだ二号
赤さびた線路まくらに犬が寝る
粗い目の法で財界保護を受け

大阪府　坂口公子

聞き耳をたてると風が甘えます
箸置いてからひと仕事です薬漬け
頼りないお前を置いて死ねぬとか
三十度首をかたげて出す色気

富田林市　松本今日子

さわやかで蒸発等も考える
あんなことこんなことにも腹が立ち
したたかに生きてやろう缶ビール
散る花にふと恍惚の我思う

堺市　柿花紀美女

満ちたりた人生でしたフルムーン
入院の夫素直な人になり
責任が無いので拍手だけ大きくし
外は雨家庭医学書読んで見る

和泉市　西岡洛酔

雑兵の犬の昼寝に軒が無い
少年の作意に神も油断する

太陽の怒りを背に世捨人
諫早市　原田メイシュン

蔭口も笑って済ませる歳となり
心電図俺の強がりなど見えず
修繕もなし部品も替えずに六十年
枚方市　宮川珠笑

犬呼んだ妻へうたた寝返事する
銀婚へ愛妻弁当まだ続く
愛想で引き止め酒くせもて余し
岡山県　直原七面山

妻連れて月を愛で
土手に寝て夢を追い
風邪で寝て義理を欠き
岡山県　荻野鮫虎狼

ホテルにも焼酎がある雨の午後
毎日が同じパターンの妻の愚痴
廃線の駅前広場へ盆の風
岡山県　二宗吟平

テレビ塔古城の跡へ灯がもどる
一坪の畑で固い葱ができ
嫁にだけ鍵のありかを知らせとく
岡山県　岩道博友

瀬戸大橋見る旅霧を予想すか
忙しい道路で違えた交差点
肩車これも自分史に書いておく
岡山県　山本玉恵

美しい夢が音にもなるポスト
言い切れぬ憶いが青い風にゆれ
ふり出しへ戻って鬼に背を押され
岡山市　井上柳五郎

きょうもまた不作の梅が実を落とす
存在を無視され老いの無口な日
世の流れあきらめばかり多過ぎる
岡山市　行吉照路

パチンコに逃げるセールスだってある
チャレンジの人生スピード守るなり
早寝早起きタフなところが買われとり
鳥取県　新家完司

にんげんと鬼で造った核兵器
ヒロシマで止まる悪魔のルーレット
幽霊屋敷ではありません原爆ドーム
鳥取県　羽津川公乃

水色が使いこなせず自閉症
方円の水に油の不協和音
女には惜しいと変な褒め言葉
鳥取県　松下たつみ

目を閉じて背伸びをしないように生き
五分五分の地位で友情続いてる
改造をしてから店の客が減り
倉吉市　渡辺菩句

つつじ燃やして豪華な兎小屋にする
僕の貌これがとっつきにくい貌
青天井地蔵は帯をしていない
倉吉市　淡路ゆり子

故郷を捨てる二枚の切符買う
学校という名で縛る知恵くらべ
こぶ結び胸の位置から下らない
島根県　藤原鈴江

欲深き両掌を数珠にしばられる
魅せられて舞うたこの道底がない
夜の闇男の素顔知りつくし
島根県　松本文子

風みどり心も少し軽くなり
医者通い仏無力なものらしい
美しく老いよと無理なことを言う
島根県　北川民子

やわ肌に夕風ふれたは過去の過去
昼寝時ヘリコプターも眠かろが
ハンカチの白さにはずむ忘れ草
島根県　松本はるみ

いつか見た絵の中にいる錯覚よ
目的はさておき雑魚も瀬をのぼる
口約束さらり忘れて長寿です
姫路市　丁坪サワ子

貝になれ貝になれと慣らされる
聞き流すすべを覚えて脈静か
姫路市　釣遊光

年上が世話女房とは限らない
ナツメロは私の通った道しるべ
どう喧嘩しても最後は夫婦箸
姫路市　中塚遊峰

新聞の柳の雅号を先に見る
好きな服出して待ってるクラス会
付け下げの躾糸切る小唄会
豊中市　奥田満女

電線のつばめ一家に日が暮れる
木守柿一つに耐える窓あかり
血圧が上りますよと妻がいう
豊中市　一瀬福一

切札をもてば口笛風に乗る
天使にも夜叉にもなれるコンパクト
尼僧にも祖母にもきびしい座りダコ
大阪市　吐田公一

生々流転やがては還る仏の座
口紅の始末忘れた二日酔
打ち水の庭からもらう花言葉
大阪市　寺井東雲

お年寄ポックリ寺やボケ封じ
単車買う相談母は横を向き

喫茶店街の噂が流れてる
大阪市　塩田新一郎

曼鑠を家で女房が疎んじる
同窓会運と不運が酌み交わし
核兵器何の大安吉日よ
大阪市　宮下とし

勲章は達者なうちにほしかった
点数のかせぎ足らずか左遷され
定退が孫連れて来る元職場
寝屋川市　平松かすみ

ガラス窓青葉も萌えて新世帯
窓口できまりの悪い爪の伸び
結構な趣味で付き合う広辞苑
寝屋川市　堀江光子

芝生踏む風もみどりの歩き初め
わたくしの一点張りに負けておく
明日のない日本などとは思わぬが
米子市　茂理高代

待ちぼうけ今夜の星は光りすぎ
恋人の犬があやしい羅針盤
深呼吸すれば許せる気にもなる
米子市　川上より子

生き甲斐のひとつに朝の体重計
子離れの予防接種をくり返す
卒業の子に壁天井が共鳴する
和歌山市　神平狂虎

便箋の折目よ愛と言うものは
信号の傍の見返り柳かな
稜線の起伏に愛を問いかける
羽曳野市　中村優

円とドル一円玉に火花散る
この僕が居ると盛んにサイン出す
ＪＲ当分腰を七重八重
芦屋市　竹中綾珠

余部の悲劇テレビが又写す
へそくりの使い道教育費の補助
オンザロックに南極や北極の氷入れ
神戸市　山片紀雄

止め塩で含みをのこす苦労人
迷宮が増えてねずみがよく獲られ
献体をすませて今日の青い空
松原市　小池しげお

ハイキング新幹線がクロスする
親切な赤帽腰をまた痛め
正直すぎると息子の前で叱られる
茨木市　井上森生

吊り橋の揺れは惑いの大きさに
紫陽花の合図は明日の空模様
天地創造轟く飛沫ナイヤガラ
高槻市　竹内花代子

釣心ないが鮎釣景に魅せられる
カレンダー破って初夏の衣替
靴脱いで一気に降りた久能山

藤井寺市　福元　みのる

沸点がちがう夫婦で長生きし
飽食が燃え上がらない子を作る
年ですな医者は治そうとは言わず

町田市　竹内　紫錆

新幹線が書斎代用
宴席のみにマイク持たされ
武者行列が土を踏めない

高知県　小澤　幸泉

ふれあいの団地の朝が今日も明け
六月の午後はあじさいばかり見る
テレビだけ観て休日がまた終る

岸和田市　芳地　狸村

補聴器の母に聞かせるいい話
男より女がもてる露天風呂
御在位の金貨そのまま貸金庫

和歌山県　天満　三千代

涙のむ疼く男の喉仏
今日も又地蔵に合わす掌の痛み
減反制弾き出された米作り

河内長野市　井上　喜酔

夢を見るワイングラスの桜ん坊
行きがけの駄賃で運が向いてくる
セスナ機で鉄のカーテン突き破り

弘前市　斉藤　劦

お通夜のピアノの上に置く菊花
りんごの唄忘れはしないハーモニカ
母老いて故郷の土も痩せ細り

奈良県　宮川　古都路

ひも男売れぬ小説書いている
おごられておごりかえして愚痴を聞く
化粧室仕事の顔をラブに変え

西宮市　瀬尾　六郎太

小雨けぶる京や亦よし鄙びたる
専門馬鹿言われ続けて暮の虹
へえーほうで話の種がとめどなく

川西市　松本　ただし

めぐり来る季節の肌を持つ擬宝珠
夏草や火山の煙右へ向く
年金の枠にも余猶出来る齢

五所川原市　加藤　彩人

カッコーも粗忽どもったままで鳴き
農を継ぐ嫁他国から来る噂
稲の花津軽に盆が来る知らせ

川西市　野村　静雄

水深一尺悠々として鮒泳ぐ
約束は大人の遊びだった筈

魔が差したとは不倫への申し訳　鳥取市　広本文子

水がめを満たすと亡母が浮いてくる
顔上げてひとを信じることにする
あの友もこの友もいたレンゲ草　出雲市　小白金房子

かけひきで買われる牛の目が哀し
約束のケーキが房る靴の音
農守る父の大きな飯茶碗　吹田市　茂見よ志子

梅雨のあめ傘は明るい彩をよる
五百羅漢喜怒哀楽の顔のよさ
自立する女が増えて嫁不足　枚方市　二宮山久

幸運は貴男まかせと土の舟
どん底の暮しへ妻がいる強み　大阪市　北山悟郎

チグハグな自分の心もて余す
反省がダルマになって動かない　大阪市　町田達子

余情まだ旅紫の霧の中
明日の逢瀬は泰山木の並木道　大阪市　渡辺さと美

すずらんを嗅ぐとき少女のような顔
なまけ心そこから滝に似て堕ちる　大阪市　横山為子

群衆の野次馬根性その一人
水車小屋水と遊んだ遠い夏　富田林市　片岡智恵子

単身赴任缶詰きこきこ妻しのび
メニューほど食べた気のせぬ披露宴　富田林市　新開千代女

捨てるには惜しい空缶何入れよ
丹精をこめた甲斐ありバラ盛り　豊中市　上田登志実

マンションの窓で見つけた遠花火
甘露とはこの味だろう風呂あがり　豊中市　辻川慶子

終点の駅で広がる碧い空
再会はここにしましょう花菖蒲　鳥取県　江原とみお

思い出は青磁の壺にいれてある
お神楽の笛都会から呼びもどす　交野市　山本テルミ

セーターを腰に巻いてる若い街
納豆の粘りにいつも負けている　茨木市　堀良江

同窓会叱られ組が師をかこみ
鴛鴦に見えてあひるの夫婦です

自選集

わが生命八十いくつ未だ惜しむ
時の声ぬらりくらりと切りぬける
年上の妻が回転軸となる
この人について行こうと切符買う
子を五人育てた母にあるパワー

長野文庫

軍配はどっちにトップの猿芝居
妻の吹くラッパに不足のない相手
別れたら他人それは他人の言う台詞
お逢いした余韻ながい長い手紙書く
生きている心地は裸で飲むビール

山内静水

夢はシナリオ自分史に残す
出会いから幸せもらう趣味の道
前世からの絆悪縁かも知れぬ

藤井明朗

予報より早い雨の日狂わせる
古時計わが家の歴史きざむ音

水粉千翁

うなずいて語り尽くしてくれるひと
甘茶献上のお釈迦さんへ腰が伸び
感情が喋って黙り込むばかり
そうなのよまあそうなのねと比べ合い
こっくりへまだ呑み込めぬ愛という

米澤暁明

全くのけちでなかった寄付の高
風が出た行こか帰ろかかずら橋
蛙にも今に渡れる瀬戸の海
サミットは解ったようで解らない
政治家はぼたもちの絵が上手すぎ
足もとの穴を言訳にはすまい

八木千代

あらすじは見透かしている銀の燭
自制することを猫にも憶えさす
沖を指す舟あり崖の真下から
バックスクリーンに鷗の絵を画こう

小出智子

青春にひょっこり出会う古本屋
入院をしたお向いの暗い窓
たまさかに行く銭湯の大鏡
人生の裏を教えてくれる人
陸橋で不意にいのちが軽くなる

月原宵明

エリートの喉へ鰯の骨がたち
玄関の靴の乱れが只ならず
水中花騙しつづけて悪びれず
旅一座ちりぢりとなり雨期つづく
本当の勇気女に詫びている

金井文秋

円高メリット表には出たがらず
黒字減らしどころか赤字減らしたい
合理化の名で働ける首を切り
一病息災で高齢者が増える
高齢化に福祉が従いて行けません

あかしやの花がこぼれて少女の忌
顔なじみ板さんが鯛のあら包む
あきれる程食べて板前よろこばせ
苔むした墓石に我が家の歴史見る
両国の相撲のふるさと見て帰り

藤村〆女

ぁつみ温泉

出迎えの車にみどり深くなる
美智子妃の泊られた部屋鯉はねる
献立表見ながらかぶと蒸しつつく
部屋風呂の桧から初夏の香をもらう
宿からのみやげ地酒がちと重く

正本水客

また植木もろて大事にして枯らし
泥ばかりつけざり蟹を取り逃がす
孫の嫁こどもっぽいのが可愛らし
友達の友達と逢う雨の日に
無賃パス毎日使う程達者

黒川紫香

抜擢の椅子で妬みの風に耐え
深刻な顔が茶店の隅を選り

小林由多香

切り札にするへそくりをあたためる
両隣課長で社宅気が疲れ
トップの座守る采配胃が痛む

市川鈴魚

七難をさける新茶で朝の汗
秋の静けさ疑い少しずつふえる
忍び返しに女の生きる刻がある
胸はって帰る時計に嘘がない
平凡な妻できれいに剪った爪

児島与呂志

決心を鈍らせそうな嫌味言う
何事もあけっぴろげでいる夫婦
吉日の喜びご近所走らせる
無意識に欠伸かみしめている講座
雑巾をミシンで縫うて子に持たせ

工藤甲吉

政治家の舌をみな抜けエンマさま
「警察官立寄所」まで盗まれる
貧乏は毎年同じ遠郭公
徒然に「チャタレー夫人」読み直し
桜桃忌サクランボより酒がよし

本田恵二朗

善人が或る日真白い嘘をつき
孫達の口車なら乗ってやる
収と支のシーソーゲームに明け暮れる
海鳴りのように賛否がもつれ合い
遍路笠残る人生かばい合い

大矢十郎

振り返る一家嬉しい宮参り
ぎりぎりの夫婦にいつも忘れ物
泣き事も虚栄が覗くクラス会
大鍋の粥へ子が来る孫が来る
親自慢聞き良し子自慢聞き辛し

野村太茂津

敗走記八月の空昏れ残る
あの日から突如シナリオ書き直す
刎頸の友に位牌を頼まれる
忙中閑あり涅槃図と対峙する
張り裂けそうな胸を押さえて疑われ

橘高薫風

高野山にて
般若湯師の槍さびが聞こえそう
法悦にあらざるはなし仕舞風呂
仕合わせな弟子師の伝記書く仏間
宿坊の夜明け寝相も人格だ

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

遠山可住

過ぎたことばかり話して負けている　西出楓楽

「昨日を語る者は既に老いたる者なり」とは誰かの言葉だが、過去の栄光は中々胸に蔵い込んでおけないもの、聞く側は又かと来る。過去の話はクラス会にでもゆっくりやってもらって、いつまでも明日を語りたいもの。

散る花にきくさりげなく散る心　高橋千万子

椿はポトリと落ちる。バラはばらばらと散る。花それぞれに散る姿の中に、さりげなく散る花へのいたわりと憧憬が作者のお人柄をしのばせてくれる。

おとし蓋結論はまだ早すぎる　西山幸

おとし蓋は最後になって置くもの。だが、と考える一瞬の空間。人生の結婚もそうなのかもしれない。これから熟成がはじまります。

人違いされるも嬉し一人旅　小砂白汀

そう言えばこんなことを経験したような気がする。と思わせるところがこの句の命、美事ににんげんを捕えています。

愚痴言えば青葉若葉にわらわれる　福井桂香

「節は五月にしく月はなし」という。正に人をして愚痴を忘れさせてくれる季節です。

火の怖さ水のこわさよ愛一途　松原寿子

炎々と天をこがす火、ぶすぶすとくすぶる火。怒濤の水、鏡のように静かな水。愛はどの火もどの水も恐いものにしてしまう。

平服というから困る披露宴　田中正坊

施主は「お気軽に」かもしれないが、招かれる方は却ってそこが甚だ困るんだ。心の機微を捕えて妙。

祈る人の窓まっさきに夜が明ける　新家完司

まだ誰も起き出て来ない敬虔な環境が祈る人の朝まだきに存在する。祈りの朝は身も心もすがすがしい。

尺取虫確かな日々のある安堵　錦織文子

尺取虫は尺取りにしか歩けないのかもしれないが、じっと見つめていると不思議なものである。そしてその確かな自然の采配への歩みにふと大きな安らぎを発見しています。

朝飯が旨くて喜寿にあるいくさ　辻文平

朝飯が旨い。それは老いの確かな自信である。ウン、まだすっこんではいられないぞ!!

手応えの無い山だから騙される　田中亜弥

平平凡凡の山だからふだん着で向う。だが山は山の基本をちゃんと備えている。要要心。

車掌にも小さな誇り鍵の束　岩井本蔭棒

鍵の束、それは会社の重要な象徴。車掌の誇りを捕えた確かな眼力に敬服します。

初夏の風のようにさわやかに心に滲みるユーモア句。

それぞれに事情があって墓荒れる　野田素身朗

お悔みで禅問答をして戻る　土居耕花

何をすることも無いのに早よう起き　宮口笛生

字に書いても女という字むずかしい　松川杜的

雁首を並べて読めぬ句碑に佇つ　春城武庫坊

笑ったら済むことだった僕の役　堀江正朗

食べるもの食べ切り留守番時計見る　西森花村

菜種梅雨キリンの首が長すぎる　板尾岳人

川柳太平記(111)

川柳の群像

住田乱耽

東野大八

筆者の書架に住田乱耽著「川柳雑文・蚤の足音」(食通社昭和13年刊)というのがある。堀口塊人がその晩年に筆者への形見頒けのつもりで貰った珍本である。茶色木綿布張り三百頁A5判の瀟洒な本である。

この本は灘の酒と川柳に関する雑文集であるが、東西の川柳人が序文・跋文・雑文を寄稿している。食満南北・岸本水府・椙元紋太川上三太郎・前田雀郎・森東魚・村井潮三郎塚越正光・品川陣居・高須啞三味・森鶏牛子正岡容・黒木鶏足の名がみられる。その風交のひろさはけだし相当なものだ。

この数多の寄稿文の中で、最も愉快なのは食満南北の、筆墨の用箋をそのままトッパンにしたつぎのような序文である。(原文のまま)

「いたって大きなからだの持ぬしの私に、蚤の足音の序文をかけといふ。いやだといふと、ようかかんのやなといふから書いてやる。象のラヂオ体操位の音が出ている。偉大なものだ。畢竟自分で附けた名だからそんなことが言へるが、人間といふ者は、イエ、どういたしましてとへり下るうらの意は、なんとかしてるのやという自信のあるものだ。この本の名のつけかたで、住田はんの鼻の高さがしれるような気がする」

南北はこの本もその人もほめてはいない。むしろ坊ちゃんらしい一人よがりを、婉曲に戒めている。それをイヤ味に感じさせないところが南北の人柄の徳である。戦後乱耽は、死に至るまで句境においては南北を、句風については路郎、紋太を師と慕いつつ作句に精進したのである。南北に較べ紋太の序文はベタほめで「うまい、すっきりしてる、新味がある、面白い、すごい」とさんざん並べた後

「彼氏の人物でもさうだ。好もしい性質、大きい、約束を守る。深切だ。頼みになる。公平だ。情熱がある。鋭い。いろいろ言ってみてみても皆当っているが、又当っていない。どうも変な人物だ。」

こんな序文を読むと結局、やんちゃ坊主を持て余しているところがうかがえる。

「乱耽は筆で喋り口で書く男である—雀郎」

「私に句集潮騒を親しましめ、共編者乱耽を親しましめ今日の交りまできた—東魚」

水府の序文は番傘PRで少々イヤ味である。

乱耽にその人柄と作句の点で、心から傾倒していた塊人は「ふあうすと」の連載もの「明治大正川柳考」の七回目に突如〝乱耽登場〟という一文を割り込ませていわく

「この稿に乱耽が登場するには少し早すぎる。しかし彼は昭和46年1月5日の午前三時に逝ってしまった。享年61歳(法名釋安楽)書かねばならない。

この稿には「彼もまた大正の川柳を昭和へつなぐ一異材であった」の書き出しで、乱耽

記を書いている。以下はそこからの要約。

昭和8年9月発行の川柳句集「潮騒」は、昭和7年春、24歳の若さで他界した乱耽の学友で親友伊藤愚陀との友情句集である。麻生路郎はその序文で言う「乱耽も又愚陀と共に新感覚に生きる新川柳柳壇の一異彩である」

乱耽が川柳作句をはじめたのは大正十五年頃で、開局したばかりのJOBKの水府選に投句したのが始まりだが全没。続いて「川柳雑誌」に投句したら三句入選した。このため路郎門下に入った。水府選にもし入選していたら「番傘」同人にまでいけたのに、貴方は惜しいことをしたと、乱耽はある酒席で水府にイヤ味を言っている。

○表情を鼻にあつめて嫌という　乱耽
○たんつぼを集め小使消えてゆく　〃
○情婦も入れて花札の音　〃
○鏡の裏に躍る骸骨　〃

かくて路郎に接近した彼は、愚陀とともに川雑の編集も手伝ったが、与えられた仕事はヨイショとばかり他の人達にゆずり、二人は籐椅子に収りタバコをふかしているので、編集室では、二人を重役のニックネームを与えて、その態度に反感をもつどころか愛すべき我儘としてあたたかく見守っていたという。

「このような新傾向を指向する作家は、路郎門下で特に育ちやすかった。路郎は〝いのちある句を創れ〟と言ったが、これのみで個性の自由については、最大限度に認める師匠であった。路郎路線に従え、などと主張するような傾向は川柳雑誌社にはなかった。」と塊人はこの点を強く述べている。

乱耽は本名住田増蔵。明治42年12月神戸市生れ。初号藍旦。灘で酒類運送業を営む。祖父は草角力の大関を張って親分といわれたが文字は一丁字も知らず、このためか孫の教育には熱心で、幼児の増蔵のため、或日沢山の本を抱えて帰宅したが、なんとそれは講談本の立川文庫全巻であったという。

かくして成長した彼は昭和2年には既に大阪商大商学部の学生であった。麻生路郎は彼と同門の大先輩であった。以下塊人稿より。

太平洋戦争最中のこと、乱耽は路郎に一軸の揮毫を求めたことがある。これに対し路郎は二百円を要求した。当時の塊人の二ヵ月分に相当する金額であった。乱耽は「先生、正気ですか」とたしかめた。「ずんと正気だ」と答えたのでそれを支払ったとのことであった。南北ならおそらくその十分の一で求めに応じたことであろう。路郎はこのような態度で自己の職業川柳人としての立場を誇示したのである。

私（塊人）は、戦前、戦中の彼のことはよく知らない。その名もその顔も「潮騒」の頃から知っていたが、親しく話すことはなかった。戦時中酒の不自由なのに困っていた川柳人の飲食関係者には、快く酒を回してやったり、紋太の就職を地元の魚崎町役場に世話したのも彼であった。

「乱耽は魚崎町長選挙に立候補したが、惜しくも次点で落選した。但し立候補者は全部で二名であった」

とある柳誌に書いたことから、塊人と乱耽は急速に親しくなり、その交友は深まった。

昭和12年十月川雑を離れ柳誌「樽」を主宰（五号で廃刊）「蚤の足音」は、その柳誌の雑文をまとめたもので乱耽百句を添えている。

彼のことを「柳界の貴公子」とある柳誌でもち上げられたので「おれは支那のワンタンである」と応じたゴシップが森鶏牛子主宰の「三味線草」に面白く載っている。

★次回は「**阿部佐保蘭**」

誹風柳多留廿六篇研究（三十二丁）

大屋六郎・八木敬一・鈴木　黄
石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・多田　光
故岡田　甫

538　**四月朔日（ワタヌキ）に腸をぬかせる珍らしさ**

大屋＝四月朔日（ワタヌキ）は、表記のとおり、旧暦の四月一日である。旧暦はおおまかに言って、新暦より一ヵ月ほど遅れているので、現在の五月頃にあたる。綿入れでは暑いし、かといって単衣では寒いので、袷を着る時期となる。そこで、綿入れの綿を抜いて袷にしたので、袷のことを「ワタヌキ」という。

四月一日、衣がえをする日に、腸を抜いて料理させる鰹は、まさに「初がつお」というべく珍らしいことだ、というのである。「綿抜き」と「腸ぬき」が語呂合せになっている。

わたぬきを着て初かつほ直をつける　天二宮1

南＝賛。初鰹の江戸入荷は、その年々で異なっていたであろうが、一般市民が御眼にかかれるのは四月上旬とされている。

袷着る頃から魚もわたをぬき　一三二5
はらわたをぬいてうっちゃる袷時　八〇31
袷着る人には買へぬ初松魚　四四16

多田＝賛。**岡田**＝同。

539　**金の威光ハこわひ物縁に付ヶ**

大屋＝暮の嫁であろう。持参金を背負せて、顔の醜い、または、身体上どこかに欠陥のある娘を縁づけたというのである。

「金の威光ハこわひ物」は文句取りか。

八木＝賛。暮の持参嫁。

多田＝賛。ただ「暮の嫁」と限定せず一般的持参嫁ととっていた。

岡田＝賛。

540　**書判の請取を出す伊勢の御師**

大屋＝「書判」は、文書の自分の署名の下に書く判で、花押ともいう。請取は領収書のことである。

伊勢の御師が配って歩く伊勢暦の冒頭に、「伊勢渡会郡山田　龍松判太夫」のように、御師の名が明記されており、廻って歩く旦那から、なにがしかの玉串料を受けとって、暦を渡すので、これを「書判の請取」といったもの。

いせの御師扱銭の無ィさかりに来　五12

のしを付てもただくれぬいせの御師　一八33

八木＝なる程、そのようなことかも知れない。**多田**＝よくわかりません。一般の商人などは判を押すのに対していったものかなどども思いましたが。

岡田＝各家によって御師に渡す金高がちがう。お賽銭も含めるので。ですから領収書は出したと想像。その額の多いのには、土産も多くおいていった。

541　**すゝきのそばててへ〳〵を家内する**

大屋＝「すすき」は「薄」で十五夜、十三夜の月見に供えるすすきであろう。「てえ〳〵」は、「戴々」の訛った語で、子供が物を乞うとき、手を重ねていう「ちょうだい〳〵」である。「家内」は「妻・女房」だと思う。

顕原退蔵氏の『川柳雑俳用語考』は、本句をあげて、「月見団子を頂くといふのだろうか、それにしても興味索然」と記しておられる。顕原博士にわからない句が、わたくしにわかるはずもないが、とにかくダロウ解を試みる。

十五夜の団子を作っている家内の手つきが、「てえ〳〵」をしているようだというのではないかと思うがどうであろうか。

南＝本句の場合の「家内」は遊女屋に於ける家内一同ではないか。

惣花ハすゝきの中で渡すなり　六28

本句「すすき」は月の紋日をさし、仕舞札をつけた客は当日、遊女屋の家内一同に惣花を渡すこと、右の例句の通りで、家内一同が客の前に御祝儀を頂戴に「てえてえ」をしてまかり出る句と思います。

多田＝南さんが、よくここまで考えられたと思います。ただこの「家内」が一般か吉原か判定がつきません。

岡田＝同。

542　**そっとよと嫁梅漬を頼む他**

大屋＝女性が妊娠して悪阻のころになると、酸っぱいものが欲しくなる人が多いようだ。この句もその例で、はじめての妊娠。うれしいようなはずかしいような——。そろそろ三ヶ月。ツハリがはじまる。お気に入りの女中にこっそりとうちあけて「梅漬をこっそり持って来てちょうだいネ。人に知られないようにネ。たのむわよネ」というところ。

梅つけをぶぢなうちから嫁は喰　六31

多田＝賛。**岡田**＝同。

543　**見通しに居るのに汐干母案シ**

大屋＝本句は「ミがいに居るを汐干に母あんじ」（二一ス8）の焼きなおしで、品川の妓楼に上ってとんだ汐干をしている息子を、母は正直に潮に溺れたりはせぬかと心配している、というのである。

「見通し」は、深川や品川などの妓楼で第一の客間をいい、ここでは品川。

多田＝賛。**岡田**＝同。

544　**おちこちのたつきに猿を連て出る**

大屋＝「おちこちのたつき」は、古今集巻一春上読人しらずの「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも喚子鳥かな」の文句取り

句意は、猿まわしが、今日はこちら、明日はあちらと猿を連れて廻り歩くのだが、それは貧しくわびしい生活の手段なのだ、くらいとなろう。

門ト口でしょいなげをするさる廻し　一八28

猿廻しえたいの知れぬ三味をひき　二4

さる廻しつかんで出ルと肩を出し　三20

小野＝賛。文句取りとは知りませんでした。

多田＝同。「本歌」よくお見付けです。

岡田＝同。

黒川紫香選

鳥取県　土橋はるお

雨を降らしたテルテル坊主首を吊る
有刺鉄線が張ってあるから入ってみる
坊さんが追い越し違反して行った
合格の夜はスッポンポンで寝てみよう
行きはよいよい帰りはちどり足になる

熊本市　永田俊子

横顔をいつも見せてる反抗期
頂上に立ってゆるめる胸ボタン
緑の風に公私のけじめつけてくる
水仙がやさしい言葉を選ばせる
裏切った風のゆくえが気にかかる

佐賀県　寺中三枝子

乳房恋い亡母恋い夏のまつり笛
泣きボクロにおんなの軽い飢えがある
カルテまだ継続とあり雨季に入る
爪を噛む癖も忘れるほど多忙
素足ではく下駄の魅力を捨て切れぬ

守口市　森川まさお

雀の子ばかりが米屋の前に来る
荷造りに馴れない母から宅急便
一人になると痩せる体操しはじめる
城のある町にきびしい西日さす
登りつめた岬で海を見てる墓

熊本県　大川幸子

どう見ても命が余る預金帳
遠くまで飛ばし輪ゴムのうさ晴らす
浪費した月も合わせる帳簿尻
受話器から夫の敬語がふとおかし
カタツムリ飛びも泳ぎも出来ず生き

長岡京市　木本如洲

まろやかな情けに弱い母の髪
愚痴こぼす仲間があって竹細工
味噌汁の朝に男は救われる
適当なことばで逃げる軽い椅子
靴の泥生きる言葉を吐いている

愚痴入れた箱へしっかりかける鍵　竹原市　信本博子

失った影を探しに街に出る
掌中の玉偽であろうとなかろうと
こんなわたしになんと優しい手紙だろ
長く病む夫の吐息と二重奏　八尾市　高杉千歩

夏の午後ひとり遊びの絵そらごと
砂浜に埋めた構図へ虹の橋
絵三昧我れに返った遠花火
使い馴れた絵筆ひとつは柩用
ひとつしかない命です揉み手する　富山市　舟渡杏花

かず撃てばあたる誘いへみんな来る
行き先を告げずボーシが石を蹴る
お見透しのほとけへ言訳多くなる
残り火を煽る友達のともだち
ニンニクをたっぷり効かす悪だくみ　広島市　流奈美子

女まだ心奏でる愛の詩
昔むかしの話が好きな藁の屋根
引き出しは試行錯誤の反古ばかり
自己嫌悪赤い洋服脱ぎ捨てる
節介な風がベールを奪りたがる
掛け違うボタンの人へ握手する　今治市　野村京子

罪一つ隠すコロンを買いに行く
泣き切ったハンカチを振る春の風
古い絵で影が泣いてる紙カブト
船ベリを流灯ひとつ離れない　高槻市　河瀬芳子

バラ活ける今宵はワインなど添えて
グーばかり出すジャンケンに負けてやる
追い越してみればさほどでない日傘
ホロホロと卯の花散らせ走り梅雨
星の無い街でふる里など想う　熊本市　宇野昭代

事故の日のまま日めくりの忘れられ
借金に来て不景気を聞かされる
持ちぐされの宝は仕末しておこう
誰と逢う旅でもないのにときめいて
スキップで五歳になったと告げに来る　名古屋市　藤井高子

知恵の輪へ十指もつれるもどかしさ
母在さば在さばと思うグルメなり
中流の蟻保護色で這うている
現代のテンポ爪噛む暇もない
カラコロカラコロ夏の民話も宿浴衣　寝屋川市　太田藍子

女同士小さな旅でリフレッシュ
お若いと言われ少々無理が過ぎ
始発から乗って私の指定席

被害者の悲しい過去も調べられ
赤い帯締めてカタカタ夏祭り
久留米市　鶴久百万両

母逝きて花のこころが読めてくる
詫び状を書くとアメダス晴れになる
ワンタッチの恋は花火のように燃え
地獄まで遁げた女の火をかぶる
気晴らしに妻の肩もむ雨の午後
高槻市　笠嶋恵美子

花たちよ少し疲れていませんか
子が去んで笑い袋を買うてくる
蟬時雨千日回峰行つづく
ねんごろに蝶を葬う移植ごて
少し疲れて花屋の前で立ち止まる
和歌山市　桜井千秀

追い抜いて行く目礼が気に障る
滑稽な逃げの一手が笑えない
コミュニケーション利口ぶらない方がいい
櫂のない舟と知ったる慌てよう
せっかちの自己紹介が聞きとれず
熊本市　北川一進

二ァ人で歩けばこんな闇なんて
一言がこうもあの娘を黙らせた
お土産は宅配便で軽い旅
現金をちらりホステス見逃さず

寝るまでも大事に孫のお人形
羽曳野市　吉川寿美

月の暈かわりやすきは女の譜
相槌の泪か雨の泣き羅漢
ところ天人の噂もほどほどに
ひた隠しにしてもせんない皿の瑕
お世辞上手な鏡がそそのかす
京都市　松川芳子

ペンだこが悲しい過去に触れたがり
あしたまで待てと親父の胸算用
愛想が良すぎて客が落ち着けず
私にも手を貸す人のある冥加
だまされてばかりと笑うお人好し
大阪市　上田柳影

紫陽花のうすむらさきにある情
緑陰に五百羅漢の顔の艶
老妻とあじさい寺の昼の雨
画友訪えば裸婦もバックの夏の彩
草津市　久保和友

還暦へ悠々自適かと電話
諍いへ茗荷を刻む妻も老い
定年の淋しさぶらんこに揺れてみる
老鶯をきく銀婚が近い旅
寝屋川市　宮崎菜月

牛蛙鳥獣戯画そっくりの相撲みせ（万葉植物園にて）

どん底でソーニヤの愛が透き徹り（罪と罰）
消印もつけずに絵葉書飛んで来る
水軍の子孫で船酔いだけはせぬ

豊中市　三宅つえ子

カラフルな瓦に替える三代目
珈琲のカップに指が太すぎる
突っ張って見てもお前はかたつむり
古日記赤い栞が落ちてくる

吹田市　井上照子

カタログの種がきれいに咲いている
実のならぬ造花に母が精こめる
曲がり角楽しい夢が逃げていく
退屈の猫が背伸びをしてみせる

京都市　木村たけし

こどもの日宅急便の餅がくる
玄関で重い土産がベルを押す
アルバムに貼れぬ写真をとっている
退屈な部屋で遠くの風に逢う

富田林市　池森子

主義主張あって田舎に住む苺
一枚の父の絵画を遺書とする
わたしがふたり時々二つの鈴が鳴る
信号を守って貧しい席である

西宮市　松本一郎

制服を着れば働きバチになる
本を読むページを繰っただけのこと
根っからの妻善人で目が怖い
出雲路の旅で瑪瑙の根付買う

静岡市　中川みつ

瓜二つ姉に似ていた姪と会う
若者の日も出来そうな法の国
灰皿へ最後の決意捻じ押え
まだ女鏡の前を忘れない

尼崎市　鈴木良征

おべんちゃらが過ぎると鬼も嗤いだす
目算があるのか指をからませる
楢山で呑むドブロクがまだ出来ぬ
休診日医者はゴルフに行くらしい

佐賀市　古川一徳

妥協する口実握るもの握り
ワープロの愛のドラマに脈がない
反省はしない始末書書いただけ
梅雨晴れに父が誘った野球帽

東予市　小山悠泉

子が孫が夫婦の隙間埋めに来る
民宿の味山菜と人情と
離職者に迷路が続く不況風
五線譜に乗らない父の枯れ芒

尼崎市　山田保蔵

村まつり旅の一座がもてている

薄化粧嫁はん何かあるらしい
凡人のおかげで永生きしています
わが娘ならとっくにゲンコツかましてる

広島県　田村新造

風紋を踏み砂の泣くのを聞いている
毒のある言葉で友が一人去り
祈願絵馬虫のよいこと書き並べ
付き出しでちびちび連れがまだ来ない

佐賀県　江口万亀子

赤信号意外な人が渡りだす
子供にもそれなりにつく影ぼうし
ほおずきが熟れると恋の使者が来る
耐えてきたがまんの壺があふれてる

熊本市　黒田緑

深呼吸したら景色も新しい
豆腐ゆらゆら定見のない男に似
靴下をはけば七人敵が待つ
いいえともはいともとれる「まァまァです」

十和田市　阿部進

パワーがあるのに粗大ゴミにされ
内需拡大それは無理です失業中
窓際が無駄口ばかりたたいてる
定年の心なごます孫が来る

藤井寺市　高田美代子

こだわりができて風車が廻らない
甘口のカレーが好きな一人っ子
さよならを記して風と旅に出る
貧しさの笑顔で十字架を背負う

熊本県　高野宵草

ふところの軽さへ街で落ちつかず
今日もまた他所に降らせた雲の峰
出世した我が子は遠くなりにけり
母の手で神棚に乗る初任給

滋賀県　安田志津

久々の逢瀬を風と知積院
不満気な田の片すみの余り苗
梅雨時の約束あてにするでない
街道の鈴を聞いてる野の仏

尼崎市　森安夢之助

隙間から忍び込んでいる月の足
適材適所俺やっぱりハンマー振る
亡母の忌にうまい味噌汁思い出す
新芽を出したい造花のひとり言

弘前市　小寺ギホウ

酒のでる会議速やかに終了
やがてくる席にシナリオ書いておく
取り壊す柱についてる背くらべ
旅先の味を電話で知らされる

堺市　宮本かりん

長雨にピアノ同んなじとこばかり

家つきで生んでくれます蝸牛
ここからはもう迷わない靴の音
せわしげな尻ばかりくる朝の椅子
京都市　森川春子

椅子にもたれテレビ体操見てるだけ
ビスケットあれこれ型をおいて見る
手術後の夢は食べることばかり
口肥えた夫に献立聞いてみる
島根県　小田川智重子

遅くても早過ぎても困る夫の帰宅
レンガ一つ積んで背のびをしています
御在宅なれど只今トイレなり
父が逝きまわりが少しずつ動き
大阪市　亀井円女

雀達の会話がちょっと分りかけ
瀬戸内の小島が一つ欲しい夢
ライバルがきれいに老けてほっとする
知恵づいた孫の逆手にしてやられ
鳴門市　八木芳水

蛇口から母の愛情流す朝
片便りに終るであろう日付いれ
いつも風下吹き溜りとは受けとれず
友訪えばゲートボールに打ち興じ
西宮市　秋元てる

思い出の岸から発たす笹の舟
思案する隣に坐る義理もあり
老母の手に合わせ手荷物整える
神様は留守のようだが手をたたく
尼崎市　的場十四郎

一人旅砂浜ばかり歩いてる
遅刻して銚子一本買わされる
幕引いて二人好みの部屋にする
白い歯の少女は今日もよく笑う
唐津市　相葉あき

一本のマッチで闇が崩れ去り
十号の中で息吹く庭の貌
目一パイ建てて隣を借景す
イメージを変えて四角に立つ女
旭川市　朝倉大柏

難聴が一部始終を逃がさない
自分史に眉間傷やら向う傷
子の眼には父の伴走映らない
追いつけばくるりと運は向きを変え
守口市　結城君子

舟虫が急わしく話切り出せぬ
気がつけば号令してる妻がいる
橋赤く塗って温泉郷近し
朝寝坊だから朝顔まいている
島根県　今川三津江

人間の暮しをのぞく狸来る

米づくりどう変ろうと田植する
歯がいたい位で農家休まれず
満ち足りて無縁仏をも拝み

和歌山市　山田高夫

包丁のリズムで朝が動きだし
必勝法読んでパチンコ負けに行き
煙たがる目で禁煙を勧められ
代診の医者事務的にカルテ書き

京都市　小林英子

子つばめの口活きいきと初夏弾む
メルヘンの夢弾ませる飴細工
タンポポの終焉に風やさしくて
いそいそと胸弾ませた待呆け

大阪市　今西静子

流れ星肉親はみな北にいる
支持しない候補に握手求められ
日の丸のどうあろうとも国旗です
朝からの魚浜辺の宿の膳

出雲市　金村青湖

夾竹桃不倫のうわさきく街に
かけひきの前哨戦にする笑顔
オーバーな主張でゆれるイヤリング
わがままな男に戻るコップ酒

河内長野市　大西文次

死ぬ時は一緒の話かみ合わず
待たすだけ待たせ印鑑違います
公園に来てアベックを見て帰る
窓口で美人の方に貯金する

貝塚市　池田寿美子

川床に娑婆の風捨て舌鼓
梅雨晴間菖蒲浴衣の三味の音
ユーモアと山椒の実が効く人の和に
馬鹿チョンカメラが写ってない悲しさ

静岡市　安本孝平

残り火を燃やす詩のある日日楽し
老いてゆく空しさ埋めるペンの友
糖衣錠飲んで円満主義となる
夕食に愚痴も煮込んだ妻の味

鳥取県　乾隆風

妻そっくりのカボチャ抱えてもどる
八月のページを正す日記帖
ポケットに請求書あり墓参り
もらうなら裸銭でも有難し

岡山県　清水悠貴女

小さくともガラス張りです寡婦の城
背伸びして少うしきつい風に会う
さりげなく話題をかえる髪を梳く

米子市　小村てい子

三猿をまねていちにち姑の部屋
生け垣を廻れば我が家の灯が温い

歯を抜いて反論出来ぬ気の弱さ　高槻市　芦田静江

香りよぶ蝶を舞わせた金魚草
午前二時疑問解けない夜中の譜
花ごよみ今年忘れた藤の花　高槻市　津田スミ子

裏通りカレーライスの美味い店
父の日の園児の父が落ちつかぬ
道端の花にもそっと水をやる　大阪市　山田妙子

反対も妥協も出来ぬ貝の口
英会話最初のゆとりはどこへやら
梅雨空の待合室も湿りがち　尼崎市　吉永伊三郎

今朝も又婦唱夫随の膳につく
痛いとこやんわり突いて澄ましてる
菜箸を手なずけ嫁は気に入られ　尼崎市　木下義嗣

近道を知ってる友について行く
さつき展紅白幕に市長賞
妥協せぬ仲間が一人嘘を持ち　尼崎市　尾宮弘治

激論のうしろに強い妻が居る
尻馬に乗ると戦車が動き出す
なにかある娘が時計ばかり見る

人間が好きで雑踏の中にいる
繁華街銭あるような貌でゆく
お詣りをしたが小銭が切れていた　伊丹市　小熊江美

雨の日の一日雨を見ていよう
一人寝へ季節の声というカエル
継続は力　衣笠さんおめでとう　竹原市　岩本笑子

傘寿なお盛ん父の作業服
チェーンソー杉の悲鳴を聞き流す
定年のベンチは鳩と小半日　八尾市　鷲見章

傘に寄り添う思わぬ雨を嬉しがる
直訴した私一人が悪者で
スモモ熟れる父も母へも健在に　和歌山市　田中輝子

道づれと思うて耐える夫婦坂
岬からゆく先告げぬ船を追い
耐えること教えてくれる仏間の灯　岡山市　中嶋千恵子

万華鏡愛した日々の走馬灯
あのお店あのかみさんでもっている
さくらんぼ小さな恋の実が結ぶ　西宮市　上嶋ふさ子

鳥取県　田村きみ子

背のびする母に積木がくずれ出し
裸一貫男の汗がほろ苦い
黄昏の道セーラー服の花が咲き

鳥取県　太田幸枝

ぜんそくの天気予報がよく当り
保険金あこぎな策を考えず
突然の訃報へメザシまで跳ねる

兵庫県　森脇和子

新緑がまぶしい里の散歩道
落ち込みを包む味方の手の温さ
愛される倖せレモンの香が匂う

大阪市　木本ゆかり

温泉へとなりの犬も行ったそうな
やさしい人には花束おくります
高速渋滞　今日も平和な都会です

鳥取市　山田草人

燃え尽す蛍へ闇はもっと濃く
泪もろくなって蚊遣りにも泣いて
ショートケーキ作って老妻が若返る

静岡市　澤田きん

庭隅に鳥が運んだ芽を見つけ
身の上を明かして和む旅の宿
あした死ぬ蟬は力の限り鳴き

堺市　桜沢あか里

白い花つけてドクダミ　ユキノシタ
団扇手に上り框で憩うお茶
縫い終る頃に調子の出るミシン

熊本市　鶴田謹爾

鈍行で山菜料理の旅たのし
ワッと言う声に富士山チラと見え
解説者言わずもがなのことを言い

熊本県　岩切康子

周遊券休暇いっぱいの旅廻り
ロングスカート大根足もカバーする
マネキンに人工呼吸を操り返し

堺市　宮本甲馬

大阪が大好き寛美の阿呆が好き
ハンコさえ捺せば他人になるもろさ
歩道橋はアルプス老人迂回する

吹田市　栗谷春子

リボンかけて名前もしれぬ花ばかり
三つ編みに二三度結うて髪を切り
食べものでもめている間は安心さ

静岡県　薗田漠沓

振り上げたげん骨たやすくおろされず
にわとりに言葉をかける妻の愛
かたくなに軍語通した友は逝く

堺市　梶本靖郎

「金送れ」泣かせた母ももう八十
停年が気になりだした五十すぎ

古い事モテた話でしわものび
広島県　森川抜智

売上税中曽根さんは少し痩せ
日の丸も君が代も皆おらが国
大声で怒鳴るも元気な証拠なり
静岡市　三浦つね

庭の隅ひっそり咲いたバラの花
田植時喧嘩をしてる暇がない
顔見知りあまり立派で近寄れず
静岡市　久保きぬ

石橋を叩いて渡る暇がない
手鏡に素顔写して負け惜しみ
誰彼と選ばず揺れる柳腰
寝屋川市　井上すみれ

ツインビル大坂城を小さくし
束の間の止り木静かにしておくれ
盆景を座り直して見る砂紋
海南市　三宅保

君が代を論じる声は大きいが
才媛は家事が不得手と知らなんだ
核心をついて返り血浴びている
岡山県　後安江山

忠実に働く孫娘で愛しく
手折るには惜しい我が家の紅椿
苦労などなかったような花の顔
倉敷市　田辺灸六

ベッドにも馴れてパジャマの衣替え
父と娘は目と目でものを言うて済み
病床の窓へ見舞いの盆の月
今治市　渡邊伊津志

画家の眼の正確さ知る壁の色
お握りの一粒ずつにある主張
又曲る寺の廊下の黒光り
大阪市　川原章久

糸切歯絹糸鳴らす母の夜
鰻丼にしようとデスクの内緒事
孟蘭盆会仏知ってる空涙
兵庫県　奥野テル

貧しさは言うまい三食米の飯
平凡な人生だけど夢捨てぬ
古傷をかばってくれる母の膝
大阪市　井上白峰

ダイレクトメールが招く碧い海
束縛の無い人生を持て余す
カタカナに辞書をひく日の多いこと
愛媛県　八塚三五島

運動会わが子の他はピンぼける
洗い髪女の闇を深くする
茶友達だけの事なら足りている
静岡市　浅子まつゑ

孫達と背くらべする老いの坂
鉢巻が似合う寿司やの出前持
肩書がついたと母は子の自慢

呉市　蔵重成人

筋書は未完のままで夢捨てぬ
民営化無料パスだけちゃんとある
漬物石話せる母がいて平和

島根県　松本聖子

政治屋にかき廻される水面下
駄目押しと知っていながら押しておく
深呼吸胸のボタンが飛びました

大阪市　吐田純子

娘に送る荷物を詰める母の指
ストレスを溶かすコーヒー飲む女
ロスの娘の声がうれしい母の日に

和歌山市　森茜

さげすみも交ったけさのメイクアップ
野次馬が口はさんでる金魚すくい
もうけ話軽い男が得々と

岡山県　杉本伊久栄

飲めばすぐ顔に出ますとチョコを伏せ
まだ夢があります紅をさして見る
夢一ぱい詰めた女の化粧箱

青森県　福士トキ

天皇と同んなじ年を父自慢
運動会だからと孫に起こされる
女同士視線が走るお弁当

山口県　高崎雀声

庭石になって岩石みとめられ
嫁き遅れ心配な親平気な娘
所聞くだけの高級車が止まり

岡山県　千原理恵

ビールの泡ブツブツ妥協してくれる
老いた男と老いた女のひとつ傘
しがらみを捨てた女の束ね髪

大阪市　島路太郎

老僧が杖もつかずに高野道
籐寝椅子チャタレー夫人読んでいる
能率へ紺一色の作業服

和歌山市　丸岩晏

代筆と読みとり褪せたラブレター
雨傘もパターの代わりするホーム
願いごといっぱい神の名は知らず

大阪市　平井露芳

浦島の本当は金塊欲しかった
痩せ型が好きなタイプの蚊に食われ
又来たと再入院の顔見知り

尼崎市　新井泰子

うちの子が越えられるだけの親でいる
神ほとけ今日だけ信じるねがいごと

お手玉も竹馬も下手ファミコンも　鳥取県　西川和子

助手席で違った道を教えてる
夢描く絵の具の色が揃わない
簾の向うビールの泡が盛り上がる　鳥取県　津村八重子

盆灯篭ばかりを褒めて客の群れ
カラフルなタオル浜辺を埋めつくす
一匹のホタルがルビーらしく輝り　鳥取県　黒田くに子

荒波を凌ぐ小舟を妻とこぐ
母の日へ主役くるくるコマねずみ
遠花火わたし逢いたい人がある　吹田市　西岡豊

口下手も睨みで利かす意地がある
開発に平和な町が揉めている
水割で本音を吐いた梅雨晴れ間　岸和田市　三輪通彦

汗かいた後へビールの一気飲み

奥大井旅行（二句）

ＳＬと茶の香にむせぶ奥大井
大井川またぐ二〇〇の鯉のぼり　羽曳野市　麻野幽玄

つまされてテレビへ涙する孤愁
一匹を釣るに大きな撒き餌篭

遠来の客のカメラで撮る我が家　島根県　児玉幸子

四季の花朝の目覚めを楽しませ
カーネーション届いて電話に孫の声
いっぷくのお茶へ庭師の失敗談　熊本市　立道善太郎

減反田うらめしそうに田植見る
花一ぱい供えて朝のごあいさつ
酒の縁断って日々是好日　静岡市　滝花喜平

駄法螺吹く大風呂敷を広げすぎ
離婚劇過去の話はしたがらず
卒業を褒めて成績にはふれず　大阪市　堀口欣一

汽車弁はやっぱりうまい鯖の味
持てるだけ持って帰れと里の母
青年の靴磨かれて磨かれて　岡山県　伏見すみれ

早口に大阪弁でまくし立て
忙しく働きいつも金がない
パソコンで遊ぶ子供に詩がない　豊中市　小林一夫

青天白日猫には猫の影法師
この橋を渡る勇気は持っている
炎天の孤独ひまわり枯れている

和歌山県　森　三枝子

裏庭で夫婦喧嘩の涙ふく
鍋磨きつつ姑の叱言がまだ続き
笑わない夫で欠伸ばかり出る

鳥取県　山根八重

若い時八重歯が人気の的だった
温泉とグルメの旅にのせられる
輝やいてイミテーションも同じ彩

泉佐野市　真崎浪速子

もう一つの顔で話をつけにくる
食欲と道連れの旅世は楽し
実印の重みずしりと追ってくる

唐津市　浜本治幸

老妻の心拙い絵をほめる
山門をくぐる日が増す老いの坂
名も知らぬ囁くような花の群

鳥取県　乾喜与志

ひと眠り醒めてもガイド唄ってる
浜名湖や十三階の温泉にひたる
風鈴に化けた狸がチリンチリン

泉佐野市　大工静子

無口者西ののぞきでさけび声
瞼閉じ遠き彼方の儀を祝す（孫の結婚）
病院の片隅一人ジュース飲む

益田市　里本たかし

入園する孫と茹卵に飽きる
決心した途端に売り子寄りつかず
婿に似る孫の守りをして疲れ

新発田市　上鈴木春枝

ある不安長いと思う聴診器
お帰りとトイレからまず言うておく

唐津市　野田旭恒

脱線の夜は書けない日記帳
舗道には蹴る石も無し待ち惚け

唐津市　原野常善

酔えば泣く癖の女をもてあまし
沢山の男を食ったサングラス

静岡市　柳沢たま

避難命令出たかのような蟻の列
ハネムーン母は駅まで泣きに行き

島根県　菅田かつ子

いやいやをしても赤ちゃんほめられる
福耳の聞こえぬふりをして平和

竹原市　古田太虚

他人事のようにさつきが咲いている
矢印の通りにおとし穴出来ている

新宮市　船越正

世話好きでこまめに動く患者居て
救急車ただ今私乗ってます

田辺市　染道佳明

ソーメンも枝豆も茹でてあります
わたくしを詩人にさせる虹の橋
奈良県　和田萬里

知り合いの又知り合いでけりがつき
背中からまだはみ出てるランドセル
青森県　波ただお

ズック靴干してる屋根の陽が眩し
一坪の庭にも雀降りて来る
大阪市　冨岡温子

行きつけの店で何時もの指定席
待ち合せ今来たふりをするゆとり
川西市　田中毛俊

来客は妻に疲れを置いて行く
かるがものツアーで老人大はしゃぎ
河内長野市　植村毛代

言うことがオウムだったら可愛いが
体力の落ちた分だけ娘が育つ
静岡市　杉山やす

皺の顔三面鏡が笑ってる
外孫が初月給を分けてくれ
竹原市　古田比呂子

キラキラと輝く若葉は透明感
ウンウンと黙って聞いているゆとり
吹田市　山田里子

来る者は拒まぬ寺の箒の目

好き勝手廻りぶつかる夫婦独楽
藤井寺市　菊地繁男

飛び越えた水溜りにある百円玉
回転ドア前行く人に追いつけず
岡山県　松本元江

夢覚めて未練ばかりが残る朝
虚々実々日本列島揺れにゆれ
鳥取県　鈴木ふみ子

明日の夢まよいつ生きる小羊よ
影法師つよい太陽に溶けそうな
尼崎市　中澤向西

田植すみ緑風が吹く田舎道
目に効くと八ッ目鰻も食べました
新潟県　高野不二

一株買って投資家の顔をする
煙草やめる決心もう一日のばす
京都市　山脇正之

無口な父ひねもす土と喋ってる
今日の体調確め合って老い二人
鳥取県　木下二美子

西国を亡き姉しのび遍路する
働けど金にならない老いの年
大阪市　桝本蕗児

廃線のレールの間に蕗のとう
ゴム長をはいても女は女です

未熟期の早苗励ます水満たす　弘前市　真喜内　實

田植機を怠惰と思う母の鞭　八尾市　松下蕉露

自販機に頭を下げて缶ビール
札束に負けた男の自己嫌悪　唐津市　入江毘久夫

擦れ違う会釈に匂う若葉風
蟬の羽一重なれども暑くみえ　八尾市　椎尾公子

雨に発ち雨で帰った古都巡り
故里へ墓参の旅は孫を連れ　富田林市　大澤三四子

気が急いて乗った電車は各停で
雨止んで引越し忙しかたつむり　岡山県　牧野秀香

誘致して公害訴訟に持ってゆき
バス休憩鏡に並んでコンパクト　久留米市　中垣米之

中道党あんたの顔はどちら向き
佐賀県に陛下をお迎えして
葉隠れ路さわやかに縫う特別車　島根県　岩田三和

一つだけ買ったオモチャに児のけんか
今日は雨たまご産むのもたいぎがる　岡山県　後安ふさえ

遍路笠夫と峠の握りめし
食卓の花一輪が味をそえ　岡山県　土居ひでの

盆太鼓小さな主役の豆しぼり
断片を拾い集めて孤児の地図　静岡市　大石たき

小猫捨て眠れぬ夜や風の音
血統書付いて鎖が離せない　静岡市　西村千代

底抜けに明るい友に明日会える
何もかも嫁にまかせて旅に出る　兵庫県　円増貞子

良い物を着てなはるなとそっと触れ
愚痴一つこぼせぬ夫の背の丸み　岡山県　池田半仙

アルバムはカメラマニアの日記かも
万国旗どれでも好きと限らない　岡山県　富坂志重

弁当を四つ見送る祖母の朝
命日にこまめな母の酢の匂い　静岡市　青柳金吾

園児等に手押しポンプが珍らしい
減塩の食事にやっと馴れて来た　黒石市　相馬英三

ほろ酔いで妻の姿に今晩は
簡単に申し述べたと長祝辞
福岡市　吉川一郎

追いつめず少し逃げ場を空けておく
試着室でマネキン通りポーズする
和歌山市　青枝鉄治

宴会で早い茶漬を食う勇気
送り出しまた暫くは立ち話
徳島県　宮武まつ女

鬼となり仏となってスキャンダル
汗流す事が好きです半端でも
八戸市　島田昭治

燃えつきて定年となり気が抜ける
万能と思わぬ金にいじめられ
岡山県　戸田種子

生野菜食べよとバセリつけられる
さつき展どれも一、二をつけがたい
橿原市　西本保夫

偉そうに言うても画けぬ設計図
コンパスのいま中心に老夫婦
出雲市　久谷まこと

並ぶ顔一人笑いを忘れてる
鶴を折る手は絶やさない平和の火
出雲市　高橋きよし

内証ごと書けず葉書にしてしまう
米子市　新正子

ままごとの誓いは指切り針千本
あこがれはスープの距離と白い馬
大阪市　朝田晃世

有明の潟に踊るシンフォニー
番犬は闇のいきさつみてました
流山市　神田治

美女が脱ぐ必然的か自主的か
二十分が勝負弁当とトースター
和歌山市　三谷周三

まだ宵の口だがネオン水に映え
かけ過ぎた保険の金に四苦八苦
岡山県　江口有一朗

囲碁

静座して一石にぎる静と動
碁仇と石で対話の攻防戦
岡山県　福原悦子

足音も個性の音をのせてくる
子離れの大地に花の種を蒔く
静岡市　谷紀代志

花抱いて花を渡さぬ衣怙地者
里帰り将棋に親の威厳見せ
吹田市　木原絹

世渡りが下手で身にしむ北の風

福寿草にこっと孫の笑い顔　岡山県　平田たけよ

父の日の汗が輝く顔の皺
にぎり飯となりはつりに行くらしい　豊中市　玉井房子

ランドセル背負わなくなり四年生
博多帯お揃いなりと姉賜う　泉南市　坂根流水

政治家のお金集めはパーティーで
社寺参り信心なぜか深まらず　呉市　岡田寿美礼

鈴らんはおちょぼ口にて呼んでいる
若き日の写真に心青春も　東大阪市　大平太一郎

老いて尚母校の活字へ目が走り
サンデーが雨で父の日親子の日　静岡市　丹羽定次

女房の肩を借りてる病み上り
この人について行けると心に決め　奈良市　井上大

掛布ファームCMに出てよいのかえ
溜息の風船空の甲子園　和歌山県　田中隆積

兵庫県礼讃

スマートさ求め神戸の街巡り
文化の県ゆえに足下大切に

一代記哀しいまでの女面
保険掛け若葉マークの車行く　和歌山県　山田久子

出産の祝い照れてる若いパパ
朝寝坊するのが惜しい初夏の庭　大阪市　喜多佐津乃

金婚の父母温泉で温める
怒り肩亡父そっくりの影と行く　鳥取県　久野野草

八起きする気力も失せた転び癖
梅雨空に鳴る矢車の音哀し　奈良市　米田恭昌

趣味持って孫に連なる宝物
趣味と行く老いの坂にもファイト出し　大阪市　渡部トキワ

友の褒章を祝う

褒章の友と武蔵野語り合い
深ぶかと絨毯ふみしめ豊明殿　豊中市　額田明吉

◆ジュニアの部

転校生写真相手ににらめっこ
わたあめで赤いふうせん一人旅　尼崎市　新井朋子（中二）

友だちとあそぶよていがつまってる
長電話たまには母ちゃんやめてくれ　枚方市　二宮正彦

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

嘉数兆代賀

へそくりを増やす本だよ買わないか

笠嶋恵美子

木に餅がなるような本を買えとセールスがやってくる。それが老人や婦女子を狙ってくるのだからご用心。危い橋は渡らぬことです。

毬ころころと春の笑いをつれてくる

流奈美子

暗い句の多い中で明るい気持のよい句に出合いました。春の笑いを連れてくる、こんな表現私も習いたいです。

金魚にもあくびをさせている無風

藤井高子

風鈴ひとつ鳴らぬうだるような暑さを、金魚さえ疲れて欠伸していると充分に言い表わした佳句だと思います。

新参者です隣の墓へ亡夫のこと

河瀬芳子

全快を祈り乍ら一途に看病した夫も遂に還らぬ人となった。隣の墓石に夫の事をよろしく頼むけなげな奥さんの愛情あふれる句です。

授かった双子へ軍手の穴がふえ

舟渡杏花

子供を授けて下さいとお願いしていたら、元気な双子を授かった。さあ忙しいうれしい悲鳴を、軍手の穴がふえ、とさらり表現しておられるお手際の妙を買います。

泥の靴生きる言葉をもっている

木本如州

泥靴は泥靴なりに信念をもって生きる道を進んでいるのです。泥靴よ、肩を張って自分の信じる道に進んで下さい。

身に覚えない噂がひとり歩きする

吉川寿美

自分には全く覚えのない噂が流れているのを聞かされた日のショック。人間不信、信じるものは私の心だけです。ただ自分を信じて力強く生きていきましょう。

失意の胸からふるさと行きの汽車が発つ

朝倉大柏

この句は錦を着て故郷に帰る日を夢みて都会で働いている少年工を想いおこしました。どんな事にも挫けないでがんばって下さい。

正直にいえば幸せこわれそう

井上照子

正直にいえば自分が不利になる。だからといっていい加減なことのいえない善人です。正直なあなたにはきっと神さまが味方します。

待ちぼうけひやかしてゆく青葉風

安田志津

時計ながめて眺めて遂に夕陽は沈む。あー遂に来てくれなかったと、帰る重い足どりを青葉風までひやかして過ぎるような失意の一こま。

たまさかの敬語が喉にひっかかる

東浦砥代

私も敬語が余り好かぬので岡山弁丸出しでしゃべるのですが、時たまお偉いさんとの初対面等になると全くこの通り。

病癒え置き場に困る千羽鶴

新井泰子

一羽一羽祈りをこめて折った千羽鶴も、さて元気になると置場に困るという人間臭い句いのする句。でも自分の上で祈りつづけてくれた千羽鶴です。大切にしてやりましょう。

雑草も踏みつけられた意地がある

山田保蔵

雑草の宿命。切られても踏みつけられても立ち上っていかねばならぬ、これが雑草の意地でしょうか。我々庶民にも通じるものを覚えます。雑草よ、お互いにがんばりましょう。

安楽死の切符ほしくて合掌す

清水悠貴女

誰しも安楽死を願わぬ者はありません。そこで句の着想は新しくはないのですが、切符ほしくて合掌す、には全くまいりました。表現の如何によってこんなに佳句になる。

愛染帖

橘高薫風選

青森市　工藤甲吉
年下を愛す抱卵するように
青春一過タンポポも鳴呼白髪

鳥取県　江原とみお
十万円金貨が唄う枯れすすき
身の内をときどき汚す深海魚

笠岡市　木山遠二
梅雨入りによもや真青な空となり
口喧嘩相手の妻が笑い出す

和歌山市　後藤正子
はぜる音想いを少しでも遠く
グラタンもロールキャベツも筋書に

今治市　月原宵明
挑戦のまなじりとなるコンパクト
円高のまま鉄の町雨期に入る

守口市　森川まさお
舟小屋の屋根水色のペンキ塗り
無人島汀に鳥居だけが建ち

唐津市　田口虹汀
山彦は男決して裏切らぬ
旅人に話しかけそな無人駅

岡山県　小林妻子
復員後まだ現役が続いてる
籾種へ休耕のこと話すまい

鳥取県　土橋蛍
うれし涙は君を美人にしてくれる
夏服は齢より若い柄を選る

守口市　結城君子
ハンモック本伏せたまま眠りおり
ツインビル互いの影を映し合い

箕面市　椎江清芳
憎らしい男の前に来ぬ芸妓
原点にまた舞い戻る髪かたち

大阪市　山田妙子
引き潮も満ち潮も良しフルムーン
病気までおしどり夫婦になっている

岡山県　山本玉恵
そこまでの噂で止んでたそがれる
補聴器のあの海鳴りはまだ消えぬ

八戸市　島田昭治
懸命を自負した僕の走馬灯
当然のことが仲々むずかしい

米子市　八木千代
次の世は月に咲きたい月見草
人の世や縺れた糸の長みじか

岡山県　清水悠貴女
うちわ一本吹いてくる風匂い立ち
雑草が風の握手でときめいた

吹田市　栗谷春子
きつつきが郵便受に投函した

米子市　光井玲子

米子市　白根ふみ
縁談を減点法で消してゆく
肉じゃがというメニューあり独歩の忌

寝屋川市　岸野あやめ

豊中市　田中正坊
数え年白寿の母の日々愛し
電灯の紐を長めにして眠る

吹田市　後藤火鳥

米子市　田中亜弥
鶴を折る指は誰にも気付かせぬ
無視すれば鰯もきっと汐を吹く

島根県　林瑞枝

平田市　久家代仕男
だいこんの芯まで母が沁みている
西日さす店で勲章売っている

鳥取県　新家完司

尼崎市　春城武庫坊
むらさきを着ると心もむらさきに
偶数でも奇数でもなく妻の位置

和歌山市　西山幸

近江八幡市　前川千賀子
真うしろの敵へ一球はずさねば
枕辺に劇しく生きし女の記

和歌山市　松原寿子

富田林市　藤田泰子
夕食の妻子の会話ピンポングー
卯の花や実盛風の二階堂

千葉県　神田治

奈良市　井上大
愛を断つ音にも聞こえ鐘を打つ

今治市　渡辺伊津志

島根県　西浦小鹿

英霊が蘇えるから恐くない　米子市　小西雄々
原潜がどこかにひそむ波しぶき　弘前市　波多野五楽庵
法華経の声で目覚めた老夫婦　今治市　山田宝保
御写経は無の字ばかりをよく覚え　奈良市　米田恭昌
星ひとつ母は泉下ち旅立ちぬ　米子市　青戸田鶴
旅ならば鈴の音色の澄む方に　米子市　沢田千春
思い出はふってもならぬ神の鈴　岡山県　土居耕花
緑豆腐お前は少し頼りない　大阪市　渡部さと美
ことしまた父を見直す父の日に　唐津市　仁部四郎
留守番を買って系図を書いている　寝屋川市　平松かすみ
留守番の仕事新聞入れるだけ　福岡市　吉川一郎
笛吹けばすぐに雑兵歩調とる　和歌山市　桜井千秀
おトボケの巧さで泳ぎ切る気かな　唐津市　山口高明
先代と毛色が違う社長室　米子市　川上より子
自縄他縄緑の風が聴きに寄る　大阪市　塩田新一郎
笑い過ぎ泣いてしまうも女かな　和歌山市　神平狂虎
やがて炎に変わるおんなの涙かな　西宮市　奥田みつ子
芍薬を今年も活ける母の墓　豊中市　渋谷史子
飛天の間手作りケーキ憎いこと　徳島市　宮武まつ女
故あって貧しき町へたたむ傘　藤井寺市　福元稔
新宗教暴力団のように見え　静岡市　渥美弧秀
妻の針チクリと起爆剤となる　寝屋川市　宮尾あいき
満ち足りた朝は菩薩の眉を画く　高知県　曽我部裕
大雨を突いてたばこを買いにゆく　和歌山市　山口三千子
助走して待てど私の椅子はない　鳥取県　土橋はるお
フライパンで姑を上手に焼いている　愛媛県　藤原無想
極楽の夢が見とうてまた眠る　兵庫県　吉田明
疑問符が解けずじまいに深い夢　竹原市　信本博子
欲ばりで過去も欲しいという女　茨木市　井上森生
龍が住む人の心の奥のこと　西宮市　瀬尾六郎太
雨が欲し紫陽花変化早よ見たし　唐津市　久保正敏
ネオン多彩此処では慈雨も嫌われる　大阪市　板東倫子
政争も野球も判官びいきなり　川西市　野村静雄
ご機嫌を嗅ぎ分けている妻の勘　島根県　堀江芳子
この期待千になったら翔べよ鶴　鳥取県　堀江正朗
より添って瞼にのこる月の貌　大阪市　亀井円女
ひよどりと目と目が合った嬉しい日　岡山県　伏見すみれ
寄せ植えのような家族で温かい　岡山市　井上柳五郎
虫のいい頼みごとあと寄りつかず　宝塚市　丸山よし津
下積みに馴れて喝采欲しがらぬ　尼崎市　春城年代
玄関に山百合活けて農繁期　吹田市　井上照子
レ・ミ・ゼラブル書棚の隅に昔から　東大阪市　大平太一郎
アジサイを見る朝朝の新しさ　大阪市　今西静子
干かれいのおとがいの中風抜ける　唐津市　筒井朴竜
ご巡路を掃き清め佐賀植樹祭　島根県　松本文子
屈辱に耐えつつ毛虫蝶になる　豊中市　辻川慶子
ポスターに東林院の沙羅双樹

茨木市　堀　良江
未草ゆらして鯉の姿なく

寝屋川市　堀　江　光子
世界地図要所に点を打つトップ

和歌山市　福　本　英子
兄嫁とオペラグラスで酔う歌舞伎

岡山県　矢　内　寿恵子
野麦峠の涙を絹が語りつぐ

和歌山県　染　道　佳明
燃えつきていない女の芯残る

吹田市　西　岡　豊
あきもせず孫の仕種の好奇心

西宮市　朝　山　千世子
彫刻の森の美へ富士さみだれる

大阪市　北　勝　美
河内にも文化生きてる業平忌

芦屋市　竹　中　綾　珠
仏壇に愚痴を言う事せぬ私

唐津市　浜　本　治　幸
花が散り夏来る老いの早き日々

名古屋市　藤　井　高　子
惜しみなく拍手贈って敗者たり

米子市　茂　理　高　代
北窓に陽がさしたから開けてみる

岸和田市　古　川　ひで
ひそやかに愛をはぐくみ天の川

唐津市　浜　本　義　美
閉山の挽歌フェリーが島を発つ

大阪市　桝　本　露　児
撒き餌しとこ人間にも魚にも

米子市　金　山　夕　子
いい音で太郎の鈴が鳴りだした

新発田市　上鈴木　春　枝
雨とだけ書いて進まぬ日記帳

弘前市　真喜内　實
綿帽子無垢なぜんまいおらが嫁

大阪市　島　路　太郎
記念日と言えば銀婚式もすぎ

岡山県　千　原　理　恵
葬列の遺影にそって傘をさす

和泉市　岡　井　やすお
兎には手頃な兎小屋が建ち

羽曳野市　田　中　隆二
妻の持つ赤鉛筆はちびている

岸和田市　芳　地　狸　村
手作りの茶碗私の彩がある

兵庫県　脇　田　米　朝
デカンショで踊り明かした日の旅愁

豊中市　上　田　登志実
滝仰ぎながら汗拭く箕面山

西宮市　松　本　一郎
職退いて緑の季節五度めぐる

松原市　小　池　しげお
制帽をぬいで駅長一服し

愛媛県　石　手　武
一粒を天が零した流れ星

和泉市　西　岡　洛　酔
独りっ子月は淋しいものと決め

大阪市　川　原　章　久
おばあちゃんチンマリ正座グリーン車で

富田林市　浦　田　トシエ
孫と乗るブランコ藤の花の下

大阪市　町　田　達　子
余情まだ旅むらさきの霧の中

唐津市　野　田　旭　恒
脱線の模様は書けぬ日記帳

和歌山市　大　木　文　子
裏表ない犬の仔に語りかけ

堺市　高　橋　千万子
道をきくだけにも人を選り好み

弘前市　斉　藤　劣
鉢巻が一番知ってる米価論

富田林市　片　岡　智恵子
占いで経営判断するトップ

和歌山県　三　宅　保
アドリブで他人の心が打てますか

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課　題　「はがき」　選者　**森中恵美子**
締切　**8月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43
NHK大阪放送局〝ふれあいラジオセンター〟川柳係

発　表　8月23日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

川柳塔唐津支部
結成五周年記念大会

期日 **昭和62年9月27日**（日）
会場 唐津市西城内　唐津市文化会館
電話〇九五五―七二―八二七八
会費 二千円　投句料　一、〇〇〇円
当日　一、〇〇〇円
題 通う　仁部　四郎選
許す　真島美智子選
利息　撫尾　清明選
会長　出端　九一選
撃つ（打つ）　山本規不風選
奥の手　藤村　〆女選
ラスト　黒川　紫香選
各題2句・締切11時40分
㈠事前投句「通う」投句料とも9月15日（火）までに左記へ
〒847 唐津市和多田天満町　仁部　四郎
㈡事務局…久保正敏　電〇五五七―三―二四七一
〒847 唐津市栄町二五七〇川柳塔唐津支部
◎関西より参加の方は黒川紫香までご連絡下さい。出発は9月26日㈯になります。
◇9月26日（土）
新大阪発9時58分ひかり1号
博多着12時57分　唐津「城内閣」一泊
◇9月27日（日）
曳山会館見学10時　川柳大会11時半
懇親会18時半
◇9月28日（月）
「城内閣」出発9時　波戸岬、田島神社
七ツ釜等を船とバスで観光
博多発15時49分ひかり12号
新大阪着18時48分
〈経費〉大阪・博多間を除き3万2千円

水府忌
番傘八月句会

日時 **昭和62年8月6日**（木）18時
会場 大阪市立労働会館
JR大阪環状線・地下鉄中央線「森の宮駅」下車西へすぐ（日生球場東隣）
宿題 歩く　丹波三千子選
弁慶　保木　寿選
砂　安井　久子選
凄い　黒川　紫香選
渡る　磯野いさむ選
席題1題　各題2句　締切19時
会費 五〇〇円
主催　番傘川柳本社

昭和62年度（第29回）秋田県芸術祭参加
第52回秋田県川柳大会

日時 **昭和62年9月6日**（日）10時
会場 秋田市中通六丁目七―三六
「秋田県労働会館」
電話〇一八―三三―二三三五
宿題 「のんびり」　永谷　和子選
「案山子」　京谷　京一選
「面影」　佐藤　砂長選
「包む」　広川　てる選
「石」　小林　泉里選
「中年」　猿田　寒坊選
「雑詠」　橘高　薫風選
席題 二題　各題二句　11時30分締切
賞 合点二十位まで
会費 一五〇〇円（発表誌・昼食・写真）県内の方は、ほかに懇話会費五〇〇円
投句料 一〇〇〇円（発表誌呈）
懇親会 二〇〇〇円
投句締切 8月31日必着
投句先 〒〇一八―一七
南秋田郡五城目町中川原六八―一
猿田寒坊方
第52回秋田県川柳大会事務局宛
主催　秋田県川柳懇話会

女性コーナー

黄香の忠

小出智子選

ぽっくりと死にたいなんて嘘を言う　大阪　鍛原　千里

けんめいに逃げても過去は振り切れず

こんなにもこんなに小さい花　命　竹原　古田比呂子

軌道修正夢もだんだん小さくなり

川幅が拡がり声が届かない　大阪　本間満津子

見舞客わが病歴をひとくさり

私にはわたしのさだめ坂を越す　和歌山　松原　寿子

叩かれて斬られて向きを変えてみる

鉛筆で書く家計簿に嘘があり　吹田　茂見よ志子

靴を脱ぐ背にねぎらいの風呂加減

予定表の余白で昼寝しています　大阪　西出　楓楽

帳尻を合わすお茶漬食べている

言い訳は水を一杯飲んでから　堺　小西　小雪

逆立ちをしてもアイデア湧いてこず

あきらめてから屈託のない笑顔　堺　宮本かりん

祝盃に父の笑顔が照れている

夕暮れの吐息は人に見せられぬ　島根　松本　文子

バンザイが耳底にある紙の旗　岡山　清水悠貴女

階段を下りる初心に戻るため　和歌山　堀畑　靖子

妻は留守だんだん腹が立ってくる　西宮　秋元　てる

核心にふれぬ話であたたかい　和歌山　森　茜

ライバルとしゃべり応えのある電話　尼崎　春城　年代

パラソルが少し美人にしてくれる　高槻　河瀬　芳子

悩みごと無い人と見るメロドラマ　和歌山　福本　英子

一途とは愚か明日はしぼむ花　藤井寺　高田美代子

人を待つ視線を犬に見詰められ　大阪　鈴木　節子

咲いたとも騒がぬ梨が実を付けた　岡山　富坂　志重

告白に燻り出した火消壺　和歌山　坂部紀久子

素通りは出来ない町の地蔵さん　和歌山　内芝登志代

涙線の脆さを風にのぞかれる　八尾　高杉　千歩

両の手によりどころ無いさくらんぼ　松原　佐藤　藤子

親孝行教えてほしい授業料　堺　高橋千万子

筋書を違える善と悪の数　和歌山　西山　幸

朝顔も植えて転居の地になじむ　和歌山　山川　克子

ふるさとは海に夕陽の沈む村　愛媛　柿内佐々子

ほほずりを残して去った初夏の風　島根　喜島　ノブ

らっきょうの芽が出た母を嫁がせる　田辺　染道　佳明

息抜きの相手にされてるとも知らず　大阪　神夏磯道子

雑念のなかでコトコト蕗を煮る　羽曳野　吉川　寿美

夫と娘に勝ち目はなくて風呂へ行く　大阪　堀　いくの

豊かさに馴れて湯水をあふれさす　宝塚　丸山よし津

童唄うたい素直な目にかえる　岡山　矢内寿恵子

泥と陽に焼けた顔ですすみません　青森　福士　トキ

泣いて泣いて雨が止んだこと気付く　和歌山　後藤　正子

内緒話聞かされている昼下り　芦屋　竹中　綾珠
嬉しい日影もはずんでついてくる　和歌山　山口三千子
老醜を気安く流す仕舞風呂　姫路　丁坪サワ子
終章を飾る花火がしけていた　和歌山　木本　文子
夏風邪のしぶとさ焦らす蟬の声　和歌山　桜井　千秀
それぐらいまだ出来ますと姑強気　寝屋川　太田　藍子
心まで許しはしない帯の芯　岡山　灰原　泰子
やわらかい舌で転がす花言葉　兵庫　東浦　砥代
孫の身になって小言を聞いている　出雲　小玉　満江
悪妻か女神か僕の愛ひとつ　米子　新　正子
デパート二つ回っても靴まだ買えず　河内長野　植村　喜代
どの彩も映えるわたしの白い皿　出雲　園山多賀子
カレー皿時に妥協を盛り分ける　広島　流　奈美子
父の日を忘れたままで暮れてゆく　和歌山　前田　美子
スパイスを揃えてみたくなる若葉　吹田　栗谷　春子
あじさいの紫紺が冴えて梅雨の入り　寝屋川　宮尾あいき
礼肥にそむかぬ花が美しい　鳥取　さえきやえ
似た服を着ている年が気にかかる　吹田　井上　照子
辞表書く筆きっぱりと潔く　米子　政岡日枝子
フルムーンやっぱり赤い服を着る　大阪　山田　妙子
無視したい人の言葉が胃に溜る　宝塚　吉田　笑女
嫁がれて淋しくなった口喧嘩　寝屋川　平松かすみ
過ぎし日を曳いて女の遍路杖　寝屋川　岸野あやめ
それからと膝を乗り出す聞き上手　新発田　上鈴木春枝
古くとも亡母を支えた数珠を持ち　松原　北野　久子

花時計二人の出会い見て動く　熊本　永田　俊子
エッセイの魅力本音をどくつかせ　大阪　天正　千梢
手話交わす若い二人へ虹が立つ　大阪　上江洌勝子
薄墨に暮れて目に立つ花あやめ　姫路　釣　遊光
形見分け色紙に母の命あり　和泉　中川　楓
生真面目で律義な鏡嫌われる　唐津　浜本　ちよ
いいことがありそう靴を光らせる　富田林　片岡智恵子
嫁がれて家に無風の日がつづき　大阪　渡部さと美
プランクトン流してくれる雨を待つ　藤井寺　楠　昭子
散る術をもたない花にある嘆き　島根　金森知恵子

ゴシックの一句目、死というものは、そのことに直面するまで、遠いものと誰もが信じがちである。だから軽軽しく死を口にするのであろうが「嘘を言う」と批判的な作者の眼は鋭い。二句目、あまりにも小さな花に、そのいとしさを量み句のかたちで表現され、「命」でしっかりと纏められた。女性でなくては生れない句ではなかろうか。三句目、まだ若いのにご主人を亡くされた作者、夕暮れともなれば、人知れず吐息することもあろうが、強く生きておられる。切実な思いであろう。

◇

ハガキに**雑詠3句**。毎月10日締切

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10

小出智子

麻生路郎二十三回忌
麻生葭乃七回忌
中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

7月5日・高野山普賢院

《法要》

高野山の夜をこめ、音を立てて降った雨の朝が明けた。定刻六時三十分、本堂で勤行がはじまる。普賢院の森院家（森寛紹高野山四百六世座主のお孫さん）の読経は諸僧の唱和で壮厳ひときわである。

柳粋院釈路郎、釈尼芳諦、瑞龍院蓬山憲雄居士、と三先生の戒名、ならびに川柳塔同人物故者の霊が認めてある大きな過去帳がしつらえられ、ケースに納められてある。施主の西尾栞主幹、黒川紫香副理事長、橘高薫風副主幹らが正面に正座して粛として襟を正す。焼香がはじまり、四国八十八ヶ所の霊場の土を足下に敷いた「お砂巡り」の上を歩く。霊場巡礼と同じありがたい霊験があるという。ご先祖の冥福を祈るのと同時に、午後からの追悼大会で沢山句が抜けますようにとお願いした人もあっただろう。

奥田白虎ご夫妻、梶川雄次郎、田中好啓、森中恵美子、天根夢草氏ら、他社からのご参列、心からお礼申します。（薫風記）

《追悼川柳大会》

さしもの大広間も、続々とつめかける参会者で身動きもとれないほど。会場正面の左右の壁面には、「古くとも僕には仁義礼智信路郎」などの遺墨と三先生の戒名・遺影、また、戸倉普天さんはじめ百十名の同人物故者の名が没年順に掲げられ、いかにも追悼川柳大会らしいふんい気の中で午後一時、西田柳宏子さんの司会で開会、黙禱を捧げる。

黒川紫香副理事長の開会の辞につづいて、西尾栞主幹が「夜来の雨もとどこおりなく晴れたが、路郎先生は晴男、生々庵先生は雨男で、天はどちらのお顔も立ててくれた。三先生の逸話は数限りなくあるが、これは『川柳塔』誌の記事に譲るとして、われわれのルーツにはこのような立派な先生方がおられることを誇りに思い、川柳の道に励んでいただきたい」とあいさつ、日本川柳協会・番傘川柳本社・川柳展望社などからの電報が披露された。次いで法要にも参列くださった金剛峯寺四百六世座主の森寛紹師のお話。八十九歳の高齢とはとても思えないお元気な姿を紫の衣につつんだ老師は、「白象（はくしょう）」という雅号を持つ知名の俳人でもあり、別項のように高野山の紹介から俳句精進の体験などを話され、「文学を通じて心を豊かにすることが長生きの秘訣につながる」と結ばれた。

小憩の後、いよいよ兼題の披講に入ったが「水草」の選者は山内静水さんが大会直前に病気入院のため、かわって遠来の八木千代さんが披講（脇取り河内天笑・宮園射月芳・河内月子）、「福寿草」（黒川紫香代読）、「金魚」「畳」「大空」「書斎」「二階」と各選者が亡き三先生の思い出話をまじえながらユーモアたっぷりに披講し、午後四時過ぎ、阿萬萬的さんの閉会の辞で追悼川柳大会を無事終了した。

なお、会場入口にはご遺族や塩満敏さんなど同人から提供された三先生関係の色紙・短冊・句集やアルバム、物故者の遺句集が展示された。

（正坊記）

金剛峯寺第四百六世座主

森　寛紹師のおはなし

私は五年間、真言宗の管長を勤めまして金剛峯寺の住職をしておりまして、一昨年の暮に任期の五年を終えて、自分のこの寺へ帰って参りました。もう齢も八十九、来年は九十の卒寿であります。

高野山は、今から四百五十年前にお大師さまが、おん年四十二歳の折にお開きになりました。そして六十二歳の折に奥の院にご入定になったのであります。ご入定といいますのは、お大師さまが我々の現身と少しも変らない現身を奥の院にお納め下さって、おいでになるというのがご入定という意味であります。

それは、お釈迦さまが入滅されてから弥勒菩薩がこの世にご出生下さるまでには、五十六億七千万歳という長い年月がありますが、お釈迦さまに遅れ、弥勒菩薩のご出生までの間の仏として一切の衆生をご済度下さるという意味でお大師さまは奥の院へご入定になっていられるわけであります。

お大師さまは高野山を鎮護国家を祈る道場また末法の弟子たちの修行の道場としてお開きになり、六十二歳までの二十年間に今日の高野山の基礎はできたのであると承知いたしております。

川柳は、私よく分りませんが、徳川の初期の宝暦の頃に発句と川柳の二つに分れて、今日まで長い歴史を歩んできたのであります。俳句は花鳥風月と申しますが、自然に触れてその中から生まれてくるのが俳句であるのに対し、川柳は人生の妙と申しますか、いろいろな人生の種々の相に触れて、それによって心が告発したものが川柳であると言われております。不思議な世の中の妙にふれて心の啓発した、そういうものが川柳の道であると、かように私、考えております。

私は、ホトトギスの俳句を六十年ほどやっていまして、六十年間、ひとつも投句を休みません。続けることによってはじめて川柳を通し、俳句を通して人は深められるのであるように考えますので、一回も投句を絶やしたことがありません。ちょっとえらいのですけど、えらいということが人生を深めることである、一つの修業である、道であると考えて六十年間、毎月投句を続けております。

家内はガンで死にましたが、死ぬ三日ほど前に私に「しんぼうしなさい、しんぼうしなさい」と言いました。私は死ぬるんやが、後へ残ったら私がおるように大きな声で怒ったり気儘なことを言うたらあんた本当に困りますぜ、孫や子供にも嫌われますぜと、そう言わずに、ただ「しんぼうしなさい」と言うたのだと思いますが、しんぼうするということはなかなか……。私は腹が立ってかなわん折には山に向って大きな声で……。そういう折に川柳とか、人生の種々相を皆さん方が静かに文学を通して見ることが、大きな心の転換になるのだと思います。

どうも話が長くなりましたが、これも八十九になった老人の愚痴だと思ってお許しをいただきたいと思います。

（整理―史好）

兼題「水草」　八木千代選

水草の少しルーズでおセンチで　美代子
水草よおまえも風はきつかろう　てまり
咲くときは咲く水草の主義主張　重人
水草の情け蛙の卵にも　雄次郎
胸張って水草なりに花開く　はつ絵
水草も散ってみたいとおもいだす　玲子
水草もいつか自分の彩をもつ　田鶴

水際に咲く水蓮の自己主張　笑女
水草ゆれる川のほとりにある生家　たつお
水草のあぶくは生きる主張かも　雀踊子
水草のはにかみだろう揺れやまず　鉱平
水草につかまっている蛍の火　螢
コウホネやひと夏だけを妻が病む　諷人
水面下覗き水草耐えがたし　雄々
水草の夏を語れば透きとおる　哲郎
流されながら水草明日を考える　みど里
水草の辺りにうまい餌がある　博泉
水草の性根を忘れない与作　幹斉
学名が付いて水草ひどく減る　みつ子
水草が昔の水を喋り出す　月子
さざ波をこばみ水草生きのびる　百合子
良い夢を見て水草がゆれている　完司
睡蓮のいち度に枯れて河童の死　瑞枝
魚を棲ませていつも豊かな水草に　紀乃
水草の水草リッチな息をする　緑良
水草のいのちがほしい水中花　正坊
水草もきっと先祖を探している　日枝子
旅人として水草と語り合う　天笑
水草よ都はるみは生きている　夢草
水草は水の霊から逃げられぬ　狂虎
水草は沼の深さを知っている　年代
水草の命たしかめたい葦よ　止水
水草はみな善人で丸い葉で　耕花
水草のいちどに茂る仲たがい　正子
絶叫を溜めた水草かも知れぬ　爽介
流されてもきっと根を張る水草だ　なみ

水草よお前の私語は流される　理恵
水あおい浮いて自分を確かめる　白虎
水草が身にまといつく昼の闇　智子
うき草よ浄土はきっときっとある　幸
ながれ藻のその歳月を飾らずに　谷代
尽未来際ああ水草に劣るまじ　好啓
人一人死ぬと水草一つふえ　笑子
冬枯れの葦直立の果てしなし　荒介
晒し首みたいに蓮の花が浮き　笛生
水草が揺れるふるさとがゆれる　俊平
水草のなんと見事な契りよう　楓楽
水草のように老後は流れたし　妻子
水草よ蛍でさえも子を宿す　森中恵美子
河骨がしぼむ来世のためなのか　奎子
この水に昔から咲くひつじぐさ　千代

兼題「福寿草」　高橋操子報

梅が待つ桜も待つぞ福寿草　紫光
福寿草新春の笑いを溜めている　かよ子
とても素直な気持ちにさせる福寿草　とみ子
女とはかくあるべしと福寿草　頂留子
どん底の生活に咲いた福寿草　みね
福寿草未だ人生が読み切れず　美房
足もとに春が来ている福寿草　一郎
窓叩く雨あたたかに福寿草　白洋
玄関に亡父が咲かせた福寿草　左久良
来年へ希望をつなぐ福寿草　郁子
福寿草育て余生を清く生き　愛論
脇役に徹してきれい福寿草　博泉

寄せ植の福寿草から幸を呼ぶ　哲治
福寿草つくす女の部屋で咲く　楓楽
福寿草古い女を通しきる　智子
名に恥じぬくらしを誓う福寿草　寿馬
福寿草の名句だけ知る曽孫弟子　白水
元旦を心得顔の福寿草　あいき
福寿草苦境に夢をくれた花　三千子
福寿草の強さがほしい一人っ子　匠果
つつましくしっかり生きる福寿草　重人
福寿草めでたる人の七回忌　智水庵
正月はもてはやされる福寿草　杏村
耐えてきた過去には触れぬ福寿草　良子
福寿草去年の罪はとがめない　千梢
ほのぼのと春を寿ぐ福寿草　狸村
精一杯咲いてひっそり福寿草　吸江
福寿草師のひと筆に活きてくる　民代
春の喜劇をながめています福寿草　幹斉
福寿草いのち大事に暑に耐える　螢
福寿草にポックリ寺で叱られる　耕花
福寿草むかし話がとても好き　雄々
福寿草春の息吹きを抱きしめて　反省
日本の礼節を知る福寿草　文秋
福寿草やさしい人にめぐり逢う　紀乃
仲のよい夫婦へひらく福寿草　天笑
幸せを画布いっぱいに福寿草　寿美
福寿草咲くたび亡父を恋しがる　美智子
掛軸の鶴にまみえる福寿草　みつ子
ひっそり咲いてなさけを残す福寿草　たつお
厄年の床に飾った福寿草　武助

あばら家をいとわず咲いた福寿草　武助
老夫婦寄り添うように福寿草　正坊
福寿草お目出た近い家へ売れ　白渓子
父帰る日が待ち遠し福寿草　颯云児
嫁ぐ日を真近に開く福寿草　勝晴
嫁姑つなぐ手に咲く福寿草　白峰
葭乃師の笑顔まぶたに福寿草　維久子
福寿草母はゆたかな膝をもつ　森中恵美子
巨師偲ぶ影をとどめる福寿草　高夫
福寿草しずかに咲いた床の鉢　操子

兼題「金魚」　野村　太茂津　選

金魚の糞みたいと妻に叱られる　あいき
猫の目の殺意へ金魚動かない　みよ子
いつからか金魚の糞の列にいる　百合子
弱いほうの金魚すくって帰ったか　夢草
氷点の金魚が抱いている憎悪　紫光
金魚一匹友達にして自閉症　寿子
金魚屋がくれたおまけが生き残る　美房
一匹の金魚お前も耐えている　智子
よく見ればやっぱりボスがいる金魚　三男
出目金の身の上話聞かずおく　武庫坊
金魚の死悔いの数から抜けだせぬ　紀乃
仲直りしたいきっかけ金魚買う　トミ子
餌になる金魚ぴちぴち生きている　狸村
琉金ひらひら夫の愛うばう　いわえ
掬う手をするりと金魚になぶられる　与呂志
弁解の嘘を金魚にぬすまれる　菊野
時差ボケは知らず金魚の旅疲れ　小路
真夜中に経読む金魚の声がする　恭子
泡出し金魚は何を訴える　金太
金魚売りの声は落語の芸に生き　武雄
打算かな金魚ひらひら媚を売る　悠貴女
闘病記金魚の命いとおしむ　雀踊子
孫の涙に金魚成仏するだろう　柳宏子
金魚の死不倫を止めることにする　信太郎
金魚とて言いたい事があるだろに　和子
金魚さえ息が詰まれば跳ねてみる　道子
言い勝って帰れば金魚腹を見せ　晴美
酸欠の金魚につづく倦怠期　爽介
陰口をたたく金魚の丸い口　高夫
出目金よわたしの顔が見えますか　紫香
美しい方から死んでいく金魚　みど里
金魚ぷくぷく僕も年金暮しだよ　妻子
言い負けて温い金魚の目に出合う　淳一
金魚鉢置き場を変える孫の丈　白峰
二十五時金魚お前はいつ眠る　白洋
淋しくて黒い金魚を飼っている　幹斉
結論は金魚に委ねている別居　吐来
化物のような金魚を見る硝子　蟻郎
金魚とも猫とも話す日本語で　美代子
来なかったねと言う金魚鉢の金魚　維久子
金魚ふと紫色が着たくなり　白水
金魚の糞なるほどなあと見ていたり　静水
金魚が赤い尾を振ることも処生術　幸
金魚売りも雲も流れて行ったきり　狂虎
金魚も私も天の一部を見てくらす　千代
金魚飼う酒も女もおとろえて　ひでの
一匹が曲がれば曲がる金魚鉢　杜的
出目金に睨まれているひとりぼっち　螢
南無帰命金魚の糞がまだ切れぬ　好啓
金魚からみると人間いびつだな　俊平
原点に戻れと金魚嘘を吐く　太茂津

兼題「畳」　小松原　爽介　選

畳では死なしてくれぬ医療漬け　保
夫婦ではないと畳が知っている　岳人
坐りだこ畳に馴れた妥協癖　多賀子
ポックリで畳の上と決めている　与根一
勝気さを見せ女住む青畳　満女
生き恥を畳へ曝しなどしない　雄々
一畳の畳があれば果てられる　日枝子
これからの味と知ってる古畳　健司
畳替えやっとおんなに喪が明ける　たつお
石畳お吉のように人を恋う　いわゑ
ふるさとの畳の目なら信じたし　幸
足の裏だけで備後を懐しむ　寿馬
すり切れた畳が語る私小説　当代
スタイロ畳など人間も軽くなり　一二三
草むす屍せめて畳にねかせたい　鬼遊
どの目にも愛憎ためた古畳　笑俳
父一人畳の部屋に我を通す　みよ子
伯母と叔母畳の部屋へ来て話し　栞
父と母天寿まっとうした畳　年代
仏壇も老母も畳がよいと言う　昭子
一部屋の畳に老いを生かされる　晴美
十畳の部屋で名人位をうばう　いさむ

畳拭く一人の鬱を逃げ出せぬ　正子
亡父が寝てははが寝ていたこの畳　荒介
喪の家の青い畳がよく匂う　田鶴
古畳凡夫凡婦のコントかな　哲郎
子育てを終えた畳がいたわられ　天笑
一畳の広さにもらう安楽死　百合子
大正人間に畳のごはんつぶ　夢草
一枚の畳で足りる今日がある　紀乃
百畳の暗さに酔うたのが二人　俊平
畳のない家でニヒルに育ちゆく　楓楽
哀しみから逃げる畳を拭いている　狂虎
畳替え夫が少し落ちつかず　月子
石畳コツコツ明日をどう生きる　みつ子
帯を解く音を聞いてる青畳　千代美
平均的いのち畳へ横になる　森中恵美子
寡婦の瞳に畳は古いままがよい　とみ子
禁欲の畳に爪をたてている　螢
畳一枚男の思慮を深くする　好啓
誰よりもなだめ上手な古畳　千春
ポルノ雑誌がポンと置かれている畳　恭子
畳の目女不幸を考える　萬的
無防備なあくびができる古畳　匠果
畳拭くなおも消されぬものがある　良子
青畳おんなかしこくなりすぎる　かず枝
なにもかも許そうとする古畳　藤子
足を洗えば畳の上で死ねますか　巷雨
母になる畳おもての青きまま　諷人
刑ひとつ畳の上でなら受ける　寿子
ゴロ寝する畳に明日がある男　爽介

兼題「大空」　去来川　巨城　選

大空の下で凡人もめている　勝晴
大空に雲一つない怖しさ　てる
おしっこをする大空は限りなし　鬼遊
業抱いて女人高野の暮れ早し　千賀子
昔むかしの空が恋しい埴輪の目　悠貴女
大空の下でペテン師が悔いている　月子
ブーメランときめき告げに大空へ　寿美子
空襲警報のない大空に布団ほす　完司
デンデン虫さえも大空あこがれる　萬的
大空は毬のゆくえを知っている　千代
大空を仰いで逃げ道考えぬ　弥生
黙って笑って大空の下にいる　螢
雑兵のなお大空へ向く墓標　吐来
大空に双手突き出す昼休み　亜成
大空に二度と許さぬキノコ雲　柳宏子
師の声がもれる大空から漏れる　奇童
雑草の夢大空がある限り　止水
手に届く林檎をもいで青い空　智水庵
大空を疑ったりはしていない　妻子
杉木立あくまで天は深くなる　荒介
大空をひとにらみして飲むラムネ　白洋
大空へ今日のシナリオ考える　吸江
大空へ紙ヒコーキを折っている　蘭幸
大空に無情の人と書いてみる　谷代
山の寺少しは空に近いかな　千鶴子
大空とドラマ私の花枯れず　真佐子
空広し男は過去にこだわらぬ　みつ子

澄み切った大空がある里は過疎　岳詩
竹トンボ少年と組む空が澄み　松恵
大空にひたすら弥陀の掌を探す　晴美
円高が何さ大空澄みわたる　雄次郎
大空の顔でタコ焼き食べている　幹斉
大空があるから過疎を出たがらぬ　みよ子
大空に嫌われなれているカラス　夢草
君情熱だよと大空からの声　静水
大空が平常心になれと言う　泰子
大空はひとを等身大にする　楓楽
正直な乳房大きな空がある　森中恵美子
大空へ野仏一つ点一つ　一男
大空のでかいロマンを男たち　哲男
真青な大空嘘はやめとこう　武助
コンパクトにわたしの大空が写る　恭子
葬列も大空の下嫁の荷も　太茂津
大空も大地も米を切り下げる　巷雨
疑うことせぬ大空で敵わない　三千代
福智無辺ああ大空に初心あり　好啓
大空を敵にはしない葱坊主　幸
大空に「みどりのキリスト」なら描ける　かず枝
古里の空でほんとの背伸びする　ダン吉
何も彼も許すと空が広くなる　美代子
空の青山河澄めりと誰にかく　巨城

兼題「書斎」　磯野　いさむ　選

書斎からサラダ記念日風孕む　多賀子
鳴る風と歴史を守る倚松庵　白虎
魚拓貼る書斎がどうも生臭い　千秀

説計図書斎と書いた部屋がない　君子
全集もの並ぶ書斎で待たされる　登志実
散らかった書斎水割飲んだらし　蟻郎
書斎など持たぬ男の直木賞　甘平
買うたのは確か書斎にありました　凡九郎
モーツァルトのボリュームあげている書斎　千梢
書斎へはインターホン聞こえない　形水
美人画を書斎にかけて父若し　越山
ワープロを買って書斎が城となり　正坊
三回忌父の書斎はそのまんま　かよ子
嫁がせて書斎に籠る日が続き　洋敏
書斎の灯まだあかあかと旅支度　諷云児
ベストセラー書いた書斎てこれかいな　杜的
自分史を綴る書斎で缶ビール　勝晴
かたづかぬ書斎で鬼もくつろげる　田鶴
折れた矢が書斎の隅に積んである　白峰
不況風父を書斎にこもらせる　操子
書斎にもカセット群が陣を敷く　ヨシエ
恵まれた夫婦書斎を二つ持つ　千代美
おれの書斎に俺の自画像かけておく　たつみ
花のない壺を書斎に置いている　千代
会津八一の一首ひもとく日の書斎　たつお
金脈も人脈もなし書斎の灯　悠貴女
考える葦で書斎に埋もれる　康子
書斎にも電話がついた売れてきた　吸江
沙羅双樹咲けば書斎の筆静か　奎子
遺産分け父の書斎はそのままに　みよ子
山頭火に書斎はいらぬ旅ごろも　涼一
書斎から一歩も出ない思想など　紀乃
書斎から出るとたちまち妥協する　爽介
先生の書斎で十分間過ごす　恭子
漫画かく妻の書斎へ茶をはこぶ　あいき
いい匂い書斎は香をたくところ　夢草
母系家族父は書斎に籠りがち　てる
祖父の書斎は僕の探険心煽る　年代
冷却期おいて書斎へ呼びつける　緑良
書斎にも安らぎを置くルノワール　与根一
欲が出て書斎が欲しい引揚者　弘朗
逃げ場所としての書斎を持っている　天笑
いさかって書斎にこもる男の背　みつ子
気むずかしい父が胃薬飲む書斎　射月芳
十方浄土書斎はホームバーを兼ね　好啓
書斎の壁にかくしとびらがある無口　正子
監獄を書斎にすれば書けそうな　静子
母の忌や書斎を出ない父となる　三男
月の土地買えば書斎を持てるかも　健司
抽斗の中にピストルある書斎　栞
移動書斎ひかり車中で書くことも　いさむ

兼題「二階」　西尾栞選

望遠鏡対双眼鏡で両二階　紫光
遠花火二階の窓は開けてある　荒介
二階は二階いずれは口をきくだろう　史好
喧嘩して二階へ上る癖がある　紀久子
二階一間に幸せだった過去があり　登志子
ほっといてほしい二階へ妻をやり　小路
二階借り遠慮しいしい厚かまし　柳宏子
振り出しに戻り二階に妻といる　谷代
二階の子言葉少なくパンを焼く　奎子
二階まで聞こえなかったことにする　翠公
二階から降りる二人は別の顔　鉄治
二階まで翔んで少女を脱皮する　寿子
お二階の風鈴浄土の音がする　静歩
仏壇と二階におわす都市砂漠　匠果
二階にはアダムとイブが住んでいる　千代子
閉め切った二階の空気他人めき　頂留子
西陽さす二階で埋れている詩人　寿美
二階からときどき父が降りてくる　みつ子
二階からおりて来たのはキューピット　柳影
二階の子べんきょうしてると信じよう　完司
合掌づくり二階に歴史秘めてあり　千梢
門限よ二階よわれも老いたるか　爽介
二階からまさかと思う鬼やらい　独歩
京の二階で竜馬が少し油断する　涼一
母屋からみれば二階は我が儘だ　好啓
忍者屋敷こんな所にある二階　紅月
クリスチャンネームで二階降りてくる　鉱平
二階から招く女はもういない　甘平
文豪がしばらく住んでいた二階　たつお
二階から見れば夕焼届くかな　康子
二階の下妻の身内が住んでいる　昭子
二階にも便秘薬が置いてあり　岳人
表札の大きな方が二階借り　葉子
二階から降りて決心又鈍り　久子
出世作書いた二階は文化財　三男
露天風呂二階の眺めの中で脱ぐ　白渓子
二階から鶴田浩二は降りて来ぬ　森中恵美子

幸之助曰くその頃二階借り　雄次郎
ソプラノが得意になっている二階　哲郎
二階から降りる合図の咳一つ　白峰
赤坂の二階も敵の目が光る　幹斉
少し高い二階を建てている隣り　白洋
二階のピアノ機嫌なおしてくれたよう　藤子
ネオンサイン逆に読んでる二階借り　智水庵
二階から降りてマダムと客になる　巷雨
直系の新人類が住む二階　吐来
二階から知らん男が降りてくる　螢
二階にはとても真面目な夫婦者　妻子
二階から落ちて来たのは木の枕　鬼遊
二階から見える範囲で絵をかこう　かず枝
二階借りおりる時間を心得る　栞
（清記・泰子）

■出席者（順不同・敬称略）

西尾栞　塩満敏　横垣忠　里小路　藤村亜成
土橋螢　林荒介　林瑞枝　西山幸　高田博泉
三宅保　丸岩晏　楠昭子　北勝美　奥田満女
橘高薫風　大坂形水　山内静水　西尾美与子
黒川紫香　脇本政己　吉川寿美　野村太茂津
半井甘平　米田鉱平　小川恒明　森中恵美子
玉井豊太　桑原喜風　若宮武雄　去来川巨城
天根夢草　江口葉子　田中弘子　小松原爽介
新家完司　上田翠光　清水健司　松本はつ子
板尾岳人　芳地狸村　高橋操子　高田美代子
稲葉星斗　松原寿子　山川克子　柿花紀美女
平井照子　原さよ子　植山武助　船津とみ子
田中正坊　高橋幸代　守内恭子　田中千代子
川原章久　小西雄々　礒野律子　礒野いさむ
山本哲郎　寺尾俊平　金井文秋　平田たけよ
広瀬反省　渡辺独歩　高田律子　土居ひでの
小林妻子　土居耕花　千原理恵　中田たつお
福原悦子　松本元江　井上白峰　岡本ヨシエ
羽原静歩　樫谷寿馬　樫谷郁子　政岡日枝子
小島蘭幸　田中栄恵　小西千里　馬継千代子
森井一枝　岩本笑子　光井玲子　高田てまり
福浦勝晴　小西幹斉　高杉鬼遊　川島諷云児
西出楓楽　辻白渓子　松川杜的　藤井一二三
宮口笛生　田中隆積　牛尾緑良　神谷凡九郎
後藤正子　神平狂虎　藤井明朗　西田柳宏子
奥田白虎　谷口信子　北山越山　岡崎つる子
吉原紅月　保西岳詩　吉岡美房　坂部紀久子
小出智子　青戸田鶴　澤田千春　吉岡きみえ
野坂なみ　阿萬萬的　奥谷弘朗　園山多賀子
弘津柳慶　稲葉冬葉　池田淑子　池田寿美子
中原諷人　小熊江美　秋元てる　脇本千鶴子
林はつ絵　吉田笑女　春城年代　春城武庫坊
上田佳秋　赤川菊野　森田熊生　松下たつみ
柳楽鶴丸　恒松叮紅　西森花村　前川千賀子
玉置重人　田中好啓　松本涼一　寺沢みど里
井上良子　鵜飼蟻朗　卜部晴美　菅井とも子
小山紀乃　北野久子　山崎君子　岩佐ダン吉
和田恭子　坂口公子　宮西弥生　奥田みつ子
園田文子　天正千梢　八木千代　西口いわゑ
堀端三男　波部白洋　飯田悦郎　垂井千寿子
浅野房子　坪田紅葉　上田柳影　高須賀金太

第11回　茗人忌川柳大会

とき　**昭和62年8月23日**（日）午前10時
ところ　鳥取工業福祉会館「鴻南閣」
鳥取駅南口徒歩5分
電話　二三―三一八一
お話　野村太茂津氏
兼題　「扇」　黒川　紫香選
「肩」　西田柳宏子選
「写す」　阿萬　萬的選
「割る」　恒松　叮紅選
「確約」　小林由多香選
席題　当日2題　各題2句
会費　三、五〇〇円（作品集・懇親会・昼食含む）
投句料　八〇〇円（作品集呈）
当日欠席投句のみの方は8月10日必着、うみなり川柳会宛（小為替希望）

主催　うみなり川柳会
〒680　鳥取市相生町三丁目二〇四
森田熊生方
電話　二三―四六七二

寺井東雲　氏林洋敏　二宮山久　舟木与根一
菱木淳一　河内月子　五嶋夢月　久家代仕男
河内天笑　渡辺杏村　金子匠果　宮園射月芳
佐野白水　久場三世　中井文子　山下みつる
吉田道子　山田高夫　青枝鉄治　山本規不風
谷垣史好　木山笑俳　山本翠公　岩本雀踊子
佐藤藤子　田中輝子　桜井千秀　奥田かよ子
三宅一郎　藤田泰子　田形美緒　梶川雄次郎
田中みね　玉置当代　光田松恵　鈴木三千代
越岡谷代　榎本吐来　木本文子　和田維久子
今井奎子　片山巷雨　笠原吸江　奥山美智子
森下愛論　岡田敏子　大家康子　宮尾あいき
越尾一男　有本祝郎　坂田初代　藤田頂留子
浜野奇童　山田止水　柴田英壬子
小谷美佐子　上田登志実　高橋千万子
桑原みよ子　樋口シマ子　中尾美南子
片野田和子　西村左久良　菅井智水庵
小林トメ子　松井かなめ　中西千鶴子
児島与呂志　山口三千子　松山真佐子
杉山登志子　寺尾百合子　成宗ひさ子
平尾富美子　貞岡信太郎　清水悠貴女
長谷川紫光　浜野矢須子
かなもりかず枝　勢理客トミ子

■ご芳志御礼（敬称略）

時の川柳社・ふあうすと川柳社・米子川柳塔きゃらぼく・川柳わかやま・川柳大阪・大原川柳社・竹原川柳会・むらくも川柳会・京都塔の会・うみなり川柳会・鹿野みか月川柳会川柳駒つなぎ・弓削川柳社・いずも川柳会・川柳塔まつえ・川柳サークル卯の花・西宮北口川柳会・城北川柳会・南海電鉄川柳部・広島川柳会会長石原伯峯・三幸川柳教室菅井智水庵・高鷲亜鈍・礒野いさむ・小松原爽介・広瀬反省・時実新子・天根夢草・寺尾俊平・森中恵美子・中島小石・川村好郎・高橋操子浜野奇童・奥谷弘朗・月原宵明・三井酔夢・笠原吸江・黒川紫香・小川恒明・森田布堂・吉田笑女・神夏磯道子・本間満津子・匿名・朝山千世子・安藤寿美子・河井庸佑・竹内花代子・佐野白水・松本淳一・古川美津枝・小林トメ子

■電報拝受

日本川柳協会・番傘川柳本社・川柳展望社・川柳塔唐津支部・小林由多香・月原宵明・両川洋々・赤木和子

東奥日報社県下川柳大会

日　時　九月六日(日)　午前十時
場　所　東奥日報社四階
特別選者　西　尾　栞
※課題「　船　」
※〆切日　八月六日着
※送り先　〒030　青森市新町二丁目二
東奥日報社事業部川柳大会係
宿　題　「暁方の雨」　西谷みさお選
「　沼　」　宮本　紗光選
「無条件」　中林　瞭象選
「社交辞礼」　村井　吉重選
「　力　」　工藤　甲吉選
「　餌　」　西山　金悦選
「削　る」　長沢　天僧選
席　題　三題　各題2句

主催　東奥日報社

青森・十和田湖への旅

昭和62年9月5日(土)～9月7日(月)

〔行程〕
5日(土)　午後の便で大阪空港出発
青森空港からタクシーで三沢へ古牧温泉泊
6日(日)　東奥日報社県下川柳大会出席・あと八甲田―奥入瀬―十和田湖泊
7日(月)　9時半ホテル出発、子ノロ―奥入瀬―焼山(昼食)―八甲田山―青森空港(15時半発)―大阪へ
〔費用〕　十万円
☆ご希望の方は8月7日本社句会までに申込んで下さい。（窓口―板尾岳人）

川柳塔社

嗚呼 入澤寿恵さん

園山よし子

五月廿九日の早暁あなたの悲しい訃報に接し、茫然自失、納得のいかぬ涙が溢れ、只只言葉もございませんでした。

あなたは廿六日陶芸教室のリクレーションに参加され途中急に気分が悪いからと一人、松江市からタクシーで出雲へ帰宅され、すぐ県立中央病院へ入院、急性膵炎と診断されて入院丸二日半、手厚い看護の甲斐なく空しく他界されました。まるで流れ星のように一瞬の間にこの世から消えて逝ったあなた。医学博士の御長男様も間に合わず、あまりの急死さぞかし御無念だったことでございましょう。現代の医学で何とか手を打つ術はなかったのでしょうか。あなたが亡くなられた日も同じように花が咲き、鳥が鳴き、月遅れの鯉のぼりが空に舞うさまが、私には不思議に思え、残念で悲しくて、淋しくて、何をしても身が入らず、じっとしていても心締めつけられる思いばかりで運命を呪い、見えない何者かに抗議したく涙にくれました。しかしそれもこれも今は帰らぬ愚痴でございます。昨日お逢い致した御主人様が「私が先に逝くものとばかり思っていましたから何もかもあれがいなくては」と声を詰まらせてお話になるお姿が何ともおいたわしく思われ、又涙してしまいました。

あなたとは昭和五十五年秋以来川柳教室を共にし、励ましあって学んで参りました。見識が広く豊かな感受性に恵まれ、物を見る眼の深さ、その表現力も抜群で常に佳句を発表なさいました。それでいて、根っからの無邪気さは人を疑うことを知らず、常に笑顔を振り撒き、毎月の句会をどんなにか楽しくリードして下さいました。「句会に出席することが上達の早道」と尼先生のお言葉通り教室きっての優等生でもございました。

ついこの間お茶会にご一緒した折も「これ新品のカメラよ、うまく撮れていなかったらカメラのせいよ」と柳人らしいひと言に皆笑いました。その写真が立派に出来上りお届けいただいたのがあなたとの今生のお別れとなりましょうとは—。

あなたの御趣味は多く、川柳の他に陶芸、お茶、お花(池坊)と、一芸に秀ずるもの万芸に秀ずるの例え通り何をなさってもその器用さは衆目を浴びる方でございました。だからこそあなたが花の多いこの季節に永遠の旅にお出になったのがせめてもの残された者にとっての慰めでもございます。

書きたいことは胸一杯ございますが、今はただ遺句を挙げ御冥福をお祈りするばかりでございます。どうか天上にありましても何時迄も私共をお導き下さいませ。そして安らかに眠り給うことをお祈り申し上げます。合掌

堅いだけが取り柄の夫のいる安堵

倖せの証し夫の高いびき

単身の夫に済まぬ鍋囲み

ひと筋の道踏みしめた老父の靴

生きているよろこび夫のいい笑顔

最近の句の中から選びました。特に御主人に感謝されてる句の多いことに吃驚致しました。昭和62年5月29日午前1時55分永眠

享年六十一歳

戒名　浄智院殿敬信恵照寿栄清大姉

川柳わかやま

——1987 盛夏——

橋本・紀水川柳会　岩倉天彦

由良・川柳ゆら　寺田裕美

二百号達成記念大会へ

絶大なご支援とご協力を賜り
ありがとうございました

句集・「あおい海」第二集
・「川柳はまゆう」

よろしくお願い申し上げます

野村太茂津

初歩教室

題 ― 海底

阿萬萬的

今月の課題「海底」に対して私達は何故か過去の戦争の事に思いを馳せるのでしょう、悲しい事ですが…、齢のせいでしょうか。

海底の藻屑と化した父思う　喜代子
海底の遺骨の対話聞こえそう　昭治
戦鑑が無念無念と骸抱く　洋子
海底に鎮む無念が藻に絡み　千鶴
水漬く屍海底余りに静か過ぎ　志重
つわものの夢海底でまだ眠る　保夫
海底に眠った過去の傷のあと　三千子
海底の霊の嗚咽を波に聞く　高夫
海底に戦争遠く眠ってる　太郎
（海底に戦禍今尚眠ってい）
海底から戦の記録汲み上げる　八重子
海底の歴史サルベージ引き揚げる　繁男
（サルベージ過去の傷跡引き揚げる）　露芳
金塊が目当て張り切るサルベージ　さふみ
海底に眠る秘宝にあるロマン　新造
海底にロマン平家の秘宝あり　さふみ
海底で悲歌奏でる平家蟹
（海底のエレジー平家蟹の甲）　太郎
海底に眠る歴史の幾山河　知恵子
海底とお話出来るのは海女さんの特権で　方子
海底の掟を海女は知っている
海底の会話覚えた海女ぐらし
昔志摩の御座で私の作った句に〝波に沈むお地蔵海女の手で護り〟がありましたが…。
海底の幸呼ぶ海女の笛ひびく　喜代志
海女さんでも深く潜られ船戸はしっかりとご主人が命綱の端を握っておられて
海底へ潜り絆の綱を引く　高夫
海底に届いた夫の命綱　たかし
ともあれ海底には神秘とロマンが満ちて
海底の神秘をカメラがかもし出す　美子
海底の珊瑚礁鮮やか別世界　明吉
竜宮をかいま見るよう遊覧船　みね
（グラスボート海のロマンをかいま見る）
テレビから鳴戸の渦の底を見る　三千子
（海底の神秘にいどむ科学の眼）
あれは夢海底を行く車椅子　つえ子
潜水夫の海底散歩を追うカメラ　春枝
愛船で素潜りに出る息子のレジャー　遊峰
海底の珍魚と遊ぶダイビング　三津江
海底の魚もなれてダイバーたち　美恵子
（好奇心か魚がダイバーと遊びに来）
海底の暮しにもある四季の色　しず子
海底に光一筋散る魚　清
海底の平和も遠くなりにけり　太一郎
私なら下五を〝なりそうで〟としたいが…ともあれ人間共は海底の平和を荒す張本人かもね。
底引きは海の底まで掻っさらい　新造
海底の夢は力でつぶされる　小鹿
（人間のエゴ海底の夢つぶす）
諸諸の罪を沈めた海の底　章久
生きて行く罪海底に捨てたがり　照子
人間の欲に海底邪魔をされ　千鶴
（人間に海底平和の邪魔をされ）
海底を覗けば人の世のヘドロ　治
海底に生きて魚にもある奇形　みね
（海底も汚染奇形の魚がいた）
海底の掟に背くのも男　はるお
あげくの果がゴミと土とで東京や大阪の湾内を埋ずめて
土地暴騰海底に住む夏の夢　金吾
狭い土地次は海底へ都市計画　繁男
（都市計画海の底まで手をのばし）
山削り海底を埋め街が出来　八重子
それにも増してこんなのは赦せませんね。
海底の核実験は赦せない　サワ子
（海底の平和もつぶす核実験）
深い海底にはジャガイモに似たマンガン塊が転がっていて未来の重金属資源として今世界の注目を浴びているとか。
マンガンへ海底ロボット足がかり　勝美
「しんかい」が海底動物驚かす　白峰

金ダイヤ無尽か行けず海の底　周三
各国が海底資源に鎬削る　正之
（新しい海底資源へ世界の眼）
そして海底にはオニヒトデのようなギャングも居て
海底のヒトデが持ってるふくみ針　ただし
珊瑚礁今海底の墓場なり　ツヤ子
海底のヒトデギャングに泣くアサリ　サワ子
海底の恐いのはそればかりでなく　清
海底の動き見守る地震計　正之
（海溝の歪み変化に目を見張る）
（海溝の歪み気になる地震計）
海底のマグマの叫び油断せず　寿美子
大島の海底魚も避難する　かつみ
（海底地震魚も矢っ張り避難する）
そして
悠久の流れ秘めてる海の底　遊光
地球にも神秘海底残りおり　みね
（謎と神秘がまだ生きている海の底）
深海は秘境のままにとこしえに　しんじ
そして海底電線が、また海底トンネルが…
海底のケーブル通しラブコール　鉄治
ハローハロー海底無線に娘は近く　晏
（海底ケーブル海の向うの娘と話す）
海底のトンネル汚す排気ガス　春枝
青函を歩く世紀の大行進　明吉
海底の暮しもいろいろとありまして　てる
運命とか鰈ひねもす海の底　露芳
海底の魚も夜はやはり寝る　ただし
四面楚歌海草を縫う熱帯魚
四面楚歌はいただけませんね。私なら
（平和そのもの海草を縫う熱帯魚）とね。
海底でひらめ上手にかくれんぼ　遊光
信号機無くとも海底無事故です　三津江
（信号機無くとも無事故の回遊魚）
海底に住む蛸のくらしにも　美恵子
幾変化海底の蛸身を護り　つえ子
海底も住めば都と蛸の壺　喜与志
海底に蛸安眠の壺おろす
だがその壺には恐い恐い綱がついていて
海底に潜むと壺が降りて来る　たかし
海底の蛸の空家を床の間に　遊峰
人間の知恵は、こんな心遣いもあります。
海底の宝庫絶やせぬ気のくばり　しず子
廃船で魚礁を造る海の底　白峰
海底に牧場学者の夢広げ　保夫
（海底に牧場学者の夢無限）
養殖魚海底の美をまだ知らず　照子
海底はメルヘンを育てるものらしく、まして真珠の玉は美しく色付けをしてくれます。
笹舟は海底の恐さ知らぬだろ　志重
海底に残した真珠輝いている　小鹿
海底でただ待っている真珠貝　博子
海底の真珠は人魚の涙かも　知恵子
（海底に真珠ポツリと物思い）
海底は安住の地と桜貝　章久
海の底月夜に蟹は衣替え　正子
だが海底の貝にも言い分はあるらしく
海底の貝も叫んでいる平和　治
海底の貝になりたい時もある　野草
海底の貝が不信で閉じたまま　一郎
（海底から貝の一言泡となり）
では最後はもろもろの海底で締めくくることにしよう。
あの夢も又捨てました海の底　円女
海底で黙座したまま死ぬも良い　啓子
海底でつづく地球で何故揉める　正子
ヒマラヤが海底だった貝化石　勝美
ビル谷間海底めいて動くもの　てる
海底で式を挙げてる世の移り　鉄治
海底のロマンへ漁師継ぐと言う　高夫

それにしても類想の句が多かったようですが、作句のとき何か意外性のあるものを連想して、それらを一つの絵又は詩としてまとめ上げ十七文字にすればもっと生き生きとした句が出来たのではないでしょうか。ではまた来月を期待しています。

◇

題「香り」　**8月10日締切**（10月号発表）
ハガキに5句以内
「雑草」　9月10日締切（11月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬　萬的

盆

小野克枝選

ぼん盆と仏の先を孫等来る　實
車椅子盆で外出許可貰う　繁男
蟬時雨背に聞き盆の墓洗う　多賀子
盆が来るから墓掃除庭掃除　伊津志
左前の浴衣も混じる盆踊り　正坊
灯を消して座敷に招く盆の月　代仕男
盆だけは提灯ともす一男坊　康子
御先祖を迎える盆は髭も剃り　木魚
盆踊り誰かと誰かが輪を抜けた　高子
JR日の丸消えた盆列車　雅風
寄付金を集める盆を持ってくる　狸村
新調の法衣が勇む盆の入り　軒太郎
満洲に埋めた子供の帰る盆　弘朗
覆水の還らぬ盆にある未練　規不風
正月も盆も顎紐しめる職　重人
盆に死者甦えり　七面山
盆の客去んで閑居を風抜ける　本蔭棒
若者が去って盆地が過疎になる　倫子
盆供養すませて亡母も遠くなり　公一
盆の灯が少しうるんで亡夫の影　玉恵
盆踊り無形文化の列にいる　雄々
盆重ね僕より亡母が若くなる　優

黄泉からの舟を迎える灯を入れる　正敏
特攻の友よ螢が盆に飛ぶ　螢
盆だけは帰ってこいよ母の声　史子
ふるさとは盆地情に角がない　裕
悲しみの深さよ白い盆灯籠　新造
寝たきりの母へお布施を聞くお盆　悠泉
新仏盆には帰る赤とんぼ　理恵
盆おどり済んで母子の足袋を干す　明水
盆灯籠回し冥土を空にする　高夫
盆にのせてきたのはみな商魂　和友
ふるさとへ帰れぬ窓の盆の月　可住
初盆と風のたよりに聞きました　あやめ
原爆忌風化させない蛇苺　ただし
東京の空がきれいな盆の月　宵明
盆だけを飾る仏間になっている　たつみ
佳
盆休み墓へ詣った事がない　白渓子
孟蘭盆の墓石を洗う子がいない　義美
この次は俺の番かと笑う盆　常吉
初盆に母はどこまで天の川　たず子
迎え火も送り火も憂し盆供養　枯梢
人
ふるさとの盆をゆっくり昼寝する　雀踊子
地
盆に咲く花で仏に愛される　千秀
天
孟蘭盆会お墓の父も暑かろう　素身郎
軸
新盆の亡母へ石積む娘がひとり

闇

林荒介選

闇に生く男の目　七面山
先達を信じて闇の路進むろ　亭
闇の中から聞こえる声は大切に　重人
神代から女が拗ねて作る闇　正敏
闇の夜を精いっぱいにホタル舞う　理恵
迷想は断てと禅杖闇を裂く　朴竜
路地裏の闇に煙草の火がともり　宵明
盃も太刀も届かぬ女闇　四郎
暗闇の視野に耐えてる羅漢群　白渓子
闇市のお好み焼はうまかった　素身郎
創業は闇屋でしたと二代目　どんたく
銀行と手が切れ闇が深くなる　明水
離婚印闇の深さをまだ知らぬ　三枝子
都市に闇あってたのしいネオン達　實
番犬は闇のいきさつみてました　晃世
ひたすらに闇を生き抜く指強し　遊峰
暗闇に慣れて心が読めて来る　博子
夏の闇冷えておいしい米となる　三和
手探りの闇でもあなたの掌は温い　多賀子
ひょっとこが闇夜の唄をききもらす　玉恵
闇の中内緒話がよく聞こえ　道子
想像の楽しさがある闇の中　満津子

白昼の高速道路にあった闇　本蔭棒
暗闇で頼りになれる人になる　正子
一本のマッチで闇が崩れ去り　あき
鐘乳洞の闇に生まれて目なし魚　たず子
両方の瞼閉じれば無の世界　螢

いい闇があると海まで歩いてる　和友
心象の闇にうごめくものがたり　高子
闇空にくっきり亡母の顔がある　枯梢
も一人の私が闇を待っている　可住
篝火を消せば寂しい鵜飼い舟　伊津志
闇ばかり覗いて育つ深海魚　清芳
闇の目が光り善人ばかり狙う　代仕男
灯を消せば深くなってく傷がある　大柏
暗闇の中で私と対話する　正坊
真っ暗闇で鬼にアカンベーしてみせる　奈美子

闇抜けた男のヒゲが伸びている　たつみ
人間が怖くて闇を迂回する　雄々
宵闇がせまれば月見草が泣く　しげお
森の闇森のこびとに委せよう　規不風
暗闇のうちから小舟漕ぎ出そう　ただし

人

走ってるうちに明るくなった闇　三五島

地

暗闇でふり仮名つけてくれました　はるお

天

一本のマッチに闇の幅がある　雀踊子

軸

蠟燭を点しつづけて昼の闇　治

庭の四季亡父は俳句が趣味だった　大柏
庭石の一つ一会の貌がある　鉄治
丹精のカボチャ隣の庭で熟れ　軒太楼
転勤の残す庭樹へ水をやり　遊峰
庭鋏さえて朝間に黄楊揃え　素身郎
やはり噂どおりであった庭も荒れ　佳雲
我が家がいいよと庭の風を入れ　高明
箒目の庭で小坊主里を恋い　多賀子
垣根越し庭から渡すお裾分け　章久
坪庭の花を相手に独り言　晏
庭下駄は亡父の履きぐせついたまま　代仕男
山寺の庭いっぱいに蟬が降る　白渓子
借景が見事で抹茶の美味い庭　本蔭棒
結構な身分隣は庭いじり　雀踊子
禅寺の無の中にある庭の石

佳

ささやかな庭にもめぐる雪月花　たず子
庭ぼうき持つと余生の貌となる　正敏
いささかの心のゆとり庭いじり　有一郎
聞く耳になにかささやく庭の石　本蔭棒
突っ掛けが庭から上る囲碁敵　奈美子

人

石一つおいて庭にも格ができ　静子

地

庭が欲しい庭が欲しいと詐欺に遇い　あやめ

天

一言を呑んで夜風の庭に佇つ　テル

軸

いざ持つと庭もなかなか荷厄介

庭

山根　いつを　選

庭先の松も仲人褒めて去に　妻子
ガレージに横取された庭三坪　兼治郎
宿坊の庭に高野の玉箒　勝美
打ち水した庭風鈴に風がある　雀踊子
和やかな心を庭の木にもらう　三五島
猫の額ほどの庭にも花は咲き　やすお
庭を離れて小野の小町の化粧井戸　規不風
日本の狭さを言うて庭がない　成人
庭付きの夢を学資にもってかれ　珠笑

庭眺め讃岐うどんに舌鼓　豊
管理費も考え豪華な庭を見る　雄々
土の庭いつかは欲しい子の育ち　通彦
丸窓に枯山水の庭が見え　太郎
竜安寺淋しがり屋が石に問う　一郎
庭付きはよいが車が二台要り　あやめ
土地売った噂を聞いた庭の鯉　重人
麦藁帽にわか庭師の日曜日　白峰
競売の庭でさつきの真っ盛り　宵月
校庭の号令のせて風わたる　正坊
校庭の隅で泣いてたお下げ髪　新造
一坪の庭から四季が笑いかけ　寿恵子
借景の大山があるうちの庭　正子

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★澤車楽傘寿　大山番傘
15周年記念川柳大会
日時　10月10日(祝)　10時
会場　皆生温泉会館
宿題　各題2句　締切正午
「生きる」　長谷川博子選
「小面」　八木　千代選
「球」　金築　雨学選
「スリル」　杉山　方夫選
「白」　森中恵美子選
「善人」　亀山　恭太選
「足跡」　奥田　白虎選
「伸びる」　磯野いさむ選
特別課題「極楽」澤車楽選
事前投句9月10日締切
（投句料千円）
会費　千五百円
懇親会　二千円
投句先〒683米子市米原
1306―1
住田三鈷方大会係
主催　大山番傘川柳会
★川柳展望50号大会
日時　8月2日(日)10時半
場所　セントラルホテルフ
クオカ（福岡市中央
区渡辺通4―1―2）
会費　二千五百円
話の饗宴60分＝田口麦彦・
住田三鈷・助川助六
題　道（奥豊价）帯（中谷
道子）力（佐藤岳俊）
鈴（八木千代）
雑詠　海地大破・天根夢草
（事前投句）・橘高薫
風・中尾藻介・時実
新子
各2句　12時締切　雑詠
は各選者に同一句を出さ
ないこと
◇新子なんでも答えます
主催　川柳展望社
★船木夢考25年忌
誌上川柳大会
題・船　山田　良行選
木　神谷三八郎選
夢　西村佐久良選
考　古下　俊作選
投句・各題2句・用紙自由
（無記名清記）
締切・8月20日
発表・「ばんば」9月号誌上
投句料一千円（発表誌呈）
ばんば会員は五百円
呈賞・各題秀句及び合計点
6位まで呈賞
投句先　福井市左内町7―
24番傘ばんば川柳社
★島根県川柳協会新役員
理事長　柴田　午朗
副理事長　尼　緑之助
理　事　中川幸一・原独仙
久家代仕男・堀江芳子・
吉岡きみ子・藤田軒太楼
西村早苗（関係分のみ）
県公募川柳審査員
柴田午朗・久家代仕男
山根梟人

▽**句集発刊**△

■小松原爽介句集「草根」昭和34年から61年までの作品四三〇句と「時の川柳」の著者の巻頭言などを収録
頒価三千円（送料著者負担）
〒662西宮市市庭町一―二八
小松原爽介

振替No.神戸四―四一四四番

■昭和61年版「島根県川柳作家年鑑」A6判、131頁。その一年間の行事を写真と記録にまとめ213名の作品掲載。
頒価　二千円
発行所〒690松江市南田町49
島根県川柳協会

▽**同人消息・お便り**△

■東野大八氏（美濃加茂市）高野山行きNo.1で申し込みながら、体調不調で行けなくなり寂しい限りです。

■川村好郎氏（堺市）「川柳大阪」の与呂志氏の「私の川柳大阪回顧」をたのしく昔を想いつつ拝読しています。私も御無沙汰ばかりでお赦し下さい。何と

か一日を大切に気らくに暮しております。

■宮口笛生氏（奈良市同人）は、九月から奈良新聞の川柳（雑詠）欄の選者を担当

■はびきの市民川柳会は、五月二十四日、百回目の句会を西行法師ゆかりの弘川寺で行ない、参加者三十七名。

■大阪造幣局「桜の通り抜け」（4月16日～22日）で昭和24年から続いている文芸（俳句・川柳）行事の投句数は、俳句一、三八九句、川柳八八九句に達し、川柳入選句三十三句の「天」を、誌友高田美代子さんの「好きやねんこの大阪と通り抜け」の句が獲得。

■八木千代氏（米子市）高野山もひさしぶりで、路郎先生にはお目にかかったこともありませんがご本やお話の中から孫弟子として心からのお供養をせねばなりません。数珠を忘れずに。

■藤原無想氏（愛媛県）愚生も暦では古希となりましたが、あの対談記事や新子さんの句を再び目にして何か元気が出て来たような気持ちになり即吟を記します。新子月の子五十の青春を嫁になる

■石手武氏（愛媛県）砥部町より二粁程の久谷地区で蛍が沢山飛んでいます農薬を使わなくなった地元の努力の結果です。霧ふけば命の光るほたる籠私の大好きな東子市の小山悠泉さんの句です。

■千原静子氏（岡山県）耕花句集「やっこ凧」発刊記念大会には是非大勢お越し下さいまして耕花さんの男の花道を祝してあげて下さい。

▽**訂正**△

7月号81P下段終りから2行目「幽玄の世界に揺れる弱法師」と訂正。

新同人紹介

矢内寿恵子
―紫香・耕花・妻子・玉恵推薦

新谷忠昭
―栞・薫風・鬼遊・智水庵推薦

三宅一郎
―栞・薫風・鬼遊・智水庵推薦

三宅保
―栞・薫風・紫香・鬼遊・智水庵推薦

青枝鉄治
―栞・薫風・紫香・鬼遊・智水庵推薦

山田高夫
―栞・薫風・鬼遊・智水庵推薦

木本文子
―栞・薫風・鬼遊・智子・智水庵推薦

桜井千秀
―栞・薫風・紫香・智子・智水庵推薦

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

暑中お見舞い

申し上げます

1987年 盛夏

会長　山内静水

副会長　小島蘭幸

副会長　時広一路

会計　森井菁居

三宅不朽

古谷節夫

古田太虚

古田比呂子

岩本文晴

岩本笑子

石原淑子

信本博子

岡本清水

藤解静風

山内房子

ほか一同

花地抄墳

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

色あせた女心を染めてみる　照　山
唄の順来そうお酒をつぎ回り　吟　平
嫁ぐ娘の嬉しさ淋しさ混ぜて縫う　ふさえ
ねんごろに磨いて鍋の尻光る　江　山
ＡＢＣ知らず長寿は腹八分　光　水
春炬燵一人の老いの連れに置き　千代女
国鉄よさよなら思い出有難う　保　恒
散歩する桜並木にさがす詩　つゆ草
節くれの指も知ってる吹き溜り　山　人
春草に宮人の詩探し摘む　秀　香
混雑に押され自分も押す一人　静　香
田舎味噌届いて身に沁む親心　禅　心
使われるバイト一日長いこと　さわゑ
こつこつと貯めて気前よく使い　邦　人
お化粧しきれいな心朝を立ち　美恵子
此の皺に苦心している朝化粧　定　山
おめかしが過ぎて生徒にひやかされ　甫　正
夢いっぱい詰めた女の化粧箱　伊久栄
現代子遊びは家の中ばかり　知代子
遊び場は夫が寝そべる畳下がり　虞　人
お遊びのつもりが結局ゴールイン　藤　江
森林浴洒落た名前の山遊び　あき子
火遊びも人間ドラマの一頁　雅　紅
孫の守り孫の遊びの中に入る　種　子
パチンコの遊びおぼえた市場竈　志　重
蝦蟇口が遊びのストップかけてくれ　半　仙
新緑の一日遊ぶ家族連れ　つた子
建前ばかり本音なくした日本魂　小安芸
使う程味が出てくるお茶道具　旭　泉

尼崎いくしま句会　上田　佳秋報

凡人が無言で曳いている屋台　〆　女
隣人を凡人だから愛します　天　樹
凡人で三度のめしがあればよい　正　一
美術館出て凡人は欠伸する　作二郎
病床で凡人になる本を読む　一　郎
凡人にあるまじき夢見てしまい　年　代
嫁ぐ日が近くて炎えるつむぎ糸　和　友
古糸をつなぎ直して友と逢う　かず子
母と子の絆をつなぐ糸電話　梨　枝
千羽鶴通して糸の眠られぬ　曲ん手
糸車亡母の温みがまだ残る　杜　的
人形へ命を送る糸さばき　定　人
先着の荷物が宿で出迎える　美代子
趣味の輪が生き甲斐くれる老いの旅　文　夫
職安の用事が済んで旅に出る　白渓子
錆びても男だとついてきてくれる　伊三郎
猫が一匹錆びた錨に坐ってる　萬　的
錆びついた砲車が語る夢の跡　柳　影
錆びてなどいられぬ母の裁ち鋏　いわゑ
大胆に脱いで砦のあとがない　春　子
臼杵にて聞きしに勝る磨崖仏　ときお
長旅の疲れそろそろ腰にくる　諷云児
回数がだんだん増えるドッコイショ　佳　秋
私より肥えたルンペン足を踏む　幸　子
二代目を見込んだ男使い込む　保　蔵
アルバムはわが家の歴史積み重ね　園　歩
水着ショー照れているのはカメラマン　かすみ
へそくりのありか教えて入院す　みち子
七転八起き父の靴下ゴム伸びて　はつ絵
紋日だと他所の鳩まで来るお寺　紫　香
野良犬も原の夕日の中にいる　牧　郎
玉砂利の中へ雑念置いてくる　歌　子
禁煙が普通になったニューモラル　文　夫
ポカポカの陽気に負けて居られない　す　ゑ
凧の糸切れてうぬぼれ落ちてゆく　静　夢

尼崎をはま句会　上田　佳秋報

孫が持つ手さげ袋は緑色　文　人
公園のみどりで憩う老いの道　定　人
みどりでも油断召さるな右左　歌　子
街路樹にビルが揺れてる御堂筋　十四郎
風みどり歩調の揃うランドセル　武庫坊
大根が首に緑を巻いている　寅之助
山登り意外な方から滝の音　美　代
金銭が意外な面を覗かせる　いわお
すしご飯分量間違えビッチャビッチャ　た　か
のど自慢マイク持ったら歌詞忘れ　貞　吉
握りめし猿にやったのが失敗で　夢之助
失敗をしてから亡父が偉く見え　弘　治
失敗と思う女房の寝顔です　牧　郎
妥協案出すのは何時も男から　佳　秋
気の強い嫁に時々泣かされる　よしつぐ
鮎焼きで一杯はずむ初夏の膳　向　西

水鉄砲洗濯物も的になり　敏之
逃げる気の殺し文句でつかまえる　紫香

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

能面が無言の台詞で攻めてくる　杜的
嫁が来て嫁さん風に染められる　江美
初舞台の孫の台詞が頼もしい　笑女
ストレスが溜まりジャガ芋芽を伸ばす　佳秋
率直な妻へ梅干よく染まる　はつ絵
こころとは別の台詞が出てしまい　幽香
ロボットの台詞で回転椅子揺れる　嘉矩
逢うまでの台詞に軽い嘘がある　園歩
バーゲンへストレス捨てた後遺症　よし津
いざという時のセリフはポケットに　恵美子
其の台詞そのままあんたに返しましょ　よ志子
ストレスが溜まったボール雲にのる　いわゑ
あけっぱなしストレス溜まる裏がない　紀雄
綺麗でも造花はほこりばかり吸い　芳子
爪染めて女ストレス溜めている　(松)芳子
逝くときの台詞をフッと考える　きよ子
ストレスで胸ポケットがほころびる　静子
万感の台詞をのこし桜散る　タカ子
ぎこちない台詞あなたを信じよう　三男
重そうなイヤリングをして無表情　萬的
寝たきりの母の肌着を替える午後　光代
補聴器を敏感にするゼニの音　青珠
よく弾む毬でストレスたまらない　米朝
職退いて何故かストレス溜めている　一郎
ストレスをパチンコ店に置いて来る　陽露子
営業用の笑顔セールス持ち歩く　白渓子
ボヤでよかったのに消防はおかんむり　しげお
追伸に淡い想いを染めておく　美智子

脱ぐならば生きてゆけないことはない　年代
言うてはならぬ台詞が吸取紙にある　幸
挨拶はあとでますます脱げと言う　柳影
淡々と再婚語る花菖蒲　てる
ストレスがたまると鬼の角が伸び　武庫坊
どの色にも染まる純情さが恐い　正一
鶴ばかり折る色紙が拗ねている　三笑子
美しい台詞で鬼が誘いかけ　〆女
捨て台詞残して喧嘩物別れ　伊升
つばめの子虫は取れたか日が暮れる　みつ子
染めたいが私でなくなるのが恐い　さる子
名物を無言で食べる娘が二人　房子
首無地蔵は夕陽に染まり海を向く　作二郎
藍染めへ賭けた男の手が青い　定人
髪染めた日から女に揺れるもの　かすみ
うしろから押してくれたら翔べるのに　保
朱に染まるうなじの中の軽い飢え　文平
奥さんのバイクに自転車追い越され　眉水
背伸びして今日のプランを考える　善太郎
飛行雲あたまは遙か雲の中　新造
孫の行儀叱れば肩を突き出され　市雄
瞳の奥にわたしを染めた藍がある　荒介
ノータイに句帖気ままな旅に出る　伊三郎
安いとこ探す浮気の市場籠　勝美
七難をかくすかつらを持ち歩き　芳仙
薄情な医者でコロリと死なせない　白李
名は要らぬいずれ戒名つけられる　枯梢
座布団の数をきめてる幹事役　一進
白鳥のプライド水色には染まぬ　俊子
流行に染まり個性がぼけてくる　文夫
補聴器をかけて本心確かめる　良征

染め足らぬ旗が早々褪せてゆき　千秀
母の忌の数珠くちなしの香に染まる　三枝子
新入りの金魚で揉める金魚鉢　曲ん手
どん底でカエルのジャンプ真似てみる　博子
好きなもの三つの中の旅と酒　森生
雨の日に園児の長い黄合羽　ノブ
はじけたい時にはじける草の種　紫春
伊豆箱根富士は見えずに新茶買う　千世子
三方の鯛の台詞をききのこす　天樹
その台詞何度も聞いた猿芝居　雀踊子
倖せ色に染める決め手は愛だろう　太茂津
人妻とお茶飲みました風みどり　紫香

南海電鉄川柳部　廣井幸柳子報

喫茶店コーヒだけしか知らぬ母　千万子

佳句地10選（前月号から）

松川杜的選

強いのは大上段に構えない　薫風
芯の強さタンポポ母によく似合う　みつ子
嘘の無い愛を包んだ手話の指　右近
生きるとはこんな日もある泥まみれ　和子
朝めしはパンにしてます雀の子　鬼遊
校門を出ると一年生走る　紫香
浮き浮きと春の下絵を描いている　水客
行く先があれば家出をしてみたい　小雪
小言言いながら娘の靴磨く　小路
母の目が笑っているから怖くなる　雀踊子

老眼鏡かけても見えぬ秘めた恋　真砂
公園の鳩鍵っ子にある対話　花仔
千羽鶴平和公園にある願い　季柳子
公園の鳩が待ってるパンの耳　重人
噴水のある公園で待たせとく　曲ん手
公園で知らぬ草木の名を覚え　東雲
公園のお巡りさんは親しまれ　綾珠
どうみても勤務時間の喫茶店　圭水
宴会を抜け出す二人の喫茶店　一進
老眼鏡孫が笑わす祖父の真似　覚然坊
老眼鏡父の歩いた道を行く　悦郎
窓口に老眼鏡の思いやり　勝美
四十路坂お世話になります老眼鏡　清子
老眼鏡かけて針持つ母の背　志華子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

猫ほめたのに借金を断られ　壮之助
爪を研ぐ女と猫が怖くなり　雀踊子
慌てるな美味い話に落し穴　善信
切り札を持っているから慌てない　射月芳
ポスターの笑顔に二枚舌隠し　克己
美女を撮るポスター露天風呂の月　千代三
平等な親の愛とは知らず拗ね　博子
妻も夫も遊ぶ相手をもっている　千代美
敗北のベンチへ容赦ないマイク　庸佑
肩の凝りを感じた時は敗けていた　萬的
主人より哲学的で困る猫　史好
切り札を使い果して慌ててる　隆二
気が向けばする名人で慌てない　文秋
ポスターがウインクをした気の迷い　育園
太陽の平等うばうビルが建ち　花仔
洋菓子の切りようもある頭数　しんじ

敗北を予定の中に入れられず　幸治
寝酒一合国破れしは遠きこと　章
敗北は知らぬ雑草すぐ伸びる　柳宏子
猫の恋実る仁王の眼の高さ　恒明
円高でまたキャンセルのテレックス　隆
上原高峰のポスターに厭きてきた　冬葉
均等法女も酒が強くなり　真砂
平等に分けても子等はにらんでる　重夫
敗北も秘密があってする行動　東雲
殿様がこよなく愛した猫と毬　甘平
お買得あと何名と慌てさせ　頂留子
ポスターの美女よあなたはしあわせか　眉水
平等の愛ていったい何だろう　重人
敗北の服は汚れたままでよい　柳影
土壇場で慌てぬ兄の広い肩　美幸
平等がおんなに重い日もあろう　白兎
さわやかな敗北拍手してあげる　国公
どちらにも子が一人居る二度の縁　たつお
敗北はスロービデオで説いて呉れ　覚然坊
漁師町猫はゆっくり起きてくる　作二郎
ふたりきりのときはシャム猫甘えない　翠公
名匠のノミ完成へ慌てない　浩一郎
ポスターの笑顔が消えた落選後　律子
そのために敗者復活までさせた　凡九郎
敗北へキツネうどんは母の味　美津枝
ポスターも褪せて浜辺の恋終る　邦晴
敗北は皿を叩いて忘れよう　新造
慌ててももうレーダーに写ってる　喜代治
平等の愛わかろうとせぬおんな　柳伸
金権と競い敗北感はない　小路

川柳高知　川竹　松風報

札束へ今良心が揺れている　節子
知るはずがないのに妻の目がこわい　功
灯を消してから良心に裁かれる　佳風
地蔵様みんな似ている丸い顔　かず子
電話口また間違っている親子　朱坊
父親をコピーしたような新生児　松風
ご先祖のどなたに似たか祭り好き　菊野
タンポポの綿毛優しい風を選り　千鳥
お喋りな花売り春を連れて来る　春枝
村議選この一部落一候補　孜郎
報道の自由遺族をつるし上げ　高重
老妻に負けて平和な風が吹き　多鶴
悔い一つ眠れぬ夜の水の音　竹萌
庭の隅伸びる新芽に春を見る　幸泉

川柳ささやま　脇田　米朝報

幼稚園通れば風も歌になり　ゆう也
幼稚園邪気な球でよく転げ　つや子
幼稚園ママを画く絵の丸い顔　千代子
内の孫落第せずに幼稚園　エキオ
中流の意識でパンを裂いて食う　文平
サンドイッチ母は真心はさみます　靖子
ふるさとはパンでなかった温かさ　可住
パンを食む瑞穂の国の泣き笑い　冨美
母の背に触れると聞える子守唄　和子
ちょっと手が触れると思わず赤くなる　ひか平
手に触れて痩せていとしい母の背　愛子
ふれ合える事の嬉しい千羽鶴　法斉
平凡な暮しへひとが寄ってくる　テル
平凡へねむけ覚しに染める爪　貞子
菜っ葉服着て平凡なコップ酒　ヒサ子
平凡の中で小言が堰を切り　米朝

富田林富柳会（三月句会）　**池森子報**

土、日に歩幅崩れた月曜日　智恵子
鰯雲自分に負ける日がつづく　幸
鰯雲友は別れの詩を残す　美房
縞がすりよき思い出をたたみ込み　花梢
親指のいうことをきかぬ子の鼻緒　千万子
靴下の男へ鼻緒妥協せず　天笑
天狗やで鼻緒をゆるくしてもらう　鬼遊
人間国宝祈りに似たる指動く　萬的
平凡な名前を付けてある祈り　智子
呼びとめて応えぬ女は鰯雲　維久子
待ちぼうけ顔をあげれば鰯雲　勇
今もなお亡妻目の前にいる祈り　一二三
この祈り神に通じて出る笑顔　シズエ
縞がすり芯の強さを覗かせる　雀踊子
人恋し話相手の鰯雲　博子
わかれたひとの味で珈琲淹れている　藤子
珈琲を熱くして飲むすこし妬く　曲ん手
珈琲をゆっくり置いて矢を放つ　美幸
いわし雲紙人形も欠伸する　冬葉
珈琲のにがさ自分をせめておく　頂留子
月曜の妻寛ぎと虚しさと　泰子
見えぬもの追う日ただただ祈るだけ　今日子
いそいそと老母が織り継ぐ縞がすり　登志代
鰯雲その日その日の風まかせ　文治
東京は知らないという縞かすり　紫香
縞かすり無限の愛を問いかける　失名
妬心フツフツ鰯雲まで憎くなる　三枝子
縞かすり瞼に残る句座の女　荘次
旧姓に戻り珈琲あまくする　月子
月曜もついでに休んでいるデート　富久一
月曜病と安易になれぬ年になり　文子
お替りの珈琲待ち人現われず　新造
ひび切れた手は忘れない縞かすり　小路
女心燃え鼻緒に言葉秘めてある　凡九郎
梅の枝祈り悲喜交々にくじが咲く　優
病棟の深夜一息コーヒーで　綾子
対岸の火事へ動じぬ鰯雲　柳伸
野仏の指の先まである祈り　森子
賽銭をあげる後で手を合わせ　柳太
水掬う両手に祈り深くする　岳人
珈琲で含嗽するほどコーヒー好き　薫風

富田林富柳会（四月句会）　**池森子報**

検札に欠伸も見せる乗車券　文治
挨拶の下手な雀の回り道　荘次
挨拶はベランダ越しですむ団地　文子
上司から挨拶受ける春四月　花子
ＯＬの若い欠伸は許される　富美子
おふくろの欠伸でやっと日が終る　優
花冷えの挨拶寒くなりました　トシエ
ていねいに挨拶されて切り出せず　田中勇
遺言状欠伸しながら書く親父　伊庭勇
甘酒で一服老いの集印帖　曲ん手
欠伸しながら使者を待っているナイフ　森子
河馬にある営業用という欠伸　美房
挨拶はぬき喜びの手を握り　花梢
春の絵の向こうで欠伸する仏　岳人

倉吉川柳会　**渡辺菩句報**

ようこそを百遍も言う故郷の母　よしえ
続編は私の好きな色であむ　松女
よろめきのドラマ男女の色模様　小生
夏日差しさえぎるものにサングラス　寿満湖

第2回 川柳塔勉強会

日時　昭和62年8月17日(月)・18日(火)
場所　兵庫県篠山町
国民宿舎ささやま荘
TEL07955(2)1127
集合　17日午前9時45分
大阪駅中央コンコース噴水前
句会　お話　田中正坊
兼題「帯」　津守柳伸選
「役場」　遠山可住選
「猿」　黒川紫香選
締切　午後2時（各題3句）
観光　篠山町デカンショ祭
翌日2時間観光コース見学
会費　五〇〇円（宿泊代五五〇〇円）
篠山口駅迄の運賃と観光料は各自負担
定員　二十五名
連絡先　〒661　尼崎市武庫荘5—25—17
春城武庫坊
TEL06—431—1152
主催　川柳塔社

赤の広場にドイツ色した汚点つく　あや子
停電のチャンス二人を寄り添わせ　車楽
旅支度遠いと思う羽づくろい　荒介
七色の妻の牽制球が飛ぶ　はるお
太陽に負けぬ真っ赤なシャツを着る　完司
色違い買って二人の親近感　秋草
マゼランの星が遠くにあるそうな　秋人
色気が無いと言う人に噂立ち　寿朗
その内に遠いあの世へ行く出番　満春
ナニ色のパステルが描くわが未来　瑞枝
停電をラストダンスは気にしない　雄々
停電にコンピュータを狂わせる　かつみ
停電の闇を流れる佐治谷咄　石花菜
望遠鏡逆にのぞきたがる女　柳風
閻魔さんに遠隔操作されている　とみお
ようこそと良寛に似た骨董屋　みなと
遠目にはぼくのワイフも美人だな　次男
花色が褪せてもさくらさくらです　幸苑
色メガネ世界が真赤に染まります　秋女
ようこそが腹から言える嫁姑　独歩
色気抜きとはとしよりの逃げ口上　菩句

にた川柳会　西村　早苗報

日本の宝知床荒らす国　宗光
ふきの皮むく母見てる赤い爪　鉄花人
その話止めて頂だい娘が迷う　為一郎
幸せが他人の不幸忘れさせ　哲三
鼻声で甘えられても空財布　幸一
旗掲げて子供の居ない子供の日　裕
芽が伸べば毛虫出番と動き出す　愚童
楢山に持っていきたい種集め　静子
お品の悪いおたまじゃくしが二三匹　景子
電柱の犬を真似てる千鳥足　夢酔
花時計待ちくたびれて雨になる　寿美子
事故死だと思わぬ刑事一人いる　登美也
火山より熱い吐息で迫られる　雄々
人様の肚を読むことだけに長け　弘朗
自分史の中にもあった水だまり　雀踊子
窓際で冷たい噂に馴れている　〆女
手抜きした子育てやがてつけが来る　多賀子
二人してほぐす大きなもつれ玉　花子
愛鳥の巣箱分校二三人　早苗

静岡市川柳塔同好会　永倉　僕川報

逆境の友さりげなく言葉選る　弧秀
雑念が尽きることなく坐禅終え　金吾
OB会老いの尺度を見付け出し　紀代志
なまけものに似て古時計止まりがち　定次
厳しさと頼り甲斐ある父の胸　孝平
鏡見て皺は苦労の積み重ね　庚子郎
駄法螺吹く大風呂敷を広げすぎ　喜平
目の手術してから世間丸く見え　やす
避難命令出たかのように蟻の列　たま
血統書付いて鎖が離せない　たき
田植時喧嘩をしてる暇がない　つね
屁理屈をつけて言い張る負け惜しみ　きん
肩書がついたと母は子の自慢　まつゑ
物好きの財布の口が軽くあき　みつ
手馴れした大工に釘は逆らわず　きぬ
底抜けに明るい友に明日会える　千代
顔見知り一緒で高い肉を買い　静代
隠し芸稽古お金も積んだ顔　僕川

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

円高で人間ロボットたんと増え　あき
老体をおいといもなく植樹祭　旭恒
穴あいた靴とサヨナラボーナス日　高明
冗談が化膿せぬようボスの留守　四郎
惚けたように見えて離さぬ倉庫の鍵　虹汀
母の闇灯す地蔵へ百度踏む　朴竜
一枚の画布大空へ御来光　花代
遠い日の温みに触れる母の膝　久仁於
美しい笑顔で女爪を研ぐ　香代子
横文字で癌という字が解らない　正敏
公約のような撒餌に釣の糸　掬水

川柳大阪　山下みつる報

ゆっくりと仮面を外す退社ベル　重人
今日の知恵底にかくした市場籠　洛酔
五月晴屋根でふとんが柄競う　本蔭棒
人生の粗い積木を積み直し　与呂志
のどかな妻と二人でわらび取り　遊心
夜桜を見ながらかわす夫婦酒　哲流
梅雨の入りカラオケ歌う雨蛙　三千雄
イカ焼きの香りこうばし花の宴　もとみ
紫の情にほだされ小指かむ　敏
メーデーを祝う我が家は豆御飯　喜酔
方言に馴れて娘の里帰り　しげお
夢にみた老後狂わす低金利　雅巣
灯を消すと素顔を見せる鬼の面　希久志
笑う雨泣く雨もあり釜が崎　一介
妻の前男はみんなおとなしい　あすか
雨やがてそして今夜を泊らせる　凡九郎
ハイキングべんとう作り梅雨にらむ　魚住
通り雨だったか知れぬ恋もある　虎酔吟
夜桜は人出を誇り散って行く　喜楽
戦前の恐怖が匂う機密法　柳弘

夜桜も売上税のタスキ掛け　司
円空仏粗いタッチに慈悲がみえ　酔舟
前向きの姿勢は今も持ち続け　天平
目の前に転がる福がつかめない　比呂志
夜桜へ頑固課長も恵美須顔　鉄心
前ぶれの無いのが怖い核兵器　笑風
すぐ前にある幸に気付かない　金太
過去みんな忘れてばけの仲間入り　みつる

岸和田川柳会　植山　武助報

目標が近いぞ軽くなる歩み　希久志
コーヒーに一寸浮いてる今朝の幸　一弥
自閉症の心を開く母の愛　通彦
親友の仲を引き割くのも女　浪速子
気のおけぬ友へ時間が短かすぎ　加代子
プライドを捨て切れぬ肩寡婦の風　寿美子
子はみんな巣立ってもとの二人です　みのる
踊りの輪脱ける二人を覗く月　圭一
桜一輪売上税のウソを聞き　ダン吉
核家族老いの二人にある孤独　ゆづる
マイカーの花見ジュースだけにされ　佳生
欲ばりが並んだ朝のパチンコ屋　狸村
過信した分だけ怒り倍になる　武助
倖せの朝のリズムを持ちつづけ　春栄
大印の帯へ安産たのんます　冨志子
夫より一日だけは生きのびる　射月芳
おなじみが見えず気になる朝の駅　こう
吊橋を行って戻って凡夫婦　甘平
読経から今日が始まる寡婦の日々　ひで
花冷えの風邪ひきそえた月詣り　白光子
何もかも知ってて月は笑ってる　さよ子
友達の秘密を妻はまだ知らず　勝晴
ふれ合えば心一つになる世界　操子

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

仏壇のおはぎセロハン着ています　悦良
母の愛派手な弁当噛みしめる　翠星
若人に思い出残す四月かな　世似
ほめ言葉なんで素直に出ないのか　ヒデ子
前夜まで温めたものに陽が当たり　かつ子
あくまでも割引などはせぬ男　民子
ほめ言葉九官鳥に教えこみ　聖子
ほめられてリンゴなまめく聖夜かな　鎮江
結論の出ぬまま盆栽ほめて去に　智重子
ほどほどに賞めて下さいこそばゆい　歳栄
弁当はラーメン蟻の群にいる　蒼流
漬物にご飯弁当なつかしい　清泉
老春へ朱をともすかや桃の花　天痴人
弁当に軽い命を支えられ　はるみ
ほめられて白紙に判を押しました　白汀

川柳化粧櫓の会　植村客遊子報

黙っていてあげよう寡婦にある噂　大鷹
見憶えのある顔ラッシュのすれ違い　岳詩
ひやかしの顔もうろつく百貨店　秋月
廻り椅子壁のグラフをよくにらみ　越山
金歯ちらりそこから嘘が漏れて出る　葉香
離職票首輪がとれた顔になる　紅月
荒れ海の漁師へ妻の応援歌　白李
止まり木の隅っこにいる聞き上手　礎石
託された願いを千羽鶴が聞く　悲子
家守る妻は奥から叱咤する　秋信
糸通し苦労しながら仕立物　みつこ
マンネリになって老いゆく恐ろしさ　サワ子
長持ちを開けば亡母の匂いする　遊峰

土居耕花句集『やっこ凧』発刊記念川柳大会

とき　昭和62年9月20日(日)　午前9時開場

ところ　大原町総合センター大ホール
岡山県英田郡大原町古町一七〇九
電話（0868 7）8－3752

お話　本田恵二朗

兼題　橘高薫風選
「土」
「居る」　小林由多香選
「耕す」　青山岳峰選
「花」　土橋蛍選
「凧」　長尾保選
「傘」　川元いさむ選

席題　二題　各題2句
締切11時30分
欠席投句拝辞

会費　一、五〇〇円（軽食・発表誌呈）

賞　総合10位まで（一句一点方式）

★9月10日までに出欠をお知らせ下さい。

連絡先　岡山県英田郡大原町中町513
電話（0868 7）8－3815
川元いさむ

主催　大原川柳社

焦点をぼかして嫁に言う小言　遊光
里の香の浜蒸し持って母が来る　輝月
セスナ機へ生命預けて視る氷河　とし
栄転へ茶の間は弾む酒の味　みね子
明治の子一粒の飯拾て食べ　永楽
露天風呂女の肌が若返る　和子
割勘の端したを皆んな払うてくれ　客遊子

川柳泉尾　吉川　寿美報

新人類派手につけてるアクセサリー　三世
通勤と別日曜のアクセサリー　白水
ひそやかに昔を手繰るペンダント　シメ子
TPO老眼鏡もお洒落する　トミ子
アクセサリー身につけ女の小宇宙　三千代
ため息の手から指輪がすべり落ち　敦子
空をきるこぶしをそっと納いこむ　敏
接点を求め続けて陽と月と　美代子
誰よりも親を求める孤児の顔　シマ子
十円で求める願がまたでかい　はつ子
髪を切り別の幸せ求めよう　光子
青い鳥求めて夫婦齢を取り　清子
求めることばかりで心やせている　昭子
五十歳求めるものが多すぎる　弘子
まほろばを求めて大和の里めぐり　文子
0三つ消せば買えますアクセサリー　満州子
病人が病人見舞う更年期　キヌ子
それからの話は乗らぬことにする　重人
あこがれて大人になったいぼ蛙　伴子
仕舞た屋のエンジンふかすこいのぼり　和子
同窓会皆一様に父母の顔　美南子
衣更え迷う今年の花の冷え　淑子
陰謀が空から降って四面楚歌　美子

夕暮れて牧場の空は暮れ残り　義一
つっぱりも愛とやさしさ求めてる　素子
くじけたらあかん大空ある限り　寿美

川柳藤井寺　赤木　和子報

新聞のミスは小さく小さく詫び　志洋
のど仏詫びる言葉が上下する　かな女
夢を追う老いの心に齢がない　喜道
生きてゆく証の汗は苦にならず　きよし
ポケットに恋のかけらが残ってた　美房
再会の日から雪崩のような恋　治子
野良犬も青信号を待っている　重樹
十年はまだまだひよこ芸の道　吸江
親不幸詫びる墓前に露ひかる　作秀
信号が変るわたしの気も変る　つやこ
摘草の悲鳴はヘビの知らぬこと　本蔭棒
神仏の号令聞いた花の順　伴子
泳ぐ鯉天下の風を一と呑みに　ときお
朝夕に木魚を聞いて咲く牡丹　てつを
省みて詫びねばならぬ事ばかり　須美
蝶の舞約束させて逃がす母　ふみ
絵に書いた毛虫も厭なアレルギー　敦子
無駄がありこんな楽しい時を持ち　与呂志
居酒屋はくだを巻かれて逆らわず　祐二
ビルラッシュ毛虫の住家も倒されて　うめ
用のない毛虫が力借りに来る　末一
気障な奴オーデコロンを振り撒いて　繁男
詫びていた頃がなつかし老夫婦　昭子
祝うべし親兄弟の齢を抜き　秋園
落ちて首振ってる毛虫踏みかねる　麻雄
門開けて古都税通さぬ京の寺　清心
階段の手すりをさがす齢となり　ふゆ

当選に売るほど届く祝酒　正人
いさかいの昨日を詫びる花を活け　正枝
老いの身に春愁少し愉しめり　雅美
バラの芽の仄かに紅く愁消す　彩
クレーンの高く弧を描いてる春の雨　和美
露天風呂松のかげから蒼い月　初枝
絵文字から古代の話聞いている　美代子
ふるさとや緑に嘘は通じない　みのる
祝宴で会いたい人に派手を着る　美佐
十年か浦島太郎も驚いた　三郎
粗大ごみと言われて過ぎたこの十年　秀伸
十周年生き永らえて趣味多彩　庄太郎
松水苑十周年を喜びて　幾

京都塔の会　松川　杜的報

JR桜吹雪に迎えられ　英子
顔洗う水が冬になり春になり　求芽
母の日の台所からは子らの音　はつ絵
来年は金婚式だなあ妻よ　白李
通り抜けの疲れ抹茶でしめくくり　達子
もう一度ひばりの歌を恋しがり　敏正
とまり木で席をゆずってくれもせず　故実男
ハタをおる島人世渡り下手と言う　和友
藤の雨母は享年六十九　幸
忘れてたすみれここよと顔を出し　美枝子
不器用でただ一すじの趣味に生き　年代
春宵の少女の嘘にのってやる　武庫坊
青空はよし宿題は忘れたし　花村
三回忌亡父を送った藤が咲く　美穂
子に返る九十路も娘には母の顔　花代子
息子と孫と家族の味わい貰て来る　(松)芳子
糸底が少うし欠けてからの愛　杜的

高く手を挙げれば星が従いてくる　水客
あるがまま生きられたのですか羅漢さん　葉子
現世を来迎菩薩が嘆かれる　佳秋
トンネルの鳥居抜ければ五月晴　三求
賽の河原みんな成仏したお顔　よ志子
羅漢百態この世を垣間見るように　(河)芳子
釈迦一代声なき声を聞く竹林　春子
筍ニョキリと羅漢の膝へ顔を出し　萬的
薬草の匂いの中の母思う　巨詩
雑草も春の陽射しにラブコール　登志代
草かげろう風の少年ふり向くな　麗水
不出来でも草餅供え亡母に合う　江美
草木染あわだち草の黄に惚れる　静江
草に寝て流れる雲に乗っている　一郎
国宝の屋根とも知らず草が生え　飛鳥
保護された子供にやさしく説く婦警　孝江
助教授が説くと楽しくなる講話　紫香
思案せず昼はカレーと決めている　正坊
としよりの思案に余る神だのみ　笑女
思案する膝へ玩具の汽車がくる　かすみ
好い思案だけど先立つものが無い　白渓子
待ち呆け思案にくれる花時計　栄
思案して男が渡る丸木橋　〆女
長いながい思案の果てにやはり蕎麦　てる
思案する振りして匙を投げている　颯云児

川柳たけはら　森井　菁居報

れんしゅうをしたらしあいもこわくない　小二昌之
魚つり太陽ピカピカまぶしいな　小三裕次郎
六月のプール開きがまちどおし　小五由博
お父さんべん強ばかりやらせるの　小四聡子
句を作ってからアイスクリームを食べる　小四晶美
お母ちゃんにないしょカーネーションを買う　小四晴美
新しいシャツ何にも良いことなかったよ　中一純平
弟の五月人形見に下りる　小三視幸
病人が居るとも知らず選挙カー　中一亜貴子
無理矢理に押し付けられて気が重い　大一真弓
生かされて平戸つつじが真っ盛り　菁居
猿と目が合うて会釈をしてしまう　蘭幸
蟻の列やっぱり平和はいいですね　政己
幸福かぼける間もないスケジュール　静水
九十路を叱ってくれる子ならこそ　シゲヨ
雑草の中に生きてた記念樹よ　清彦
自画像に皺が一つも書いてない　一路
辛抱しんぼうお天道は見てござる　清水
人生に負けてばかりもないだろう　博子
春ですね行ったり来たりのし袋　康子
一休みしたらと石が置いてある　笑子
三人の子がいて母の日ははがいて　淑子
定退の旦那が水をまいている　貞子
じいちゃんが留守こいのぼり泳げない　千代美
幸便へせめて一うすよもぎ摘む　房子
リフォームをだれより嫁がほめてくれ　千恵
五月晴れカープみどりの風に乗る　光子
友とゆく川土手少女の目にかえり　栄恵
おばあちゃん道をふさいで春ですね　愛子
そよ風が歩け歩けと押してくれ　光頼
待ちぼうけ鍋をかけたりおろしたり　キヨ
明日は明日今日一日のスケジュール　俊夫
奔放に生きて気どらぬ木瓜の花　静佳
見つけたり納めたはずの小銭入れ　八重美
人を恋うポットいつでもお湯がある　浪子
小銭入れの万円札はくずさない　喜久恵
友達っていいなあごろんと寝て話せ　千年枝
腹の虫まだ納まらぬ歯をみがく　春美
花冷えに一枚はおるショッピング　君枝
皮と身のはなれた蜜柑食べ納め　雪子
ジャンボ巻きずし飢えてる国に届けたし　麻代
信念を通す俺にも居る味方　勲
みな出世のぞんだはずの鯉のぼり　喜美子
実家よりうちがと嫁が言うてくれ　房枝
脇役でよし一直線に生きた自負　静風
春の市今年もきっちり雨が降る　ヤスエ
針穴をのぞくと聞ける子守唄　鬼焼
大掃除思い切れないものばかり　笹舟
生きているあかしに思慕のラブコール　こうじ

川柳塔まつえ六月例会　恒松　叮紅報

夢に出た亡母は昔の顔のまま　玄艸
亡母の齢越して幸せかみしめる　みつこ
母の日も母の時計は狂わない　鳳人
どの星が亡母の星やら孫が聞く　満江
母の皺ドラマを秘めて深くなる　昭二
そして痩せ小さくなった母の背な　きみえ
一度だけ泣いて聞かせた母の鈴　蒼流
無防備な母どこからも攻められぬ　千代
母ちゃんが一番きれいだった参観日　静翁
母さんが強いと思う金なき日　春梢
母の海広くて何時も甘えてる　秀子
マル優の廃止を嫌うコンピューター　友子
マル優の架空名義で頬かむり　笑円
マル優に貯めて極楽行くのかな　市雄
マル優廃止どこ吹く風の箱貯金　寿美子
マル優の廃止庶民の夢なくす　みえ
マル優は関係ないと金を貯め　鶴丸

マル優の話一人がそっぽ向く　弘　円
マル優はどこ吹く風の暮らしぶり　愚　童
マル優はどうあれ日銭追うくらし　由　郎
マリ優に関わりなくて気の安さ　育　子
マル優で騒ぐ金持ちにもなれぬ　正　朗
弱腰になると臆病風が吹く　代仕男
肩書を捨てると腰も軽くなる　登美也
腰弁の父の日記は閉じて置く　多賀子
腰痛へ部品交換してみたい　雄　々
腰低い人の誠意に逆らえず　芳　子
物腰の丸さは母を見習おう　妻　子
働いた腰に老化の痛みくる　静　恵
荒波の社会乗り切る低い腰　翠　星
腰の良さ見せたねばりの土俵際　風　子
根廻しは終るどっかと腰すえる　貢　範
鮎解禁腰まで浸る太公望　ノ　ブ
足弱い母にゆっくり歩を合わす　舞　吉
ゆっくりして帰れと母が小豆煮る　巡　歩
晩酌が老いの楽しみゆっくりと　静　江
一汗を流したあとの青葉風　長　三
達筆の返事書く手に汗にじむ　日出子
善人は嘘がつけない鼻の汗　与根一
家族四人くらしを背負う父の汗　叮　紅

川柳わかやま　神平

谷底へ落ちたこころを拾えるか　幸
人生の谷間で拾う温い縁　柳宏子
綱いっぽん谷の深さへ届かない　寿　子
二つ三つ谷越えて来た人間味　紀　世
谷いくつ越えてみつけた青い鳥　公　子
清貧に恥じぬ詩あり谷間の灯　克　子
一枚のカード捨てれば越せる谷　千寿子

狂虎報

水害の谷を見つめて石地蔵　萬　的
母の住む谷間は何時もあたたかし　三　男
人の世の谷間で咲いた花一輪　瑞　穂
逆転の火を溜めている谷の底　信　秋
雪解けて無口な谷が喋り出す　忠　雄
断ち切れぬ絆を谷に埋めにゆく　栄美子
ビル谷間風も車も疲れてる　武　雄
四季の風たたえて母の待つ谷間　英　子
谷あいの花を蝶々見のがさず　登志代
親の轍踏んだ子供を責められぬ　照　子
善悪を教えず非行も責められず　つる子
私を赦した罪に責められる　緑　良
完璧を望んで責めてはならぬミス　太茂津
寛大な処置に自分を責めてみる　紫　香
責められた理由を今も捜してる　正　子
責め言葉むなしさを噛む砂をかむ　忠　節
海鳴りが気ままな旅の夜を責める　与呂志
母だけを責める涙に負かされる　精　子
逃げ道を作って責める思い遣り　美智子
責められてからの秒針狂い出す　紀美女
白紙いっぱい書いた本心破り捨て　守
ペーパーテストで人間の価値測られる　輝　子
紙いっぱい好き好き好きと書いて病む　豊　太
勝負まだ激し竹二の紙芝居　恭　子
しみのある白を白紙と言いとおす　桂　香
カーテンの向うへ自由にとぶ燕　信　子
カーテンで仕切っただけの脱衣場　雀踊子
カーテンを閉めて噂から逃げる　狂　虎
一枚の紙の薄さで黄昏る

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

一日の流れを止める終電車　福　一
流れ流れて母なる川の丸い石　〆　女
人情に流されうだつ上らない　隆
わだかまり水に流して酌をする　史　子
青虫が化石頭に知恵を借り　典　子
折れた歯が化石みたいに見える夜　博　史
片思い胸にしずめておく化石　きく子
ビーナスはギリシャ美人の化石かも　正　坊
戦争の化石となって鉄錆びる　萬　的
食べものの気ままが退院して治り　白渓子
漸くに気ままの言える齢となり　富　子
寂しくはなったが気ままは仕放題　英　子
気ままだけ優性遺伝して母娘　洋　子
この年で気ままに生きよと宗旨かえ　春　子
核家族夫も気ままになってます　よし子
年金の気まま暮しも板につき　登志美
実家帰り娘気ままを言わずなり　房　子
檻に居る獅子は気ままに寝てばかり　紫　香
傷口に昨日の酒がうずくまる　武庫坊
物好きな夫だと思う濁り酒　曲ん手
はしご酒ゆうべの客とこんばんは　喜代子
癖の出る酒で友人居なくなり　明
深酒も修羅場潜って格を上げ　登代子
ジーパンのポケットにある守り札　寿美子

川柳塔きゃらぼく　石垣花子報

あこがれはスープの距離と白い馬　正　子
笛の音に出会って嘘が言われない　ふ　み
流し雛出会いをひとつ乗せていく　日枝子
羽ばたきの音を残して子の巣立ち　伊　都
雨の音きいてロマンを買いにゆく　や　え
耳掃除してから第九が聞え出す　純　子
何事か妙に荒れてる風の音　由美子

追憶の音を溜めてる耳の底　玲子
風の音ききわけて行く森の道　晶子
耳垢の音に今度も騙された　恵子
すっぽりと雨に濡れるか子抱き地蔵　あい子
絹ずれの音も華やぐいい日和　時子
音のない世界で手話が生きている　御前
手の中に亡母へ届かぬ音がある　文世
此の人と出会った道がまだつづく　富美子
一期一会今日の出会いは熱くなる　田鶴
想い出に出会いの彩が描いてある　夕子
出会いがしらまず母のこと父のこと　亜弥
美しい出会いを探す長い塀　荒介
万緑に出会うて単衣着たくなる　てい子
あこがれた都会の虹は消えていた　千春
あこがれた羽根が鳥に重すぎた　八重子
大輪の花にあこがれ土よせる　朗子
あこがれて累々と積む文の数　瑞枝
あこがれの花は人目に晒させぬ　花子
不遜にもみろく菩薩にあこがれる　とも子
かすみ草あこがれぬいて淡くなる　千代

サークル檸檬　松本今日子報

国後の雨を見ている北狐　登美子
雨の日はあじさいいきいき生きている　千代女
不意打ちの雨は出会いを待っている　今日子
土産だけ当にされてるパパとなり　雅子
画にかいた蛙が雨を請うている　智恵子
ここからは急がぬ先がみえている　泰子
雨ごとに心変りのあじさいで　美緒
雨の中あじさい群れて人を待つ　三四子
生真面目さ土産を修道院で買う　薫風

南大阪川柳会　中川　滋雀報

公園に芋植える日は来ぬように　信治
水やれば植木にも有る息遣い　覚然坊
苗植えて明日のあした信じきる　妙子
田植歌知らない嫁の耕耘機　寿美
先生が植えた心に背かれず　雅風
口利いてやれる肩書持ってない　文秋
口利いて話余計にもつれ出し　庸佑
口利きのミスでギクシャクする二人　頂留子
口利いた礼は揃ってやって来る　しんじ
水準はわたしと思うている妻で　度
水準の方が勝手に僕を超え　柳宏子
目なしだるまを置いて水準考える　作二郎
友達になれるぞ水準以下やそや　凡九郎
水準を出るとライバル多過ぎる　新造
やりくりの妻で水準保たれる　慶三
水準へもう五センチがままならず　晴風
水準の稼ぎに父の靴の減り　曲ん手
世間並の暮ししてると思いたし　綾珠
坂道は母の吐息に合わせとく　滋雀
人生双六ときどき連れとも喧嘩する　雀踊子
道連れは美人に限る京の雨　柳伸
中之島鳩も雀も連れがいる　重人
倖せは二人連れもて渡り初め　喜風
鈍行で話がはずむ里訛　善信
犬連れて散歩が出来る余裕もち　春蘭
均等法男まさりの連れが増え　章久
ぬるま湯が好きで妥協癖を持つ　楓楽
ちっぽけな人間にするぬるま湯よ　恒明
ぬるま湯につかって鰐は目をつむり　勝美
カッとする性質でぬるま湯大嫌い　公一

川柳高知　川竹　松風報

寝顔見る父に明日の夢が湧く　幸泉
売上税票の怖さを思い知り　草風
道幅をいっぱい千鳥る花の酔い　節子
余生とは言えないまでも庭いじり　菊野
万才に笑いを貰う日の独り　秋翠
助手席で眠気を覚ます妻の口　春枝
衣替え今年も着ない服がある　孜郎
シナリオが外れっぱなしの二人旅　多鶴
バラ色の夢がふくらむ綿帽子　千鳥
計算の早い明治の五つ玉　竹萌
指出して孫には孫の計算機　功
計算に強い男に友がない　佳風
計算に弱い男の女房運　朱坊
計算はしない親父の太っ腹　一二三
電卓も唸る暗算日本一　かず子
計算がとっても早い小商い　松風

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

山男家ではハトを飼っている　文子
山男の血山へ山へと流れだす　亜弥
山男山を背負って下りて来る　富美子
口ずさむ声力あり山男　岳人
北壁の言葉通さぬ冷えた仲　孝美
北壁は愛想笑いなどしない　雄々
生と死のドラマ北壁妥協せぬ　洋々
ザイル肩にじっと北壁睨みつけ　巡歩
風化した絆に蟻がよってくる　やえ
天皇と同い歳だという絆　石花菜
絆とは犬の鎖のことだろう　完司
おろかにも絆を手操りよせている　とみお
意気込んで山の向うも見たくなる　みど里
藁しべを摑んでからの向う意気　独歩

追いあげる蹄に意気をあふれさす　千代
筆太に男が残す心意気　日枝子
ロボットに出会うと肩を叩かれる　勝美
千羽鶴は千代紙に出会ってから　ふみ
あの本に出会った日から海が凪ぐ　玲子
不信感出会いたくない人ばかり　たつみ
土を踏む目をあこがれる車椅子　みほの
死んでからもきっと美人にあこがれる　蛍
あこがれの人は違った視野にすむ　松女
老い半ばまだあこがれるバラの赤　町紅
父として誓う言葉を考える　弘朗
年月が誓いを空気に変えて行く　雅子
勝つまでの誓いを天井から吊す　瑞枝
花の実がこぼれて明日を誓いあう　田鶴
朝の膳今日の誓いが盛ってある　美智子
追越しも出来ず牛歩の田舎道　よし江
日の丸に理屈はいらぬかしら右　白峰
すれ違う人の心の香が残る　規仔
立止まる気力も欲しい馬車馬よ　節子
老いてなおピンクの似合う肌の艶　春帆
突き放す言葉が勇気試してる　吉朗
NTTそれから気になる株市況　温子
歓楽の哀愁を追う試験管　ただし
私を変えてしまったある出会い　秋女
意気揚揚太郎が父にして呉れた　とも子

うみなり川柳会　森田　熊生報

頷いてコンマが一つずつ打てる　はるお
旅立ちの朝の頷きああ平和　美佐子
頷いて抱き合う肩に涙落ち　幸子
せんべいに鹿も頷く奈良の春　正
過去の傷消える薬がみつからぬ　茂登子
頷いた方が聞き手でまるい酒　小鹿
原爆忌心の傷がまだ疼く　黙光
頷いて鋭い意見返しくる　天雀
古傷はそっとしまって鍵をかけ　唯津子
隣組比べる子がいて気の重く　善堂
比べたら父の爪には敗けるだろう　日枝子
傷を持つ同士の出会いまだこない　行子
頷いてから抜道を考える　蛙泡
比べにはならぬ隣がいて疲れ　富美湖
よその子はみんなかしこい顔にみえ　華子
少しでも大きい方へ手がのびる　雅女
鳥でさえ後にごさぬと子を叱る　よし子
比べると父の意見にそつがない　草人
見比べる癖を直して嫁に出す　独歩
子を守り通した向う臑の傷　静生
太郎のも次郎のも風は腹いっぱい　葉士人
住めば都ビルの谷間に巣をかまえ　雄人
小鳥さえ親子の絆忘れない　貞山
軒借りたお礼今年もつばめ来る　熊生

むらくも句会　藤井　明朗報

人の欲無限にいどむ宇宙船　正朗
相傘でやっと帰った市場かご　芳子
鉢の木が雨がほしいとうなだれる　鶏生
物欲にいつか心の眼がくもり　秀子
ゆっくりと母へつきそう試歩の杖　文子
雨上り旅のカバンも軽くなる　みどり
遺産分け兄弟げんか欲の種　林蔵
入れた歯に食べたい欲をきらわれる　はる代
ひざ交えゆっくり語る久しぶり　武衛
里帰り欲得もなく眠りこけ　よし子
欲張って良縁いつしか通り過ぎ　ヤス子

土居耕花氏（岡山県）より
句集「やっこ凧」出版記念として
金一封ご寄贈いただきました。
川柳塔社

食欲に生きて楢山遠く置く　千里
知識欲ある子か何んでも知りたがり　竹乃
また探すめがね頭の上にあり　吉野
ささやかな欲　一合の酒に酔う　義良
雨降りへ相合傘がよく似合い　幸子
見栄すててから気楽な肩になる　三津江
降りそうで降らない雨に気がもめる　ゆき子
雨止んで善意の傘が戻らない　峰雪
欲すててひとのお世話の出来る幸　明朗

聴障川柳　稲田　豊作報

思慕一途いつかは消える虹を描き　豊作
極楽へ仏のかけた虹の橋　一晄
Uターンの再出発にかける虹　和江
はかなきは人の命と虹の橋　進一
初恋の涙に濡れて消えた虹　八重子
虹の字が虫偏なのは何故でしょう　行江
下積みに耐えてあしたの虹を抱く　三香
虹を追う石ころ道の自転車よ　珍顔
中空に雨の晴間を浮かぶ虹　みつる
若き日の虹を心の隅に置く　たみ
虹を見て取っておくれと孫が言う　鉄火
初恋は遠い昔の虹でした　広行
虹立てば農夫喜ぶ雨期となり　健太郎

8月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
尼崎 いくしま	7日(金) 午後1時半より 偲ぶ・浴衣・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田渕定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川柳塔 まつえ	8日(土) 午後1時半より 泳ぐ・失敗・姿	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	8日(土) 午後1時半より 荷・二階・苦い・人間	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2—9—2 河内天笑
川柳 わかやま	9日(日) 午後1時より 潮騒・飛ぶ・鋏	紀の国会館2F（和歌山県民文化会館西隣） 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	10日(月) 午後1時より 億・善・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
八尾市民 川柳会	11日(火) 夕6時より 平凡・都合・拾う・爪	八尾市労働会館 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141 飯田悦郎
川柳 ねやがわ	16日(日) 正午より 脱線・禅・素足・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	17日(月) 午後1時より 言葉・近い・ボロクソ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3、5-801 田中正坊
南大坂 川柳会	19日(水) 夕6時より へそ曲り・名物・選ぶ・練習	寺田町高松会館 JR環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
富柳会	20日(木) 午後1時より 王様・大穴・和尚	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南海電鉄 川柳会	20日(木) 夕6時より 噂・瓜(ウリ)・宿題	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木) 午後1時より 風鈴・あなどる・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急京都線高槻下車歩5分 〒569 高槻市明野町15－27 上原 逸 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
川柳 東大坂	22日(土) 夕6時より 走る・朝・覗く・仏	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4—14 斉藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	24日(月) 夕6時より 都合・筋書・封筒・気まぐれ	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596 岸和田市荒木町1—29—1 宮園射月芳

本社8月句会

日時 八月七日(金) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題
おはなし　野村太茂津
「空想」　西山幸選
「北」　板尾岳人選
「名刺」　阿萬萬的選
「笑う」　大坂形水選

席題 二題 当日発表 **各題三句以内厳守**
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず**氏名明記**。
投句料 **300円**(60円切手5枚)同封のこと。

川柳塔社

9月の兼題 「シャツ」「舌」「先頭」「輝く」

9月の本社句会は7日(月)

『夜市川柳』募集

第3回「白」　後藤正子選
3句・締切 8月末日

第4回「時間」　高須賀金太選
締切 9月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二―九―二
河内天笑方
堺川柳会

●募　集●

十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)
「手紙」　西口いわゑ選
「壺」　小林妻子選
「賭ける」　小西雄々選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十一月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)
「狙う」　西村早苗選
「争う」　野田素身郎選
「家族」　赤川菊野選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

8月の常任理事会は1日(土)

定価 五百円(送料50円)
半年分 **三千二百円**(送料共)
一年分 **六千三百円**(送料共)
昭和六十二年七月二十五日印刷
昭和六十二年八月一日発行
編集兼発行人 西尾巖
印刷所 藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 **川柳塔社**
電話 (六)六三九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆滞りなく相済ませましたという挨拶は、告別式や法事のあとの、関係者のほっとした気持を端的に表わしている。文字通り滞りなくとはいかなかったし、予想を越えるご来会を得て、楽屋裏はいささか混乱した。

☆路郎先生から「川柳は、君、情熱だよ」と励まされたことで、これを生涯のモットーとしている山内静水氏の不参は、無念であったろう。体調の速やかな回復を祈ります。氏の代選をして頂いた八木千代さんは、きゃらぼく川柳会のメンバーと前々日から来阪、前日は高知から遠来の赤川菊野さんをまじえ、われわれ先発隊とともに高野山一番乗り、その上、記念品袋の作成まで手伝って頂いた。

☆弘津柳慶さんも路郎先生ご夫妻を知る今では数少ない一人だが、早々に到着、霊山の空気をたのしむ風情だった。

☆私は、その夜、仏間で、「川柳人物史「麻生路郎」の原稿を書いた。NHK学園から発行の「川柳春秋」に掲載される予定。仏縁を思いながら書いた。

☆追悼大会の盛大さは、三先生の行蹟遺徳にもよるが番傘川柳本社、ふあうすと川柳社、時の川柳社、その他の柳社のご支援のたまものでもあり、心からお礼を申し上げます。

☆栞主幹の鶴の一声から始動した高野山の法要と大会は、発表して半年、二度の打ち合わせに普賢院を訪れたが、森寛紹師には、その都度心からの厚遇を得た。厳しい修行で養われた威と和の光る眼指しで、淡々と語られるお話に、二百五十人は深い感銘を抱いた。

☆田中好啓、寺尾俊平両氏が普賢院前の喫茶店で述懐された言葉は「川柳塔へは他社の者でも、すっと溶け込んで行ける」であった。

☆路郎先生の時代の威から栞主幹の指向される和に、川柳塔は変貌して輪を広げて行く。

☆遠来の参加者の多かった追悼大会、ご支援ありがとうございました。（薫）

▼餃子（ぎょうざ）を初めて食べたのは戦時中のことで、聯隊本部の酒保があった本場中国でのことだった。そこではぎょうざとは言わずジャオズと言っていた。何を食べてもうまい若い胃袋は、すぐにその味にとりつかれた。太平洋戦争も終戦という格好のよい名で幕を下ろされ、戦後のどさくさで忘れていた餃子が一般に知られるようになったのは、食生活も一応落ちついた昭和三〇年代後半のことだったと思われる。

▼今では餃子の専門店もあり、スーパーの冷凍食品にも並ぶようになった。食文化の伝播も戦さによってもたらされるようである。

〝約束の逢う人もなし餃子食う〟こんなある日、K大学のある駅前の餃子専門店に入った。土地柄、Tシャツ、ジーパン姿の学生たちの客で賑わっていた。レジスターの横の卓でビールを飲み餃子を食べていると、勘定を終った学生が「ご馳走さん！」と言って出てゆく。われわれの年代は口癖になっているので何の抵抗もないが、若い学生からこんな挨拶を聞くのは意外だった。よほど躾のよい家庭の子なのだろうと思っていた。ところが十組ぐらいの学生の中に二人いた。自分の子を除いて若者と言えばだらしないと思い込んでいた概念が如何に間違っていたかがわかる。彼らはアルバイトによって世の中の挨拶を覚えたらしい。（き）

☆ここ数年、年を追って目の調子が悪く、小さな文字を見ることが苦痛になり、当然のことながら読書量がガタ落ちになってしまった。本を読まない生活は、クリープを入れないコーヒーより何倍も味気ない。何か他に目を使わないで済む愉しみはないか、というわけで、近頃、関心は専らCDに向けられている。

☆時間潰しに本屋めぐりがレコード屋めぐりに変り、新刊紹介よりも新譜紹介の新聞記事が目につくようになり、気に入ったおもちゃをあてがわれた子どものように、喜々として直径十二センチの円盤と遊んでいるうちに、音楽を愉しむのも結構、目を使うことに気づいた。

☆CDのケースの背文字は大体、文庫本や新書本と同じ大きさか、或いはそれより小さい。ものの五分も店頭で見つづけるのは、かなり苦痛である。本屋で単行本を探す方が、よほど楽だ。

☆それにCD付録の解説文がこれまた小さな活字。写植文字でいえば10級ぐらいときているから厄介。何れにせよ〝視覚から聴覚へ〟などとイキがって始めてみたものの目を休ませることに大して役立っていない。

☆まあ、あまり理屈をこねず、素直にCDの素晴しい音を愉しもう。〝誰に遠慮気兼ねなくショパンのフォルティシモを聞ける〟部屋がないのは残念だが。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十二年七月二十五日　印刷
昭和六十二年八月一日発行（毎月一日発行）

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社大一エスケー
〒540　大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941) 8015

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店　サンストア中之島店　なんば新川店
梅北高島屋百貨店　サンストア淀屋橋店　虹のまち店
京都高島屋百貨店　アベノ近鉄百貨店　ドーチカ店
阪神百貨店　上本町近鉄百貨店　南海難波駅店
松坂屋百貨店　東大阪近鉄百貨店　国鉄大阪駅店
そごう百貨店　奈良近鉄百貨店　梅田大丸百貨店
京阪モール店　京都近鉄百貨店　堺東店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL 641－0551